

田辺町埋蔵文化財調査報告書 第1集

京都府綴喜郡田辺町

古屋敷遺跡・飯岡横穴
発掘調査報告書

付載 飯岡東原古墳 発掘調査報告書

1980・3

田辺町教育委員会

田辺町埋蔵文化財調査報告書 第1集

京都府綴喜郡田辺町

古屋敷遺跡・飯岡横穴
発掘調査報告書

付載 飯岡東原古墳 発掘調査報告書

1980・3

田辺町教育委員会

序

ここに刊行した『古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告書』は、関西電力株式会社の奥吉野線の鉄塔建替え工事にもなつて実施した関係地域の遺跡発掘調査の報告書である。

この調査にあつては、関西電力株式会社の全面的な援助のもとに、田辺町教育委員会が庶務主体となり、発掘調査を昭和52年12月に同志社大学校地学術調査委員会に依頼したものである。

南山城地方の中でも数多い遺跡をもつ田辺町であるが特に木津川左岸周辺部の埋蔵文化財の解明には、町内外から大きな期待と関心が寄せられていた。大和・奈良から南山城地方に至る古道と山本駅跡、さらにこの地方に残る条里制の跡を水田地下に探ることも大きな目的のひとつであつた。

特に、同志社大学で考古学を学ぶ多くの学生諸君が町内の三つの宿舍に分宿して、文字どおり日夜にわたる情熱をこの発掘調査に傾けていただき、とどこおりなく発掘調査は遂行されたのである。

おわりに、本調査の主任として指導と指揮をとつていただいた同志社大学校地学術調査委員会の鈴木重治先生に深甚なる感謝を申しあげるとともに、顧問としてしばしば来町され御助言くださった同志社大学の森浩一教授にも重ねて厚く感謝を申しあげるものであります。

昭和 55 年 3 月

田辺町教育委員会

教育長 藪下 撤 一

古屋敷遺跡・飯岡横穴

発掘調査報告

例 言

1. 本書は、関西電力株式会社の奥吉野線鉄塔建替え工事に伴って実施した、京都府綴喜郡田辺町古屋敷遺跡ならびに飯岡横穴の発掘調査報告書である。

1. 発掘調査は、昭和53年2月26日から同年4月10日にかけて実施した。

1. 調査の主体者は田辺町教育委員会（教育長飯下徹一）であり、調査にあたっての事務的な処理は、田辺町教育委員会社会教育課長古川章、同課主事田辺宗一が行なった。

1. 発掘調査は、田辺町教育委員会の依頼を受けて同志社大学校地学術調査委員会（委員長松山義則（当時））が行なった。

1. 発掘調査は、同志社大学文学部森浩一教授の指導的な助言の下に、同委員会調査主任鈴木重治が担当した。

なお、調査には同大学文学部考古学研究室が協力し、同研究室の下記の学生が参加した。

(W地点) 古森政次、伊藤昌輝、石川直章、長谷川俊幸、服部伊久男

(E地点) 中井 公、加藤 謙、久保弘幸、仲田茂司、山田邦和

(飯岡横穴) 真鍋昌宏、小林令子、大竹弘之、池田宏子、木下規子、平井幸世

また、同研究室の、坪之内 徹、福島雅義、木村有作、麻柄一志、藤田三郎の協力があった。

1. 遺物の整理及び本書の作成は、調査参加者全員であたり、福田英人の助力を得た。

1. 遺物整理にあたっては、同志社大学文学部考古学研究室より場所の提供を受けた。

1. 本書の執筆者はその文責を目次に明らかにし、編集は、校地学術調査委員会調査主任鈴木重治の指導によって、坪之内 徹、中井 公、大竹弘之、山田邦和が行なった。

1. 発掘調査及び本書の作成にあたっては、下記の名氏から協力や助言をいただいた。記して謝意を表したい。

(奈良県立橿原考古学研究所) 石野博信、白石太一郎（当時）、前園実知雄、河上邦彦、

中井一夫、関川尚功

(同志社大学校地学術調査委員会) 松藤和人

1. 発掘調査にあたっては、奥西幸夫氏（草内郵便局長）に宿舎の提供を受け、また同志社女子大学田辺学舎の利用については、高木友章氏にさまざまな面でお世話をかけた。

目 次

第1章 調査の目的と周辺の遺跡	7
第1節 調査に至るまでの経過と問題点	(鈴木重治) 7
第2節 調査の目的と歴史的環境	(鈴木重治) 8
第2章 古屋敷遺跡他の調査	13
第1節 調査地点と発掘区の設定	(中井 公) 13
第2節 調査の経過	(伊藤昌輝) 18
第3節 W地点の調査	19
1 層序の観察と遺構	(古森政次) 19
2 出土遺物	(古森政次, 長谷川渡幸, 服部伊久男) 23
第4節 E地点の調査	34
1 層序の観察と遺構	(中井 公) 34
2 出土遺物	(加藤 謙, 久保弘幸, 仲田茂司) 39
第5節 小結 一畦畔遺構の実年代について	(中井 公) 48
第3章 飯岡横穴の調査	51
第1節 調査地点と発掘区の設定	51
1 従来 の 調 査	(大竹弘之) 51
2 位置と環境	(山田邦和) 51
3 調査の方法	(大竹弘之) 57
第2節 調査の経過	(大竹弘之) 59
第3節 主体部の調査	60
1 横穴の構造	(真鍋昌宏) 60
2 横穴内の土層の堆積	(大竹弘之) 63
3 出土遺物	(大竹弘之) 68
第4節 周辺トレンチの調査	78
1 各トレンチの土層の堆積	(大竹弘之) 78
2 出土遺物	(大竹弘之) 82
第5節 小 結	(真鍋昌宏, 大竹弘之) 88
第4章 結章にかえて	91
— プラントオパール及び鉱物組成の分析にふれて—	
文 献 目 録	94

挿 図 目 次

第1図	調査地点と周辺の遺跡	10
第2図	調査地点周辺の条里復原図	14
第3図	飯岡丘陵周辺の遺存地割による条里復原図	15
第4図	W地点・E地点発掘区位置図	17
第5図	W地点、主トレンチ・畦畔遺構追認トレンチ 土層図・平面図	21～22
第6図	W地点主トレンチ第Ⅲ層・第Ⅳ層出土遺物	25
第7図	W地点主トレンチ第Ⅴ層上面溝状遺構出土遺物	25
第8図	W地点主トレンチ第Ⅴ層出土遺物	26
第9図	W地点主トレンチ第Ⅴ層・第Ⅵ層出土遺物	28
第10図	W地点主トレンチ第Ⅵ層出土遺物	30
第11図	W地点主トレンチ第Ⅵ層出土遺物	32
第12図	W地点主トレンチ第Ⅵ層出土遺物	33
第13図	W地点畦畔遺構追認トレンチ第Ⅵ層出土遺物	33
第14図	E地点、主トレンチ・東畦畔遺構追認トレンチ・ 西畦畔遺構追認トレンチ 土層図	35～36
第15図	E地点表採遺物、主トレンチ第Ⅰ層・第Ⅱ層出土遺物	41
第16図	E地点主トレンチ第Ⅲ層出土遺物	44
第17図	青銅銭拓影	46
第18図	E地点主トレンチ第Ⅲ層・第Ⅴ層出土遺物	47
第19図	飯岡古墳群分布図	52
第20図	飯岡横穴地形測量図	53～54
第21図	飯岡横穴トレンチ配置図	55～56
第22図	横穴内地区割	58
第23図	飯岡横穴実測図	61～62
第24図	横穴平面プラン模式図	63
第25図	横穴内の土層の堆積	65～66
第26図	第Ⅲ床面（石敷）実測図	67
第27図	飯岡横穴内出土遺物 (1)	69
第28図	飯岡横穴内出土遺物 (2)	71
第29図	飯岡横穴内出土遺物 (3)	73
第30図	飯岡横穴内出土遺物 (4)	76
第31図	第Ⅰトレンチ、第Ⅱトレンチ、第Ⅲトレンチ各土層図	79～80

第32図	第Ⅲトレンチ平面図	81
第33図	第Ⅳトレンチ, E区東拡張トレンチ, 第Ⅴトレンチ各土層図	83~84
第34図	第Ⅵトレンチ, 第Ⅶトレンチ, 第Ⅷトレンチ, 第Ⅸトレンチ各土層図	85~86
第35図	各トレンチ出土遺物	87
第36図	第Ⅸトレンチ出土遺物	88
第37図	E地点プラントオパール顕微鏡写真	92

挿 表 目 次

第1表	W地点出土遺物年代表	49
第2表	E地点出土遺物年代表	49
第3表	瓦器編年対照表	72
第4表	E地点プラントオパール定性分析表	91
第5表	飯岡横穴出土白色物質主成分分析値表	93
第6表	W地点出土クサビ形鉄製品表面赤色物質主成分分析値表	93

図 版 目 次

図版 1	遺跡付近航空写真
図版 2	W地点 1. 主トレンチ全景(北より) 2. 主トレンチ第Ⅳ層遺物(瓦器碗)出土状態
図版 3	W地点 1. 主トレンチ現駐畔東壁 2. 駐畔遺構追認トレンチ現駐畔東壁
図版 4	W地点 出土遺物(1)
図版 5	W地点 出土遺物(2)
図版 6	E地点 1. 主トレンチ全景(西より) 2. 東側駐畔遺構追認トレンチ全景(南より) 3. 西側駐畔遺構追認トレンチ全景(南より)
図版 7	E地点 1. 主トレンチ東側現駐畔下北壁 2. 東側駐畔遺構追認トレンチ現駐畔下北壁
図版 8	E地点 1. 主トレンチ西側現駐畔下北壁 2. 西側駐畔遺構追認トレンチ現駐畔下北壁
図版 9	E地点 出土遺物
図版10	飯岡横穴 1. 横穴遠景(南より) 2. 横穴近景(東より)

- 図版11 飯岡横穴 1. 開口部上層堆積状況（東より）
2. 横穴内第Ⅲ床面（開口部より）
- 図版12 飯岡横穴 1. 横穴内遺物出土状況（1）
2. 横穴内遺物出土状況（2）
- 図版13 飯岡横穴 1. 横穴奥壁の状態（開口部より）
2. 横穴西壁の状態（開口部より）
3. 横穴西部の状態（内部より）
- 図版14 飯岡横穴 1. 横穴床面のピット（開口部より）
2. 横穴床面のピット（内部より）
3. 横穴東袖部俯瞰
4. 横穴東袖部拡大
- 図版15 飯岡横穴 1. 横穴開口部（東南より）
2. 横穴開口部（南より）
3. 横穴開口部（南西より）
- 図版16 横穴出土遺物（1）
- 図版17 横穴出土遺物（2）
- 図版18 横穴出土遺物（3）
- 図版19 横穴出土遺物（4）

第1章 調査の目的と周辺の遺跡

第1節 調査に至るまでの経過と問題点

田辺町教育委員会に関西電力株式会社より発掘調査の依頼があったのは、1977年の秋であった。田辺町内の南部を東西に横断する高圧送電線奥吉野線の鉄塔付管工事に伴うものであり、該当する遺跡は、飯岡古墳群の所在する飯岡丘陵の東南部に位置する飯岡横穴と、近鉄京都線三山木駅の東北に広がる古屋敷遺跡の2地点、計3ヶ所である。飯岡横穴も古屋敷遺跡もともに京都府遺跡地図に記載され古くから知られている遺跡だけに、田辺町教育委員会は、問題を重視し、京都府教育委員会の指導を受けるところとなった。

その結果、発掘調査を同志社大学に依頼することが望ましいとの判断を得て、社会教育課長古川氏、社会教育課田辺宗一氏の両者が、同志社資料館収蔵庫を訪ね田辺町教育委員会の意向を伝えるところとなった。そこで鈴木はただちに同志社大学文学部森浩一教授に報告し、検討に入った。年内に調査を完了して欲しいとの関西電力株式会社の要望もあったが、同志社大学が調査を引き受ける場合、年間の計画もあることから年内の調査は無理であり、新年に入ってからなら検討してもよいとの返答を森教授の見解として、教育委員会に伝えたわけである。新年に入ってから調査でもよいとの意向が関西電力株式会社より示されたことから田辺町教育委員会は、正式に同志社大学に調査を依頼した。

これより同志社大学校地学術調査委員会が開かれ、調査を受け入れるかどうか、引き受けた場合、その対応を含めて協議されることとなった。

協議の結果、同志社の田辺校地内に存在する天神山遺跡、下可古墳群、都谷遺跡をはじめとする遺跡群を理解する上でも関連資料として無視できないばかりか、田辺町教育委員会の判断を尊重して、発掘担当者を鈴木とすることで同志社大学校地学術調査委員会が調査を引き受けることを決定した。

鈴木は校地学術調査委員会の決定により、田辺町教育委員会に調査を引き受けることを伝えるとともに、飯岡横穴については学史的にもまた南山城の特異な横穴としても重要であることから、可能なかぎり保存する方向で検討し、併せて周辺の横穴存否の確認を含めた調査とすること、古屋敷遺跡については、京都府遺跡地図に記載されているが、その範囲については明確でないこと、さらに奈良時代の須臾器や瓦が採集されていることから、和銅四年に設置された山本の駅をはじめ、条里制の遺構、水田址などにも関心がもたれるという多様な問題点が存在するが、限られた調査区域のため、発掘区に集中した観察と関連資料にも注意し、更に自然科学上の考察を要する場合は、発掘担当者の判断で実施するとの申し合わせがなされた。なお調査の対象地点は、田辺町大字飯岡小字久保田6-2、7-1、8-5、同小字小山10-7及び大字三山木小字角田30-2、31-2、

第2節 調査の目的と歴史的環境

同小字下河原4-2, 2-2に属している。

第2節 調査の目的と歴史的環境

発掘調査に先立って、遺跡周辺の歴史的環境と考古学上の問題点について調査参加者が共通の理解をもち、更に調査の目的を確認した上で調査方法をつめるための検討会をもった。更に遺跡周辺の踏査も実施した。歴史的環境については、南山城の遺跡分布をとりあげ、過去の研究史を概観した上で飯岡横穴については、南山城に散在する6世紀後半から7世紀にわたる横穴のうちでも、花崗岩を削り抜いた例として梅原末治氏の報文(梅原末治 1920a)以来その存在が知られながら未調査のまま現在に至っており、その規模や構造についても不明であることから、記録化が要請され更にその構築年代や再利用の実態に加えて周辺の横穴分布の存否をとらえることの必要性が確認された。ここに飯岡横穴の調査上の目的が置かれたわけである。

一方、古屋敷遺跡については、周辺の字地名に五の坪池や八の坪、八反坪などの条里地名を残すことや、一定の方向性を示す地割が多く、現況からも条里に関する問題をもつこと、調査予定地内に現水田の畦畔がみられることから、その直下の堆積状況を含めた観察をすることで、水田址を示す遺構の確認とその変遷を追求することなどを主要な調査目的としたわけである。

なお調査中に飯岡在住島義和氏の厚意により通報された東原古墳出土資料については、ただちに遺物の発見届を出すと同時に京都府教育委員会の堤圭三郎氏と連絡をとった結果、緊急調査として対応して欲しいとの要請を受けたことから、すでに大部分が破壊された古墳ではあったが飯岡古墳群中に後期古墳の一つが加わることで古墳群の構成に貴重な資料を提供することが確実なため、客観的な記録化を目的として対応することとした。なお周辺の歴史的環境と考古学上の問題点については遺跡の分布をはじめとしておおむね次のようにとらえたわけである。

従来の調査によって知られている石器時代の遺跡は南山城全城を通じてもそれ程多くはない。旧石器時代の遺跡では八幡市の美濃山遺跡や金右衛門垣内遺跡からサマカイト製の厨府型ナイフ形石器やその素材となる翼状剥片、城陽市の久世芝ヶ原遺跡からサマカイト製の角錐状石器やチャート製の小型ナイフ形石器、更に最近に至って田辺町天王より採集された榎石技法によるサマカイト製石核などが知られているのみで、その実体が不明であるため分布調査を含めた基礎的な作業が必要である。

新石器時代に入ってから遺跡については、井手町井手開、宇治田原町奥山田などの縄文時代草創期の資料に加えて、縄文時代前期の土器を出土している山城町湧出宮南、前期から中期初頭に主体のある井手町島体遺跡、石棒の出土地として知られる後期の田辺町三木山木崎(梅原末治 1923a)、後期の住居址が発掘されている城陽市森山遺跡などが代表的であるが、全体を通じて資料自体が少なく、断片的な資料のみが散在している点では旧石器時代と同様に基礎資料の蓄積と将来の発掘調査に期待するところが大きく、個々の遺物の観察が可能であっても、遺跡群としての地域性の問題をはじめ多くの課題を残している。

弥生時代に入ってから遺跡についても発掘資料が多いとはいえ、住居址を含めた遺構・遺跡の観察が進められたのは、田辺天神山遺跡を除いては重視される例が少ない。ただこの時代の資料は表面採集資料によって分布調査がある程度進められており、特に生駒丘陵から北に延びる男山丘陵までの東側斜面と木津川右岸の段丘上の遺跡群から採集されている資料を通じて、近江系、伊勢・伊賀系、河内系などの土器が問題とされている。今回の発掘地点にも近い天神山遺跡(森浩一編 1976)については高地性集落の南山城における代表的な例として知られているばかりか12戸の竪穴住居址が保存されていて、いまなお住居址の構成を現地で観察し得る点で、畿内全域を通じて貴重な存在となっている。また天神山遺跡とはほぼ同時期の遺跡が飯岡横穴と東原古墳の中間地点にあって竪穴住居址が検出されており、現在までに知られている飯岡丘陵の最古の土地利用を示している(森浩一・大野左千夫 1976)。なお周辺から弥生時代の土器片が採集されていることもあって今回の調査に当たっても弥生時代の資料が問題点の一つに留保されたのは当然である。

古墳時代に関する南山城の調査は、学史的にも重要なものがあり、その中でも戦前調査された飯岡古墳群(梅原末治 1920 a, 同 1938)、久津川古墳群(梅原末治 1920 b)、戦後の調査では榎井大塚山古墳(梅原末治 1964)、西山古墳(堅田直・白石太郎 1962)、冨山古墳群(堤圭三郎 1967)、上大谷古墳群(岡本一士編 1977)などは重要であり、それぞれ地域史を理解する上で欠かせない資料をもたらしている。その他、田辺町内では興戸古墳(梅原末治 1955)、下古墳群(堤圭三郎 1964)の発掘資料に加えて大住塚古墳(万波俊介 1972)が実測の結果前方後方墳であることが確認された点は、現在まで知られている木津川左岸の稀有な例だけに、城陽市内に散在する西山古墳をはじめとする前方後方墳と対比して貴重な資料となっている。

また南山城では中期までの首長墓についての調査がよく進められたのに対して、後期古墳の調査例が少ないことはややもすると跛行的な感があり、このことから後期古墳自体の量的な少なさを特に指摘するむきもあるが、調査例の少ないことと、分布の稀薄さとは別であり、踏査によって相当数の古墳が確認されてきたことは無視できない。井手町に例を挙げれば、1972年の『京都府遺跡地図』(京都府教育委員会 1972)では古墳の総数を32基としているが、最近の踏査(奈良大学考古学研究会 1978)によって30基が新たに追加されており、しかも前期古墳や中期古墳ではなく、すべてが後期古墳であることは重視されてよい。このことは横穴式石室の少ない地域ではなく後期古墳の調査が遅れている地域と見ることを妥当としている。従って横穴を含めた古墳時代後期の墓制の研究がこの地域の課題の一つであることは当然である。

なお田辺町内の新地区から大住地区にかけての丘陵地に分布する横穴について南九州の単人との関係が考えられている(森浩一 1975、平良泰久 1975)が、このことは西田直二郎氏によって指摘された正倉院計帳にみられる大住単人についての見解(西田直二郎 1951)に導かれているものであり、考古学的な遺構・遺物による実証的な研究は此後に残された問題である。文献の登場する時期の考古学的な資料は南山城でも主として、寺院址や宮殿址からもたらされている。南から北へ進むと、木津川周辺では高麗寺(梅原末治 1919)、山城園分寺(角田文衛 1938)、恭仁宮(中

第2節 調査の目的と歴史的環境



第1図 調査地点と周辺の遺跡
(国土地理院5万分の1地形図、京都東部・奈良より)

- | | | | |
|----------|---------------|-----------------|---------------|
| 1. W地点 | 2. B地点(古屈敷遺跡) | 3. 飯岡横穴 | 4. 飯岡古墳群(破線内) |
| 5. 興戸廃寺 | 6. 田辺天神山遺跡 | 7. 都谷遺跡 | 8. 下町古墳群 |
| 9. 普賢寺 | 10. 山崎遺跡 | 11. 三山木廃寺 | 12. 下狛廃寺 |
| 13. 里廃寺 | 14. 井手寺 | 15. 鳥休遺跡 | 16. 光明山廃寺 |
| 17. 蟹渡寺 | 18. 湯出宮南遺跡 | 19. 久津川古墳群(破線内) | 20. 芝ヶ原遺跡 |
| 21. 久世廃寺 | 22. 正道遺跡 | 23. 曾山古墳群 | 24. 大住車塚古墳 |

谷雅治・安藤信策・高橋美久二 1975, 中谷 1976, 中谷・上原真人 1977, 中谷・上原・大槻真純 1978, 1979), 馬廐寺, 下粕廐寺, 三山木廐寺(梅原末治 1920 c), 普賢寺(佐藤虎雄 1930), 興戸廐寺, 蟹満寺(岩井武俊 1906, 角田文衛 1936), 光明山廐寺(岩井 1906, 角田 1936), 井手寺(梅原末治 1923 b), 志水廐寺(江谷寛 1978), 正道遺跡(高橋美久二・近藤義行 1973), 久世廐寺・平川廐寺(山田良三 1968)などがあげられる。これらの寺院址からは、飛鳥時代から平安時代にかけての古瓦が出土しているが、発掘調査などによって遺構の知られている寺院址は少ないがそれでも高麗寺, 山城国分寺, 恭仁宮大極殿址, 正道遺跡, 久世廐寺などで古くから知られている礎石群や新たに検出されたガラン配置の一部などは重要な資料をもたらしている。これら南山城の寺院址からは、大和・河内・摂津などとともに関東の地域が他の地域にさきがけて早くから寺院の造営がおこなわれた地域であることがうかがえる。

一方伝世している仏像についても、白鳳期の釈迦如来として知られる蟹満寺の仏像は、山田寺の仏頭と薬師寺の薬師三尊像を結ぶ線上の作品といわれ、また普賢寺の十一面観音は天平の仏として仏教美術史上でも貴重な例と考えられている。

これらのことを含めて考えると、奈良時代の官道としての山陰道の位置や、「続日本紀」の記述で知られる和銅四年設置の都京原のうち、相楽郡の岡田の駅, 綴喜郡の山本の駅的位置, 更に古代の地割りとしての条里についても考古学的な観察の基礎となる遺構の確認や検出に問題が残されていることが知られる。この分野については、歴史地理的な考察がすすめられているが、なお位置の確定にはいたっていない。このうち基礎的な作業として大正7年に中川修一氏によってなされた綴喜郡内の条里についての復原作業(中川修一 1914)は、今回の発掘調査地点のうちの古屋敷遺跡周辺の地割りにもかかわらずを示すことから、遺跡の観察にあたっては関連資料として問題点の一つに位置づけて置く必要があった。藤岡謙二郎(1948), 谷岡武雄(1958), 桑原公徳, 足利健亮氏らの歴史地理的な考察などからは、廻廊的な性格をもつ南山城は、渡来人の活動もあって耕地の開墾が大化前代から行なわれ、木津川流域の殆んどの低地に条里地割りが施行されたことが示されている。

一方、式内社の分布についてみても、綴喜郡内の式内社が田辺町内に集中していることもみのがせない。古代から中世にかけての交通路を考える場合、大和から近江へ、また大和から長岡京や平安京への往来についてもそれぞれ綴喜郡を通過するだけに、この地が歴史上交通の要所となっていたことはよく知られている。一例をあげれば山城国一揆にあたって南山城の宇治郡・久世郡・綴喜郡・相楽郡などの国人の要求のうちに、関所の廃止があり、このことは同時に関銭の取入が畠山政長らの財源として大きな意味をもっていたことを示すと同時に、交通路としても政治的にも重要な位置を占めていたことを物語る。更に中世から近世にかけての農地の開墾が木津川をはじめとする河川によって形成された沖積平野部にみられた古代的な地割りを踏襲しつつ展開され、また天井川の築堤に伴う耕地への影響をみることで自然地形に加えられた人為的な土地利用が部分的な土地景観の変遷を示すことにもなっている。

南山城を歴史上の舞台としてみると考古学的には中・近世を対象とした発掘調査が都谷遺跡

第2章 調査の目的と歴史的環境

(鈴木重治・松藤和人編 1977)を除いて皆無の状況にあるため、生産遺跡を含めた中・近世の調査に期待されるむきの大きいことも問題点となっている。このようにして周辺の歴史的環境をみると、考古学的には空白の分野が多く、今回の調査がもたらす資料的価値も意義あるものとなるう。

第2章 古屋敷遺跡他の調査

第1節 調査地点と発掘区の設定

発掘調査を実施した2地点は、共に『京都府遺跡地図』（京都府教育委員会 1972）に「周知の遺跡」として記載された範囲内の一画を占めている。

W地点は三山木に所在する南北約 300m・東西約 200m程の遺物散布地内の北東部に位置し、従来より、奈良時代後半期に属する土師器・須恵器の散布が知られていた。

一方、E地点は山本古屋敷に所在する「古屋敷遺跡」にあたり、南北約 500m・東西約 200m程の範囲内の北東部に位置し、従来より、土師器・須恵器・丸瓦・平瓦等、奈良時代に属する遺物の散布が知られてきた。

しかしながら、両遺跡においては、これまでに本格的な発掘調査がなされたことも無く、遺跡の性格その他の詳細は全く不明であった。かかる状況から、今回の調査は、その主眼が遺跡の性格を解明する手懸りとなる遺構・遺物の検出に置かれたことは言うまでもなく、確認調査としての体裁をとるものとなった。

ただ、その一方で、この両遺跡を含め綴喜郡一帯の平地における土地区画は、可視的に通常「条里景観」として捉えられている。一般に古代条里制の遺制として解釈されるこうした土地区画との関係をも含めて、土地利用の変遷を解明する手懸りを得ることも、本調査に期待されることのひとつであった。

ところで、南山城地域における条里的景観の研究については、中川修一・藤岡謙二郎・谷岡武雄の諸氏によるものが知られている。中川氏の研究は、古く大正3年に発表されたもので、当時の小字地名などをとくに田辺草内付近の条里坪並の復原を試みられたものである（中川修一 1914）。その後、中川氏の研究成果をも踏まえ、南山城全域に亘る復原の研究が明らかにされているが、藤岡謙二郎・谷岡武雄氏によるこうした研究は、いずれも敗戦後のものである（藤岡謙二郎・谷岡武雄 1948、谷岡武雄 1958、谷岡武雄 1973）。

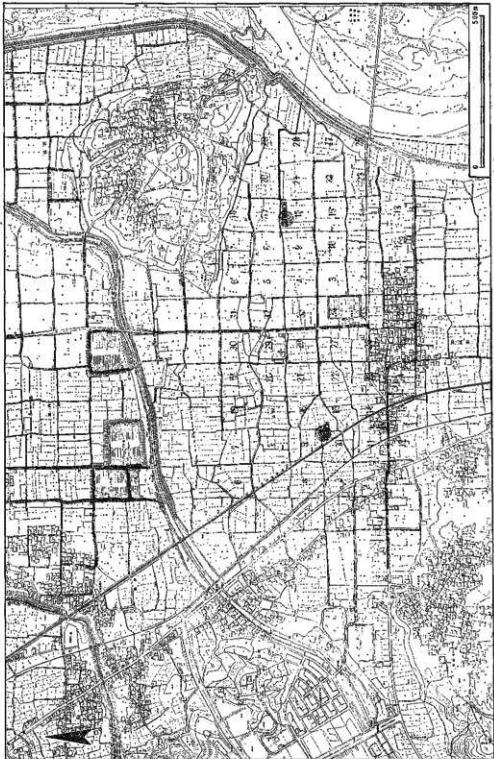
ここでは、谷岡氏の復原された綴喜郡条里の坪並をもとに、両発掘地点が「条里景観」に占める位置についても触れておきたい。

谷岡氏による綴喜郡の条里復原図（谷岡武雄 1973）は、第2図に示したとおりであるが、これによると、綴喜郡では、六町方格の大区画をなす「里」は南から北へ向って「条（数詞）」を数え進んでいる。その際、通常の条里地割であれば、西から東へ「里（数詞）」を数え進むことになるが、綴喜郡における「里」は固有名詞が用いられたようである。谷岡氏は、永久元年（1069）十二月の「玄蕃寮様家置^{（一）}」、『平安遺文』一八〇一）に記載された里名・坪名に注目しておられる。具体的には、「井出里」・「玉井里」・「山本里」・「河西山本里」・「市辺里」・「草内中村里」など多く

第1図 調査地点と発掘区の設定



第2図 調査地点周辺の糸巻復原図



第3図 飯岡丘陵周辺の遺存地図による条里能原図 赤○印は築館地を示す

第1節 調査地点と発掘区の設定

の里名が認められるのであるが、谷岡氏はこれを条里遺制としての「里」と解釈されるわけである。ただ、その「里」名の全てが、今日の土地区画に的確に比定されているわけではない。

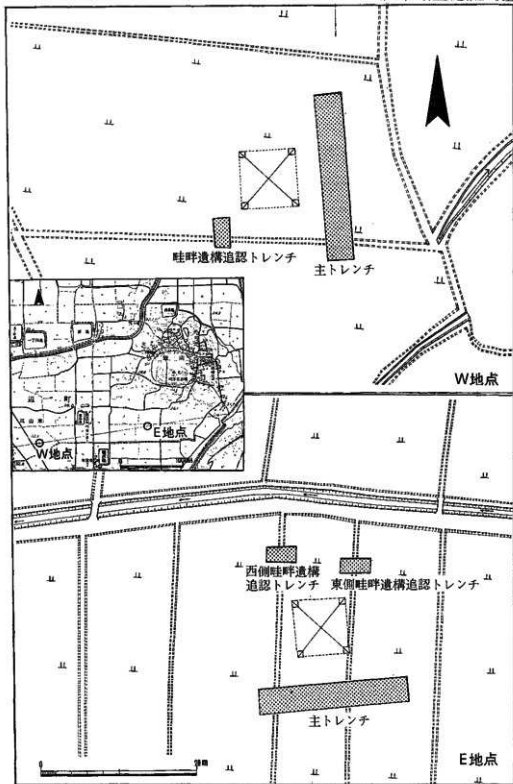
一方、六町方格の「里」の中における「坪(一町方格の区画)」は、第一坪が各「里」の南西隅にはじまり、第一列が北進する「千島式坪並」を採っている。これは、同じ「千島式坪並」ではあっても、第一坪が東南隅にはじまり、第一列が西進する久世郡の坪並とも異なり、また、南西隅にはじまり、第一列が東進する相楽郡の坪並とも異なっている点が注目されよう。

さて、今回の両発掘調査地点を含め、飯岡丘陵西南部一帯の「条里景観」を遺存地割によって復原したものが第3図である。谷岡氏の復原と対比した場合、W地点は綴喜郡条里第四条の「山本里」西隣の「里」にあたり、その中で第九坪と第十坪とにまたがる位置を占めることになる。W地点周辺は、普賢寺川の影響によると思われる畦畔の乱れの著しい部分が目立ちはあるが、発掘地点内を東西に走る現畦畔は、この第九坪と第十坪との境界、すなわち「坪界」の位置をほぼ正確に保っていることが知られる。

また、いまひとつの調査地点であるE地点は、綴喜郡条里第四条の「山本里」第十六坪に的確に相当する。古代条里制による土地割では、それぞれの「坪」が更に畦畔によって10の区画に細等分されるわけであるが、この第十六坪の現状は、「長地型(6間×60間)」相当の区画と「半折型(12間×30間)」相当の区画の双方が認められる。これは同型のいわゆる「折中型」を採るものであると理解されるが、調査地点内を南北に横切る二本の現畦畔は、この第十六坪内の西より二番目の水田区画(「長地型」相当)を規定している。

このように、両発掘調査地点内を東西あるいは南北に横切る現畦畔は、通常「条里景観」と称される土地区画を構成する主要素となり得るものである。かつまた、それらが古代条里制地割の遺制として理解されていることの重要性を踏まえた時に、それぞれの現畦畔下における土層堆積状態の観察は、土地区画の変遷を考える上で欠かせぬ作業であるといえよう。

かかる見地から、両調査地点でのトレンチの設定にあたっては、それぞれに現畦畔を切断できる位置を選択することとした。設定したトレンチは、W地点では新鉄塔東側基礎部予定箇所に東西4m・南北22mのものを、またE地点においては南側基礎部予定箇所に南北4m・東西20mの規模のものである(第4図)。なお、両調査地点ともに、調査の過程で現畦畔下に時期の異なる畦畔遺構が検出されたために、調査予定地内で更にこれの追認を目的として、各現畦畔延長上に新たなトレンチを追加設定した。W地点のそれは東西2m・南北4mのものであり、E地点ではそれぞれに南北2m・東西4mの規模のものである。



第4図 W地点・E地点発掘区位置図

第2節 調査の経過

第2節 調査の経過

調査日誌抄

- ・ 2月26日(曇) 古屋敷W・E両地点の調査参加者とも宿舎に集合。作業方針・時間などの打ち合せを行なう。
- ・ 2月27日(晴) 田辺町教育委員会・同志社資料館収蔵庫より発掘機材の搬入。その後両地点ともただちに発掘区(現駐畔を断ち切る形)の設定・テントの設置にはいる。
- ・ 2月28日(曇一時雷雨) 発掘区設定を確認後、両地点とも第I層の除去に入る。夕方の雷雨で両地点のテントとも倒壊する。
- ・ 3月1日(曇時々風雪) 両地点ともテントの復旧作業に時間を費やし、E地点では排水作業がこれに加わった。W地点では第II層上面まで完掘し駐畔遺構と溝状遺構を確認、E地点は第I層下層の除去を進めた。
- ・ 3月2日(曇のち晴) W地点は発掘区を南へ2m拡張すると共に第II層を掘り下げた。E地点は第I層の除去を終了して、第II層上面での精査作業にはいる。又同時にE地点では湧水対策の排水溝設定に力を入れる。
- ・ 3月3日(晴) W地点はトレンチ北端部の深掘り・土層観察を行ない、E地点は第II層上面における精査作業を終え、現駐畔に並行する駐畔遺構を検出。
- ・ 3月4日(雨) 雨天のため作業中止。
- ・ 3月5日(曇のち晴) W地点は深掘り区における土層観察に終始、E地点は第II層の除去を完了。この頃より両地点特にE地点は排水作業が日課となる。
- ・ 3月6日(晴) W地点は一季に第V層上面まで掘り下げた。東西7条南北1条の溝状遺構が発見されると共に駐畔遺構を検出。E地点は第III層上面での精査を行ない、さらに駐畔遺構を検出した。
- ・ 3月7日(晴) W地点は溝状遺構の確認、E地点は第III層の除去及び第IV層上面での精査を行う。なお教育委員会との協議で3月14日に現地中間説明会を行なうことが決まり、その詳細について参加者一同打ち合わせを行なった。
- ・ 3月8日(晴) W地点は溝状遺構の平面写真撮影後その掘り下げにはいる。E地点は第IV層除去後第V層上面での精査にはいったが、湧水が激しくポンプアップが進むまで作業を一時中断せざるをえなかった。
- ・ 3月9日(曇) W地点は溝状遺構の掘り下げを完了、E地点は第V層の除去にはいるも、湧水が著しく作業は困難をきわめた。
- ・ 3月10日(雨) 雨天のため作業は中止したものの、発掘区トレンチ壁面の崩壊防止のため、両地点とも交替で排水作業に当る。
- ・ 3月11日(曇) W地点は現地説明会を考慮して、第V層上面の溝状遺構とIV層中の駐畔遺構を残

して東半分のみ第Ⅶ層上面まで掘り下げ、その過程で再度新しい畦畔遺構を検出した。E地点では第Ⅶ層上面の精査を行なったが、排土の状態並びに水の湧き具合から以後の掘り下げを断念し、壁面の精査と断面図の作成に入る。

- ・3月12日(曇時々みぞれ) W地点は深掘り区における第Ⅶ層以下の層の確認と検討、E地点は壁面精査と断面図作成を続行。
- ・3月13日(曇時々雪) W地点は第Ⅶ層上面まで東半分を掘り下げると共に、壁面断面図の図取りを開始。E地点は壁面断面図完了後東追認トレンチの設定・排土作業に入る。また明日の説明会にそなえての準備・配布資料の作成などの作業を夜半まで続ける。
- ・3月14日(晴のち曇) W地点は壁面断面図の図取り及び追認トレンチの設定を行なう。E地点は東追認トレンチの壁面精査を行ない、畦畔遺構の連続を確認すると共に、西追認トレンチの設定・排土作業に入る。午後一時より現地説明会を行なう。
- ・3月15日(晴時々曇) W地点は主トレンチ東半分を第Ⅶ層まで掘り下げると共に、追認トレンチの排土作業にはいる。E地点は主トレンチ及び東追認トレンチの写真撮影を行なうと共に、西追認トレンチでも壁面精査により、畦畔遺構の連続を確認した。
- ・3月16日(晴) W地点は追認トレンチの壁面精査・主トレンチの写真撮影を行ない、E地点は東追認トレンチの壁面断面図作成と西追認トレンチの写真撮影・壁面断面図作成を行なう。
- ・3月17日(晴) 本Hをもって両地点とも主トレンチ・追認トレンチの図取り・写真撮影をすべて完了する。
- ・3月18日(晴) 両地点とも発掘区及びその周辺の平板実測作業を行なう。この地形図の作成をもって、両地点の今回の調査は共に完了した。
- ・3月19日(曇のち雨) 土壌サンプルの採集・図面類の総点検作業の終了をまって発掘機材を撤収し、現地での調査を終了した。

第3節 W地点の調査

1. 層序の観察と遺構

古屋敷W地点においては表採遺物に関連した遺構は検出されなかった。確認された遺構は畦畔遺構及び溝状遺構であった。これらの遺構は基本的層序の中に含まれており、層序の観察と併行して遺構の説明を行ないたい。

ここでは主トレンチ東壁・追認トレンチ東壁・西壁断面から基本的層序を確認した。基本的層序は8つに分けることができる。なお畦畔を形成する土は基本的には畦畔直下の層と色調は同一であるが、質的に異なっており④・⑩・⑪の3つに分かれる。

以下、主トレンチ・追認トレンチにわけて層序と遺構を説明する。

主トレンチ(第5図-1)

第3節 W地点の調査

第Ⅰ層(第5図—1 ①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩に対応)

現畦畔の耕作土であり、現畦畔の北と南で堆積が異なっている。現畦畔南側において上・下の2層(①・②)、北側において3層(③・④・⑥)に分けることができる。

①はしまりの弱い黒色土である。②は砂混じりでしまっており淡黒褐色を呈し、主トレンチ全面に見られる。④・⑥は赤褐色の粗砂を混じえ、淡黒褐色を呈しており同質であるが、現畦畔北側において両者の間に同レベルでレンズ状の堆積⑤が見られるため一応区別しておいた。⑥は淡黄褐色を呈し、かなり粘質である。

現畦畔はその直下の畦畔遺構(④)の上に補修されたものである。直下の畦畔遺構は南に盛り土が流されているが、底辺56cm高さ20cmの半円形を呈している。この畦畔遺構の北側に沿うかたちで側溝がある。第Ⅱ層上面から掘り込まれており、埋土は⑧と⑨により形成されている。幅108cm、深さ20cmのU字溝である。⑧は赤褐色の粗砂を混じえ青灰色を呈す。⑨は多量の砂を含み明青灰色を呈しており、側溝が畦畔遺構(④)を掘り込んだ後に畦畔から遊離したものと思われる。なお、⑦は側溝が完成後に掘り込まれたもので、赤褐色の粗砂から成り⑤と一連のものと思われる。

第Ⅱ層(第5図—1 ⑩に対応)

厚さ5cm程の層で遺物を含まない。細砂を含み黄褐色を呈している。畦畔遺構(④)に伴う側溝により一部切断されている以外主トレンチ全面に見られた。

第Ⅲ層(第5図—1 ⑪に対応)

現畦畔南側でのみ見られる。厚さ10cm程で細砂を含み淡黄褐色を呈する。他の層と特に異なる特徴は、非常に固くしまっている点である。

第Ⅳ層(第5図—1 ⑫・⑬・⑭に対応)

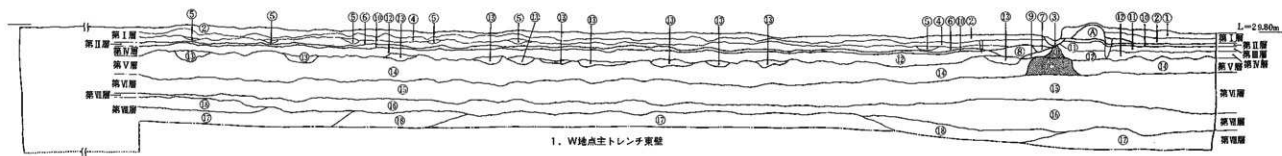
畦畔遺構、溝状遺構を伴っている。⑫は畦畔遺構の北側で厚さ5cm～20cm、南側で7cm～16cmを計り、淡黄褐色を呈している。特に北側では細砂を混じえている。総じて第Ⅴ層との境界付近では、第Ⅴ層中の土がブロック状に含まれており不連続面を形成している。

畦畔遺構(⑫)は先述したように畦畔遺構(④)に伴う側溝により半分以上が削られており、元来の規模を知ることはできない。残された畦畔は現畦畔の中軸線より約50cm程北に寄っており、底辺40cm、上辺10cm、高さ22cmの台形状を呈している。⑭はⅤ層と同じく淡青灰色を呈するが、かなりの細砂を含んでいる。

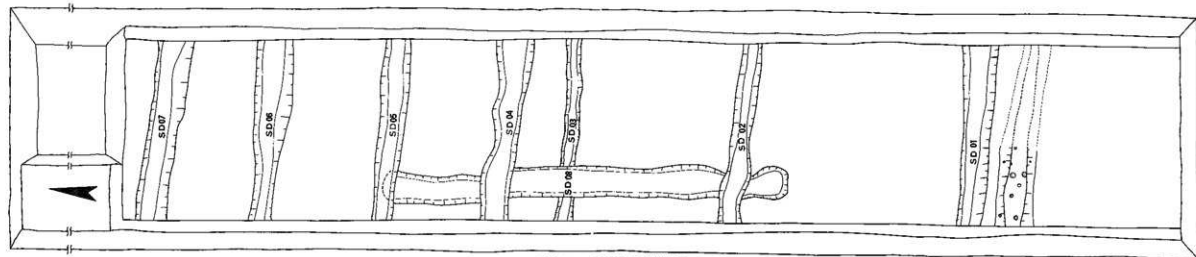
溝状遺構(⑬)(S D01～09)は畦畔遺構(⑫)の北側で見られる。なお平面配置は第5図—2のとおりである。第Ⅴ層上面に掘り込まれており、埋土は遺構の側壁及び底部に赤褐色粗砂がうすく堆積し、その上に掘り込んだ際の第Ⅴ層の土が、第Ⅳ層の土の中にブロック状にはいり込んでおり、かなり短期間に埋もれたものと思われる。なお断面形はさまざまであり、特に定まった形状には統一されていない。

第Ⅴ層(第5図—1 ⑮・⑯に対応)

畦畔遺構を伴っている。⑮は畦畔北側で28cm～50cm、南側で18cm～30cmの厚さを計る。若干

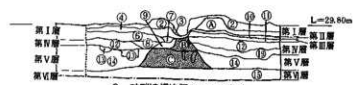


1. W地点主トレンチ縦壁



2. W地点主トレンチ第V層上面透視配置

- | | | |
|--------------------|---------------|---------------|
| 第I層 | 第II層 | 第III層 |
| ① 黒色土 | ⑤ 黄褐色土 | ⑩ 淡青灰色粘質土 |
| ② 淡黒褐色土 | ⑥ 淡黒褐色土 | ⑪ 淡黒褐色土(粘状遺構) |
| ③ 同上 | ⑦ 淡黄褐色土 | 第IV層 |
| ④ 淡黒褐色土 | ⑧ 淡黄褐色土 | ⑫ 淡黒褐色粘質土 |
| ⑤ 淡黒褐色粘質土 | ⑨ 淡黄褐色土(筒状遺構) | 第V層 |
| ⑥ 淡黒褐色土 | ⑩ 淡黄褐色土 | ⑬ 青白色粘土 |
| ⑦ 赤褐色粗砂 | ⑪ 淡青灰色土(粘状遺構) | 第VI層 |
| ⑧ 青灰色土(粘状遺構)⑬(筒埋土) | ⑫ 淡青灰色土(粘状遺構) | ⑭ 灰褐色砂礫 |
| ⑨ 淡青灰色粘質土(同上) | ⑬ 淡青褐色土(粘状遺構) | ⑮ 灰褐色砂 |
| ⑩ 淡青褐色土(粘状遺構) | | |



3. 粘状遺構追認トレンチ縦壁

第5圖 W地点 主トレンチ・粘状遺構追認トレンチ 土層図・平面図

の細砂を含み、淡青灰色を呈する粘質土である。

畦畔遺構(㉔)の中軸線は、現畦畔のそれより50cm程北に寄っており、底辺90cm、上辺60cm、高さ30cmの台形状を呈している。㉔は第VI層と同じく淡黒褐色を呈するが、第VI層ほど粘質ではなく若干の細砂を含んでいる。

第VI層(第5図—1 ㉕に対応)

かなりの粘質を示し、淡黒褐色を呈する。南に移行するにしたがい厚さが増し、30cm～60cmの厚さを計る。

この層の上部10cm～20cmまで、いわゆる霜ふり状の斑文が認められる。これは第III層上面から認められ、特に第IV層、第V層には顕著である。

第VII層(第5図—1 ㉖に対応)

青白色を呈する粘土層である。第VI層と同様に南に移行するにしたがい厚さが増し、6cm～54cmの厚さを計る。第VI層と第VII層の境界付近には、第VII層の粘土が飛散した状態で遊離している。

第VIII層(第5図—1 ㉗・㉘に対応)

完備しておらず明確ではないが、径2cm～5cm程の河原礫からなる灰褐色砂礫層(㉗)の間に純粋の灰色砂層(㉘)がレンズ状に堆積しており、掘り進むと湧水が著しく、遺構及び断面の観察が困難であった。

追認トレンチ(第5図—3)

基本的には主トレンチの層序と一致するが、第I層中の①が追認トレンチで検出されず、また第II層が追認トレンチでは現畦畔北側では認められなかった。

また第IV層が主トレンチとは違って現畦畔南側で二分された。すなわち㉙と㉚である。㉙は㉚よりもさらに粘質であり、㉙との境界は凹凸が激しい。

2. 出土遺物

古屋敷W地点において出土した遺物は、須恵器、土師質・瓦質・須恵質土器、陶器(美濃瀬戸焼・信楽焼・唐津焼・備前焼・京焼)、磁器(中国製青白磁・同白磁・伊万里焼染付・阿蘇絵)、瓦、滑石製石鍋、鉄製品(クサビ?・鎌)、砥石、ビール瓶片などである。鉄製品を除いて完形品はなく、破片の状態で出土した。

出土層は第II層を除いて、第I層から第VI層まで見られ、ことに第I層・第V層・第VI層が相対的に遺物が多い。

各層に含まれている遺物を見ると、かなりの時期差が見られる。これは水田耕作に際しての掘り起こしの結果であると思われる。つまり畦畔に伴う各層が、かなり長時間にわたって水田として利用されており、遺物が上下運動あるいは水平運動をくり返しているものと思われる。ただ総合的に見た場合に、深くなるほど遺物は古い様相を呈している。ここでは主トレンチ・追認トレンチ出土遺物をまとめて説明する。

第3節 W地点の調査

第Ⅰ層出土遺物

出土遺物には、須恵器片5点(器形不明)、土師質土器片10点(器形不明)、美濃瀬戸焼系茶入れ口縁破片1点、同摺鉢1点、備前焼摺鉢破片1点、唐津焼破片2点(器形不明)、京焼土瓶把手破片2点、同焼口縁破片3点、産地不明土瓶蓋破片1点、同急須注口破片1点、同陶器破片2点、同青磁破片1点、ビール瓶破片2点、近世瓦破片12点があり、図化するものはない。

第Ⅱ層

第Ⅱ層においては、出土遺物は前述のとおり見られなかった。

第Ⅲ層出土遺物

出土遺物はわずか3点すなわち唐津焼椀底部破片1点、京焼破片1点、瓦質土器破片1点のみである。

唐津焼椀(第6図-1, 図版4-2)

底部破片である。高台は周辺を左回りのヘラ削りによって4mmの高さにして高台脇にヘラ削りを残し、他はナデによって調整している。高台内面は削り出しによって内湾させ、三日月高台に仕上げている。施釉は内面及び外面底部近くまで施されており、内面は灰藍色、外面は浅黄色を呈している。底部内面には3つのトチ跡をとどめ胎土はにぶい橙色を呈す。17世紀中頃の製作と思われる。

第Ⅳ層出土遺物

この層にも遺物が少なく、10点を数えるのみである。出土遺物には唐津焼椀口縁破片1点、同底部破片1点、京焼椀底部破片1点、産地不明陶器破片1点、瓦質甕口縁破片1点、同底部破片1点、瓦質土器(器形不明)1点、土師質小皿破片1点、産地不明磁器破片1点、近世平瓦破片1点がある。

唐津焼椀(第6図-2)

底部破片である。成形、調整は第Ⅲ層出土の椀と共通しており、製作年代も17世紀中頃と思われる。

瓦質甕(第6図-3)

口縁破片である。口縁端部は平坦面をなし、口縁部から胴部にかけて急速に器壁をうすくしている。

第Ⅴ層上面の溝状遺構出土遺物

平面的に確認された8条の溝状遺構のうち、遺物を含んでいたものは、S D01, S D04, S D06, S D08の4本である。出土遺物には、信楽焼摺鉢破片1点、美濃瀬戸焼系天目茶椀口縁破片1点、産地不明陶器破片1点、土師質小皿口縁破片1点、土師質土器破片2点、須恵質土器破片1点がある。

ある。

信楽焼播鉢(第7図—1, 図版4—1)

S D01から出土した体部破片である。内面は5条のおろし目を上下方向に施す。外面にはわずかなクワロ目を認める。内外面ともに鉄釉を施している。胎土はあらく、乳白色を呈し、若干の長石粒を認める。江戸期の所産であろう。

美濃瀬戸焼系天目茶碗(第7図—2)

口縁破片で図上復原した。口縁は丸く外反し、内外面に鉄釉を施こしている。特に外面口縁下は黒く変色している。17世紀の製作と思われる。

土師質小皿(第7図—3)

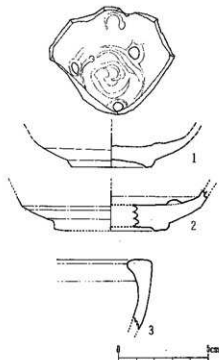
破片を復原した。口縁外面端部を強くナゲており、底部から口縁にかけてゆるやかに外反し、底部もゆるやかに内湾するものと思われる。土師質小皿はかなりの地域差が見られ一概に年代は決めたいが、近くから類例を求めると、都谷中世館跡に伴う東北段部内溝出土の土師質小皿がある(鈴木重治・松藤和人編 1977)

第V層出土遺物

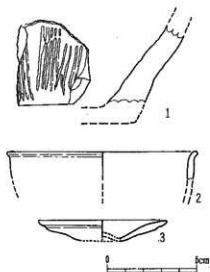
出土遺物には、産地不明陶器破片1点、瓦質部鉢口縁破片1点、同破片4点、瓦質羽釜破片2点、瓦質甕破片1点、瓦質蓋破片1点、瓦質土器破片2点、瓦器碗口縁破片4点、同破片3点、土師質羽釜口縁破片1点、土師質小皿口縁破片7点、同破片26点、土師質土器破片7点、須恵質土器破片2点、山茶碗口縁破片1点、緑釉土器破片1点、中国製青白磁合子破片1点、須恵器杯蓋破片1点、須恵器甕破片6点がある。

瓦質羽釜(第8図—1, 図版4—4)

破片から復原したもの。口縁端部近くで急に内湾し、口縁端部を上方に丸く持ち上げている。口縁内面、内湾する部分に一条の沈線をめぐらしている。かなり磨滅しており表面が剥落している。この手の土釜は稲垣晋也氏により7期D2型式に分類されており(稲垣晋也 1962)、また伊藤久嗣氏の編年提案も

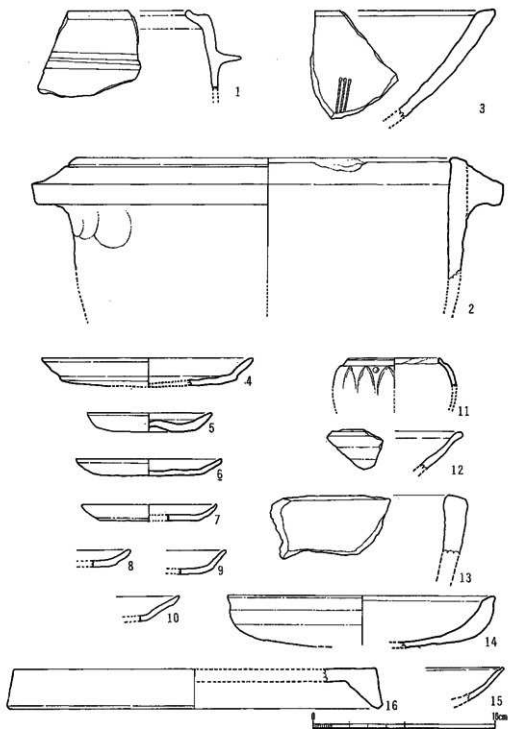


第6図 W地点主トレンチ第Ⅲ層・第Ⅳ層出土遺物



第7図 W地点主トレンチ第Ⅴ層上面溝状遺構出土遺物

第3節 W地点の調査



第8図 W地点主トレンチ第V層出土遺物

提出されており(伊藤久嗣 1968)、16世紀の製作と見てよいと思われる。

土師質羽釜(第8図—2, 図版4—5)

破片から復原したもの。淡赤褐色を呈し胎土はかなりもろく、大粒の長石・石英をかなり含んでいる。鈎部が口縁直下にはりつてあり、かなりの長胴をなすと思われる。類例は長岡京跡S D25から出土しており(梅川光隆 1977)、平安中期の年代を与えられている。この他にも尼崎市金楽寺只塚(村川行弘・岡田務・兼康保明・横爪康至 1976)からも出土している。

瓦質播鉢(第8図—3, 図版4—3)

破片から復原した。乳黄褐色を呈し、全体的に磨滅しており、おろし目の部分は特に使用による磨滅が認められる。胎土は精選された粘土を用いており、若干の石英粒を含んでいるだけである。薄手でやや内弯しながら立ち上がり、口縁部は若干外反している。内外面とも横ナデが認められる。都谷遺跡ではこのような瓦質の播鉢が信楽・備前・丹波焼播鉢に混じって検出されている(鈴木重治・松藤和人編 1977)。他の4点の破片も同じく瓦質であり、色調や胎土とも共通している。

土師質小皿(第8図—4—10, 図版5—4)

4・5・7・8は復原したものである。第V層出土の土師質小皿は4類に分けることができる。

1類は4のみで淡灰褐色を呈し上げ底である。底部からゆるやかに内弯しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめ、外面口縁下1cmほどを指でナデで調整している。稲垣晋也氏の編年によれば、第2類第2群型式に類似している。稲垣氏はこの型式を15世紀後半に位置づけされている(稲垣晋也 1969)。

2類は5・6・7である。口径に比して器高が低く、また底径も口径に近い長さを持つため、かなり扁平な感じを受ける。底部から急に立ち上がりゆるやかに外反し、口縁端はやや丸みをもつがシャープである。内外面底部近くまで指ナデを施しており、底部から口縁に立ち上がる部分の外面に顕著な段がつく。この手の土師質小皿は稲垣氏の分類では、一応第1類第1群型式として把握することができるが、図から見る限り第2類第2・3・4群型式にも認められ断定しがたい。

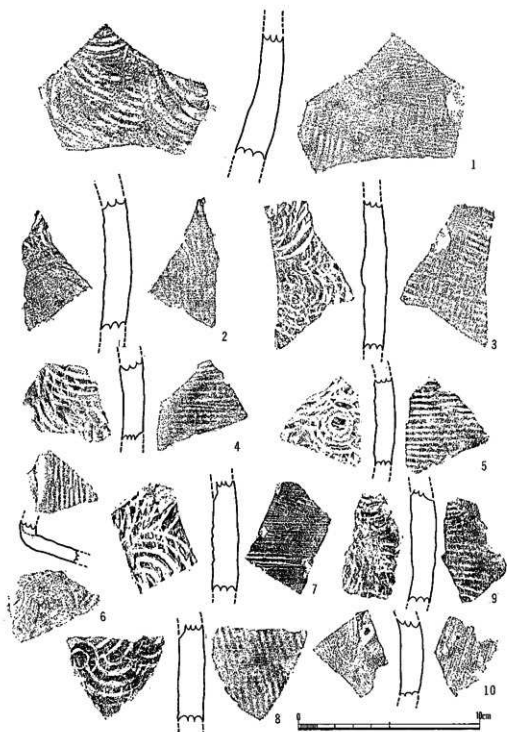
3類は8・9である。2類よりも小型で器高もさらに低い。外面口縁下のナデも段を作り出すほど強くナデしておらず、底部から口縁にかけてゆるやかに内弯しながら立ち上がっている。この手の土師質小皿も稲垣氏の分類では第1類第1群型式・第2類第2群型式両者に見られるようで時期は断定しがたい。

4類は10で断面のみである。内面はナデによって調整され、特に底部周辺を強くナデしているようである。外面は口縁端部のみを細かくナデで調整している。わずか7点のみでしかも破片であり、年代的にわしいことは断定しがたいが、ほぼ14世紀から15世紀の年代を与えてよいものと思われる。

中国製青白磁合子(第8図—11, 図版5—13)

身の部分であり、図は破片から復原した。内外面口縁端部を除いて青白色の透明な釉がかかっている。胎土、焼成とも良好である。口縁端部はヘラによって調整されている。外面には透介模

第3章 W地点の調査



第9図 W地点主トレンナ第V層・第VI層出土遺物

様がレリーフされ、その間に丸い突出がある。

山茶椀(第8図—12)

口縁破片であり、口縁上端部を除いて内外面に灰白色透明な釉が施されている。器形は口縁にかけてゆるやかに内弯しながら立ち上がり先端で急に外反し、口縁端部は丸くおさめている。

瓦質甕(第8図—13)

口縁破片であり、口縁端は平端面をなし器壁をうすくしつづつ底部にいたるようである。類例は都谷中世館跡においてみられる。この甕は館跡の埋甕として使用されており、報告者は15世紀中頃から16世紀後半頃までの年代を与えている(鈴木重治・松藤和人編 1977)。

この他に器形不明の緑釉を施した土師質の土器があり、両面に施釉がみられる。

瓦質椀(第8図—14)

瓦質椀の体部破片で底部を欠損する。体部にハケ目を施し、口縁部にナデを施す。胎土は雲母微細片を含み、焼成は良好、色調は黒褐色を呈する。

瓦器椀(第8図—15)

口縁部破片で、二次的な熱を受け灰白色を呈する。磨減が激しく暗文は認められない。胎土は緻密である。

また瓦質椀破片が7点あるが、図にとれる程のものではない。これらはVI層出土の瓦器椀と共通した特徴をもっている。この他に瓦質土器(第8図—16、図版4—6)が有り、何らかの蓋であろうと思われる。

須恵器破片(第9図—1~6、図版4—7・8・11)

1~5は甕の胴部破片である。

1(図版4—7)の外側は平行叩きを施し、入念なカキ目で二次調整を行う。内側は同心円文が顕著に見られる。外側灰色、内側青灰色を呈し、胎土は緻密で焼成は良好である。

2の外側は平行叩き目上に荒いカキ目調整を施す。内側は同心円文をすり消す。内外面とも青灰色を呈し、胎土は細砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。

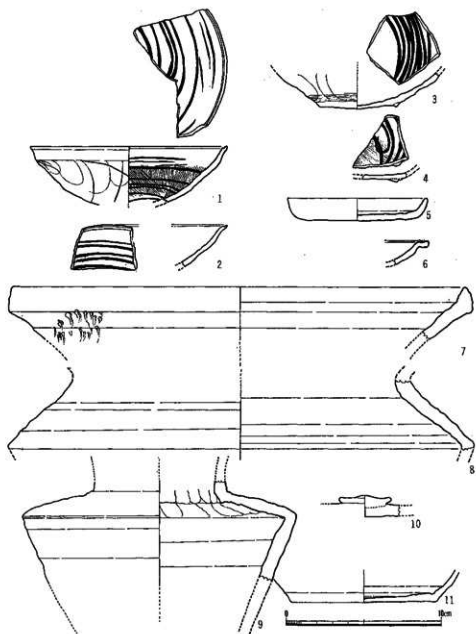
3(図版4—8)の外側は溝縁の狭い平行叩きを施す。器表に生じた自然釉がとび白い斑点状を呈する。内側は同心円文を施す。外側黒灰色、内側青灰色を呈し、胎土は白色砂粒を若干含み、焼成は堅緻である。

4は平行叩き目と同方向にカキ目調整を施す。内側は同心円文を施す。内外面とも黒灰色を呈し、外側は降灰のためやや光沢を放つ。胎土は緻密で、焼成は良好である。

5は格子状叩き目上に若干ナデ調整を施す。内側は同心円文を施す。内外面とも青灰色を呈し、胎土は白色砂粒を若干含み、焼成は良好である。

6(図版4—11)は甕の肩部及び頸部の破片である。肩頸部は粘土を接合し形状を行なう。肩部外側には平行叩き目が顕著に残り、内側は同心円文をナデですり消す。肩部・頸部の接合部内側に入念なナデが見られる。外側黒灰色、内側青灰色を呈し、胎土は0.5mm~2.0mmの砂粒を少し含む。焼成は良好である。

第3章 W地点の調査



第10図 W地点主トレンチ第VI層出土遺物

第VI層出土遺物

出土遺物には、青磁碗破片1点、瓦器碗口縁破片2点、同底破片3点、同破片4点、土師質小皿口縁破片5点、土師質土器破片21点、須恵質土器破片3点、須恵質壺破片1点、同杯蓋つまみ破片1点、同盤底破片2点、同甕破片7点、滑石製石鎮底破片1点(図版5—12)、鉄製品(クサビ?・鎌)2点がある。

瓦器碗(第10図—1~4, 図版5—1~3)

1・2は口縁破片で、1(図版5—1)は復原したものである。底部からゆるやかに立ち上がり口縁下1cm程の部分から口縁端部にかけて外反する。この部分の外側は強くナデを施しており、これ以下の外側はかなり凹凸があり指紋が浮き上がっている。また隆起した細い弧状の曲線が無数に見られる。内側は底から口縁に向かうナデが全面に見られ、口縁下2cm程を横ナデによって消している。暗文は底部に近づくほど幅広くなり数も多くなる。また外側は口縁部近くにかすかに認められるが、剥落のため図画しえない。口縁端部に一条の沈線が見られる。2(図版5—3)は表面の剥落が著しく調整の観察はむずかしい。

3・4は瓦器碗底破片であり、3(図版5—2)は復原したものである。1・2の底部になると思われる。細い粘土ひもをはりつけ三角高台にしており、はり付け部をナデで調整している。暗文・内外面調整とも1・2に共通している。第V層・第VI層出土の瓦器碗は器形・調整など共通する部分が多く同一の型式であると思われる。瓦器碗は近畿においても地域差が見られ、特に終末期にはそれが顕著になるようである(白石太郎 1977)。第V層・第VI層出土の瓦器碗もおそらく終末期に属するもので、それも大和で見られるものに共通する。稲垣氏の型式編年によれば、その属性から見てJ型式と共通する部分が多く(稲垣晋也 1961)、白石太郎氏の型式編年によればⅢ—2型式にあてはまるようである(白石太郎 1969)。両者の終末期の年代的な位置づけは若干異なるようであるが、ほぼこの型式を14世紀を前後する時期に比定してよいものと思われる。

土師質小皿(第10図—5・6)

2点とも破片であり5は復原したものである。5は第V層で分類した3類に類似するが、底部から口縁にかけての立ち上がりはほぼ90°近くになる。内面および外面口縁下1cmほどをナデで調整している。にぶい黄褐色を示す。6は口縁部に特徴をもつ。かなり磨滅しており本来の形状は断定しがたいが、口縁近くで折り曲げるように外反させ、口縁端部でさらに内側につまみ上げたものと思われる。この手の土師質小皿は山城・大和とその周辺の広範な地域に見られるようで、年代も9世紀から13世紀とかなり幅広いようである。

須恵質鉢鉢(第10図—7, 図版5—6)

図は破片から復原した。内外面淡青白色を呈し、胎土には数個の石米粒・砂粒を多量に含んでおり、表面がザラザラした感じを受ける。器形はゆるやかに内弯しながら立ち上がり、口縁端部は垂直に持ち上がりシャープな端面を示す。外面口縁下1.5cmの幅に自然釉が見られる。神山魚住窯系の鉢鉢であろう。

須恵質壺(第10図—8, 図版5—5)

第3節 W地点の調査

図は破片から復原した。灰白色を呈し外面に自然釉が見られる。胎土には雲母片・石英粒がみられ、特に石英粒がかなり多い。器形は肩の部分のみで全体は明確ではない。産地は不明であるが、東海系の可能性が強い。

須恵器壺(第10図—9, 図版5—11)

図は破片から復原した。頸部の形態ははっきりしないが、ほぼ直立するものと思われる。肩部はすどく張り出している。外面は全て横ナデで、内面は頸部と肩部の境に紋目があり、それを消す形で全面に横ナデが施されている。胎土は密で、1~2mm程の白色砂粒を含む。焼成は堅緻であって、色調は青白色である。

須恵器杯蓋(第10図—10, 図版5—9)

つまみ部破片であり、径は3.3cmを計る。内面はかなり磨滅している。つまみ部分の調整は横ナデである。胎土は密で白色砂粒を若干含む。焼成は良好で、色調は青灰色である。

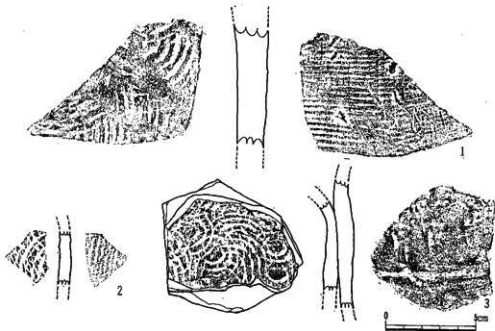
須恵器盤(第10図—11, 図版5—7)

図は破片から復原した。底部は平坦で、器壁は若干外反したのち、内湾するようである。底部の復原径は9.4cmである。調整は内外面とも横ナデ、胎土は密であるが、黒雲母の微粒が内面により多くみられる。焼成は堅緻であって、色調は明灰色である。

須恵器壺破片(第9図—7~10, 図版4—9・10・12・13, 第11図—1~3, 図版5—8・10)

いずれも胴部破片である。

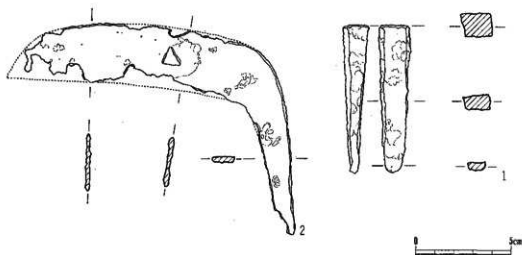
第9図—7(図版4—12)の外面は格子叩き目上に入念なカキ目調整を施す。内面は同心円文叩き目を施す。内外面とも青灰色を呈し、胎土は径1mmの長石粒を若干含み、焼成は堅緻である。



第11図 W地点主トレンナ第VI層出土遺物

8(図版4—10)の外側は平行叩き目上に荒いカキ目を施し、内側は同心円文叩き目を施す。内外とも暗青灰色を呈し、焼成はやや不良である。

9(図版4—13)の外側は平行叩き目をナデですり消している。内側も同心円文叩き目をナデですり消している。外側紫灰色、内側青灰色を呈し、胎土は白色微砂粒を含み、焼成は良好である。



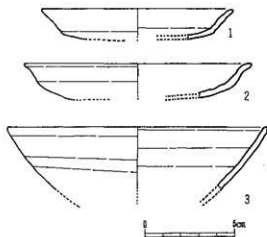
第12図 W地点主トレンチ第VI層出土遺物

10(図版4—9)の外側は平行叩き目を施し、2次調整はみられない。内側はハケ・ナデで平滑に仕上げている。内外とも灰色を呈し、焼成は良好である。

第11図—1(図版5—8)の外側は整然とした平行叩き目上にカキ目調整を施す。内側は同心円文叩き目をナデですり消している。内外とも青灰色を呈し、胎土は緻密、焼成は良好である。

2の破片は器壁が5mm前後で、他の破片に比べるとかなり薄い。外側は平行叩き目をナデですり消しており、内側は同心円文叩き目を施す。内外とも青灰色を呈し、胎土は白色砂粒を含み、焼成は良好である。

3(図版5—10)は窯内で2個体が外面を接して熔着したものと考えられる。一方の内側には同心円文叩き目が顕著に残り、若干ナデで2次調整を施している。外側は全面が熔着しているため不明である。内側は黒灰色を呈し、胎土は白色微砂粒を多く含む。他方の内側は同心円文をナデで入念に仕上げる。外側黒色、内側黒灰色を呈し、胎土は白色・黒色微砂粒を多量に含む。焼成は良好である。



第13図 W地点畦畔遺構掘削部トレンチ第VI層出土遺物

第4節 E地点の調査

クサビ形鉄製品(第12図—1, 図版5—14)

クサビ形を呈する鉄製品で、長さ 7.7cm・最大幅 1.6cmを計り、断面は長方形を呈し、全面にベンガラを塗る。

鎌(第12図—2, 図版5—15)

刃部長約 13cm, 刃部幅約 3cm, 厚さ約 2mmを計る。刃部はほとんど腐蝕し、欠損している。両面にベンガラの残存がみられる。刃部に比して柄部の残りは良好である。

第13図は追認トレンチ出土の遺物である。

1は第V層で分類した土師質小皿の1類と同様の調整を施しており、2は1類でみられた口縁下の強いナデが器高の半分より上までで終っていて、1類とはやや異っている。

3は青磁碗である。うすい器壁をもち、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上っている。内外面に浅青色の釉がかかっている。

第4節 E地点の調査

1. 層序の観察と遺構

先にも触れたように、調査地点は「古屋敷遺跡」と称される範囲内にあたり、従来より奈良時代に属する瓦類・土師器・須恵器などの遺物の採集が知られていた。しかしながら、今回の調査によって検出された遺構は、具体的にその時期の遺物を裏付けるものは何ら無く、その全てが後の時代の水田に関係するものであった。

以下、層序の観察結果と共に、各層で検出された遺構について、各トレンチごとに説明を加えることにする。

なお、調査にあたって実際に精査が及んだのは、湧水及び安全対策の関係から、地表下約110cm程の部分までであったが、いずれのトレンチにおいても、基本的に対応する6層が確認された。主トレンチ(第14図—1)

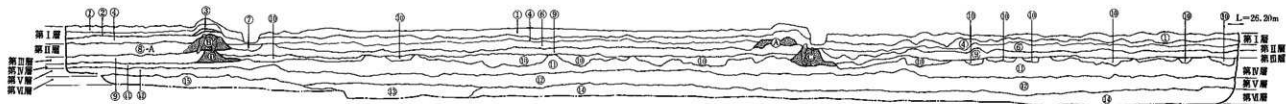
第I層(第14図—1 ①・②・③・④に対応)

現在、水田耕作土として利用されている上層と、それに伴い機能する床土としての下層とに大別される。ただ、西側現畦畔の直下を境として、その両側に堆積の変化が認められたことから、この点を考慮して細分された各層についての記述を進めて行きたい。

上層とした土壌(①)は、現在の水田耕作土である。暗黒色を呈する腐蝕土であり、草根の混入が著しい。

西側現畦畔直下を境に、その西側に変化を認めたのは下層(②・③・④)であった。

西側現畦畔東方において床土と考えられる土壌(④)は、暗青灰色の粘質土層であり、明青灰色の粘土をブロック状に、また、赤褐色土を斑文状に、それぞれ含有したものである。これは、西



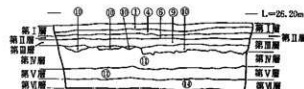
1. E地点主トレンチ北壁



2. E地点西側畦畔遺構追跡トレンチ北壁



3. E地点東側畦畔遺構追跡トレンチ北壁



4. E地点主トレンチ東壁

第I層

- ①黒褐色腐食土
- ②暗青色粘質土
- ③暗灰色粘質土
- ④暗青色粘質土
- ⑤暗青色粘質土

第II層

- ⑥暗青色粘質土
- ⑦淡黒褐色粘質土
- ⑧-A 黄褐色粘質土
- ⑧-B 暗青色粘質土
- ⑨暗茶褐色粘質土(東側畦畔遺構)
- ⑩-1 同上(同上)
- ⑩ 黄褐色粘質土(西側畦畔遺構)
- ⑪-1 灰色粘質土(同上)
- ⑪-2 暗灰色土(同上)

第III層

- ⑫暗青色粘質土
- ⑬青灰色粘土
- ⑭暗茶灰色粘土(東側畦畔遺構)
- ⑮-1 暗青色粘土(同上)
- ⑮ 暗青色粘土(西側畦畔遺構)
- ⑯-1 同上(同上)

第IV層

- ⑰明黄褐色粘質土

第V層

- ⑱茶灰色砂
- 第VI層
- ⑲青灰色粘土
- ⑳紫灰色砂礫
- ㉑暗緑黄色粘土



第14図 E地点 主トレンチ・東側畦畔遺構追跡トレンチ・西側畦畔遺構追跡トレンチ 土層図

側現畦畔西方においても、はっきりと認められる土層であって、畦畔東方からの連続が確実に捉えられるものである。

しかしながら、西側現畦畔西方にあつては、上層(①)とこの層(④)との間に、更に一層(②)の存在が明瞭に認められる。これは、暗青灰色の粘質土をブロック状に混入した暗黒色の粘質土層であり、西側現畦畔下東方では床土として利用されている。別個に搬入された土壌であると思われる。

なお、③は暗灰色の粘質土であるが、畦畔の補修程度に盛られたものであろう。

第Ⅱ層(第14図—1 ⑥・⑦・⑧-A・④・③に対応)

東西両現畦畔下に構築年代の異なる畦畔遺構(④・③)が検出された層であり、これら畦畔遺構とそれに伴う耕作土(⑥・⑧-A)とによって構成される。

この層においても、西側現畦畔下を境に堆積土に変化が認められた。

西側畦畔遺構(③)及びその西方の土壌(⑧-A)は、青灰色粘質土をブロック状に混入した黄褐色の粘質土である。一方、西側畦畔遺構(⑥)東方の土壌(⑥)は、暗青灰色の粘質土となっており、これは後述の第Ⅲ層上層(⑨)を掘り込んだ状態にある。

東側畦畔遺構(④)は、暗紫灰色の粘質土を盛って構築されており、形状は、底辺約70cm、平均高約12cm程の台形状を呈している。また、その位置は、畦畔の中軸を比較した場合、東側現畦畔より約20cm西方にあたる。

西側畦畔遺構(③)は、その西方の耕作土(⑧-A)との境界が明瞭ではなかったが、底辺約60cm、高さ20cm程の半円形状となろう。西側現畦畔直下に位置する。なお、この西側畦畔遺構に伴って、東側に側溝(⑦)が検出された。第Ⅲ層の上面を掘り込んだもので、その埋土は、黄褐色粘質土を斑文状に混じえた淡黒褐色の粘質土である。

第Ⅲ層(第14図—1 ⑨・⑩・⑪・⑫に対応)

東西両現畦畔の下部で検出した第Ⅱ層中の畦畔遺構(④・③)より先行する畦畔遺構(⑩・⑪)が検出された層で、これら畦畔遺構(⑩・⑪)と、それらに伴う耕作土(⑨・⑩)とによって構成される。

この層においてもまた、西側現畦畔下を境にして、その両側の土層堆積に変化が認められる。

すなわち、西側畦畔遺構(⑩)東方において、耕作土は上下二層に大別される。上層(⑨)は茶褐色の粘質土を斑文状に含んだ暗青灰色粘土の均一層であり、下層(⑩)は明黄褐色の粘質土を斑文状に含んだ青灰色粘土であつて、これは後述する第Ⅳ層(⑫)の上面を掘り込んだ状況にある。ところが、西側畦畔遺構(⑩)西方においては、東方で認められた下層(⑩)に相当するものは存在せず、上層(⑨)と同等の均一層が認められるだけである。

東側畦畔遺構(④)は、暗紫灰色の粘土を盛って構築されており、底辺約75cm、高さ約30cmの台形状を呈している。その位置は、それぞれの畦畔中軸を比較した場合に、東側現畦畔より東方へ約40cmずれをみせている。

一方、西側畦畔遺構(⑩)は暗青灰色の粘土で盛られており、底辺約80cm、高さ約20cmの台形

第4節 E地点の調査

状を呈している。位置は、西側現畦畔のほぼ直下にあたる。

第IV層(第14図-1 ㉑に対応)

明黄褐色の粘質土を斑文状に含んだ暗青灰色の粘質均一土層である。西側畦畔下西方では、その堆積が東方に比して著しく薄いものとなっている。

第V層(第14図-1 ㉒に対応)

紫灰色を呈する細かな粒子の均一砂層である。第IV層(㉑)ほど極端ではないにしても、西側畦畔下西方においては、やはりうすい堆積となっている。

第VI層(第14図-1 ㉓・㉔・㉕に対応)

トレンチ中央部西寄りの青灰色粘土(㉓)に向かい、東側からは硬質の砂礫層(㉔)が、また、西側からは暗緑黄色の粘土層(㉕)が、それぞれその下にもぐり込む状態で認められた。

その上面を観察し得るに止まったために、これらの正確な堆積関係を見出すことはできなかった。ただ、ボーリングステッキによる調査の結果から、第VI層を含め、これより下部は、この種の砂礫層と粘土層とが複雑に重なり合った堆積であろうことが推定された。恐らくは、長期間に亘る木津川の氾濫などの影響によって形成されたものであろう。

東側畦畔遺構追認トレンチ(第14図-3)

第I層(第14図-3 ①・④・⑥に対応)

主トレンチと同様の堆積であるが、このトレンチでは新たに、第II層中の畦畔遺構(㉑-1)直上に、畦畔補修のためと思われる盛土部分(⑥)が検出された。これは、暗青灰色を呈する粘質土であるが、青白色粘土を混じえる点を除けば、④に大差の無いものである。

第II層(第14図-3 ⑧・㉑-1に対応)

主トレンチ東側畦畔遺構(㉑)の連続が追認された。すなわち畦畔遺構(㉑-1)がそれである。このトレンチにおいては、底辺約 70cm、平均高約 16cm程の台形状として検出され、その位置はほぼ現畦畔直下を保っている。土質の性質は畦畔遺構(㉑)に大差ない。

また、耕作土(⑧)の堆積は主トレンチと同様である。

第III層(第14図-3 ⑨・⑩・㉒-1に対応)

主トレンチ東側畦畔遺構(㉒)の連続が追認された。畦畔遺構(㉒-1)である。このトレンチにおいては、茶褐色及び黄褐色土の斑文を混じえた暗青灰色粘土と表現できる。底辺約 60cm、高さ約 20cmの台形状で検出され、それぞれの畦畔中軸を比較して、現畦畔より約 30cm東方に位置する。

一方、耕作土(⑨・⑩)については、畦畔遺構(㉒-1)西方では主トレンチと同様な堆積を示すが、東方においては⑨が認められない。

第IV層(第14図-3 ㉑に対応)

主トレンチと同様である。

第V層(第14図-3 ㉒に対応)

主トレンチと同様である。

第VI層(第14図-3 ⑬に対応)

主トレンチ西端部で認められた暗緑黄色の粘土層(⑬)が、その広がりを見せているものと理解される。

西側畦畔遺構追認トレンチ(第14図-2)

第I層(第14図-2 ①・②・④に対応)

主トレンチと同様な堆積を示しており、②もやはり、現畦畔下東方にのみ認められ、床土としての機能を果たしている。

第II層(第14図-2 ⑥・⑦・⑧-B・⑩-1・⑩-2に対応)

主トレンチ西側畦畔遺構(⑩)の連続が追認された。畦畔遺構(⑩-1・⑩-2)である。ここでは、主トレンチの畦畔遺構(⑩)でははっきりとしなかった西方の耕作土との境界を明瞭にとどめているばかりか、加えて、その構築が大きく二回にわたっていることが確認された。すなわち、砂混じりの暗灰色土(⑩-2)を盛った上に、赤褐色斑文土を含む灰色粘質土(⑩-1)をかぶせて構築されている。全体としての形状は、西側斜面がかなり尾を引いて流れてはいるが、本来、底辺約 80cm、高さ約 25cm程の半円形状であったと思われる。位置は現畦畔直下にあたる。

一方、耕作土については、畦畔遺構西方では、主トレンチと同じ堆積を示す。しかし、東方の耕作土(⑧-B)は、主トレンチの⑧と対応するものであるが、ここでは、暗黄褐色斑文土を混じえた暗青灰色の粘質土として検出された。

第III層(第14図-2 ⑨・⑩・⑩-1に対応)

主トレンチ西側畦畔遺構(⑩)の連続が追認された。畦畔遺構(⑩-1)である。畦畔遺構(⑩)と土質に変化は全く無く、ここでは、底辺約 50cm、高さ約 15cmの台形状で検出された。その位置は現畦畔直下を占める。

また、耕作土は主トレンチと同様な状態をみせ、畦畔遺構(⑩-1)西方においてはやはり、⑩の堆積が認められない。

第IV層(第14図-2 ⑪に対応)

主トレンチと同様である。

第V層(第14図-2 ⑫に対応)

主トレンチと同様である。

第VI層(第14図-2 ⑬に対応)

主トレンチ西側部分で確認された暗緑黄色の粘土層(⑬)が認められるだけであった。

2. 出土遺物

表面採集の遺物(第15図、図版9)

調査期間中、E地点及びその周辺で45点の採集遺物を得た。その内訳は、陶磁器片14点、土師

第4節 E地点の調査

質皿及び土師質土器片24点, 瓦器碗片3点, 瓦質土器片3点, 青銅銭1点, その他である。いずれも中世ないしは近世の遺物であるが, 比較的良好な資料について, ここに説明を加えておきたい。

土師質皿(第15図—1)

体部から口縁部にかけての破片である。ほぼ直線的に外上方にのびる体部をもち, 指押さえによる成形の後に, 内面及び体部外面上半に横ナデ調整が施されている。口縁端部は丸く仕上げられている。復原口径は約 8.3cm, 器高は不明である。胎土は良く精選されており, 焼成も良好で灰褐色を呈している。15世紀後半期の製作と考えられる(稻垣晋也 1969)。

土師質皿(第15図—2, 図版9—11)

底部から口縁部に及ぶ破片である。体部はゆるやかに「く」の字状に屈曲して, 外上方に立ち上がる。口縁部はやや尖り気味に丸く仕上げられているが, 口縁下外面がやや肥厚して, 鈍い稜が形成されている。指押さえ成形の後, 内面及び内底面の周縁, 加えて体部外面上半には横ナデによる調整が施されている。復原口径は約 8.2cm, 器高は不明である。胎土は良く精選されており, 焼成も良好である。色調はやや黄灰色がかった橙色を呈するが, 体部外面上半には黒化した部分が一部認められる。15世紀後半期の製作と考えられる。

土師質皿(第15図—3)

体部から口縁部にかけての小片である。非常にゆるやかに屈曲して, 外上方にのびる体部を有し, 口縁部はやや尖り気味に丸く仕上げられている。指押さえによって成形がされており, 口縁下外面がやや肥厚している。磨滅が著しいために, 調整痕については判然としない。胎土は微量の黒雲母粒子を含む程度の良質なもので, 焼成は良好である。色調は黄灰色を呈している。前述の2点と同様に, 15世紀後半期の製作になるものと考えられる。

京焼碗(第15図—4, 図版9—3)

底部の破片である。高台高 5mm, 高台復原径は約 4.6cmとなる。釉薬は内外両面ともに, 白色と茶褐色のものが交互に塗り上げられているが, 釉表面には細かい貫入がはしる。また, 高台内端部には釉切れが認められる。陶胎は茶褐色の精選されたもので, 焼成も良好である。18世紀以降の製作と考えられる。

播鉢(第15図—5, 図版9—5)

体部の破片である。指押さえ成形の後に, ナデによる調整が施されている。胎土は灰色を呈しており, 石英・長石等の粒子の混入が認められる。焼成は良好, 極めて堅く焼き締められている。15世紀以降の製作と考えられるが, 産地についてはこれを明確にし難い。

伊万里焼系染付蓋(第15図—6, 図版9—2)

上部の破片である。つまみ高 8mm, つまみ復原径は約 4.7cmとなる。やや青味を帯びた灰白色の素地に, くすんだ藍色で染付が施されている。つまみ端部には, 重ね焼きの際の砂粒が熔着している。18世紀以降の製作と考えられるが, 産地については判然としない。

伊万里焼系染付碗(第15図—7, 図版9—1)

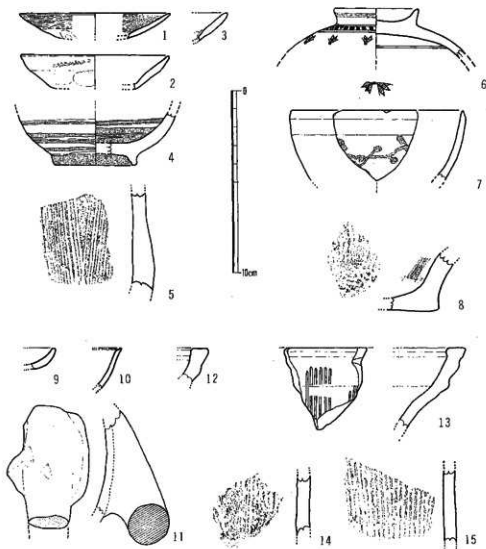
体部から口縁部にかけての破片である。いわゆる「くらわんか手」の染付碗で、口径約 9.2cm 程度に復原される。やや青味がかかった灰色の素地に、くすんだ暗藍色で、梅の文様が染付けられている。18世紀以降の製作と考えられる。

青銅銭(第17図—1, 図版9—19)

渡来銭「開通元宝」である。裏面は錆つきが著しく、背文字等の有無は確認し難いが、正面の銘は明瞭に判読することができる。初鑄年代は、唐朝、武徳4年(621)で、以降唐代末に至るまで數回にわたって鑄造されている。

その他の遺物

小片のために図示し得なかったが、この他にも目についた遺物について、若干触れておこう。



第15図 E地点表採遺物、主トレンチ第I層・第II層出土遺物

第4節 E地点の調査

瓦器碗が3点採集されている。いずれも小片であるが、うち2点は、12世紀後半から13世紀前半の時期に、残り1点は13世紀頃に製作されたものと考えられる(白石太一郎 1977)。前者2点は口縁部内面に沈線が巡り、体部の両面は横ナデによって仕上げられたもので、内面には粗い暗文が認められる。一方、後者の1点は、前者と同様に口縁部内面に沈線を巡らせたものではあるが、口縁下外面を横ナデによって外反させ、弱い稜線が形成されている。

また、青磁碗の小片が1点採集されている。外面に蓮弁文があしらわれたもので、その特徴から、14世紀から15世紀にかけての時期の竜泉窯系の焼成になるものと考えられる。

第I層出土遺物(第15図)

第I層から出土した遺物は25点で、その内訳は、陶磁器片13点、土師質土器片7点、須恵器片1点、その他である。これらは、いずれも小片であり、図示できるものは下記の1点のみである。

信楽焼播鉢(第15図-8)

底部から体部にかけての破片である。体部は底部からやや外反して上方に立ち上がる。外面は横ナデによる調整が施され、内面には6本を1単位とする櫛描きのおろし目がみられる。胎土には若干の石英粒を含み、焼成は良好である。内外面ともに鬼板がけが施されており、色調は暗赤褐色を呈している。19世紀以降の製作と考えられる。

その他の遺物

その他の遺物についても若干の説明を加えておこう。

伊万里焼系乗付碗の細片が6点出土している。正確な製作年代、産地等については判定し難いが、いずれも17世紀に入ってからのものである。須恵器片は、小片のために器種は不明であるが、厚さ約9mm、内外両面ともにナデによる調整が行なわれている。胎土には径1mm内外の砂粒が多量に含まれるが、焼成は良好で暗灰色の色調を呈する。時期は判然としない。また、土師質皿片5点、信楽焼播鉢の口縁部片1点、美濃瀬戸焼碗片3点、京焼破片1点などがこの他にも出土している。しかしいずれも細片となっており、製作時期等を判定するに足る資料にはならない。なお、この層からは19世紀末以降のものと考えられるレンガ片、ガラス片等の出土も若干あった。

第II層出土遺物(第15図、図版9)

第II層から出土した遺物は28点で、その内訳は、土師質皿片及び同質土器片13点、瓦質播鉢片、瓦器碗片、瓦質脚付土鍋片、瓦質土器片が計6点、信楽焼播鉢片4点、伊万里焼系乗付青磁片1点、産地不明の陶器片2点、須恵器片2点である。

土師質皿(第15図-9)

体部から口縁部にかけての小片で、体部は外上方にのび、口縁端部はやや尖りぎみにおさまら

れている。成形・調整については、磨減が著しいために判然とし難いが、胎土は石英微粒子をわずかに含む程度で、良く精選されている。色調は、内外面ともに淡黄褐色を呈している。

瓦器掬(第15図-10)

体部から口縁部にかけての小片である。体部は内湾気味に外上方へのび、口縁端部は丸くおさまられているが、内側は沈線状にくぼみが施されている。表面の磨減が著しい為に成形・調整は判然としないが、胎土は微砂を含む程度の良質なものである。色調は内外面とも黄褐色を呈している。時期については、白石嗣年によるⅡの2ないしは3の段階に属するものと考えられ(白石太郎 1977)、13世紀後半から14世紀前半の実年代が比定できよう。

瓦質土釜(第15図-11, 図版9-7)

足釜の脚接合部から脚部にかけての破片である。脚部の断面は円形を呈している。脚上部に二個の指頭痕をとどめる他は、表面の磨減が著しく、成形痕を明確にとらえ難い。胎土は1mm内外の石英粒を含み、色調は全体的に灰黒色を呈している。13世紀後半から14世紀初頭にかけてのものと考えられる(岡本 一士 1976)。

信楽焼播鉢(第13図-12)

口縁部の小片である。端部は内側に肥厚し端面は水平に保たれている。外面には、現状で一条の凹線を確認し得るが、本来はこれが二条巡っていたものと考えられる。胎土には径5mm内外の石英粒を含有している。色調は内外面ともに鉄釉が施され、赤茶色を呈している。近世後半のものと考えられる。

信楽焼播鉢(第15図-13, 図版9-4)

体部から口縁部にかけての破片である。体部は外反して上方へのび、途中で内側に折れて、そのままや内湾気味に口縁端部に達している。口縁端部は内側に肥厚し、口縁部外面には二条の凹線が巡っている。体部内面には六本を一単位とする櫛描きのおろし目が二条とどめられている。内外面ともにナデによる調整が施され、胎土は浅乳白色を呈し、1~3mmの石英粒を含有している。色調は、外面が赤茶色、内面が浅黄白色を呈するが、外面及び口縁端面には鉄釉が、また内面にも鉄釉の痕跡が認められる。近世後半の製作と考えられる。

信楽焼播鉢(第15図-14)

体部の破片である。粘土紐の積上げの後、横ナデによる成形が行なわれているものと思われる。内面には、全面にわたって櫛描きのおろし目がみられる。胎土は浅乳白色を呈し、径1mm内外の石英粒を多量に含有している。色調は、内外面ともに鉄釉が施され、暗茶褐色を呈している。近世後半のものであろう。

信楽焼播鉢(第15図-15)

体部の破片である。内面に施された横ナデの他は詳細な成形・調整は判然としない。内面には五本(推定)を一単位とする櫛描きのおろし目が3条残されている。胎土は径1~2mm程の石英粒を含み、浅乳白色を呈しているが、焼成時の変化によって、内部は赤灰色に転じている。色調は、内外面ともに鉄釉が施され暗茶褐色を呈している。近世後半期のものと考えられる。

第4節 E地点の調査

その他の遺物

次に図示こそ出来なかったが、目についた二・三の資料について説明を加えて置きたい。

伊万里焼系染付青磁は口縁部の細片である。内面に染付による文様が施されており、呉須の発色は良好である。外面は青磁化されており、淡い緑青灰色を呈している。近世の製作になるものと考えられる。

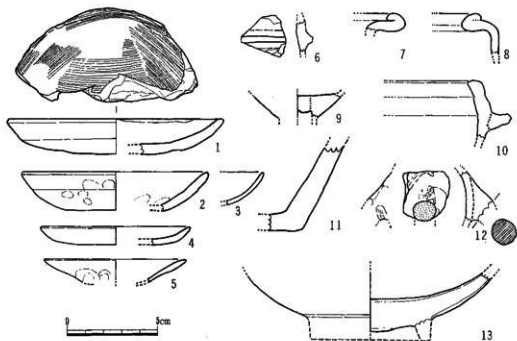
また、須恵器片が2点検出されているが、いずれも甕の破片に相当するものと思われる。一点は、自然釉がかかっており、内面にナゲ調整の痕跡が認められる。胎土は精選された良質のもので、焼成も堅緻である。いま一点は頸部にあたると目されるが、これにも自然釉が認められる。胎土は若干粗質で3~4mm程の砂粒を混じえているが、焼成は良好堅緻である。

第三層出土遺物(第16図、図版9)

第三層から出土した遺物は46点で、その内訳は、土師質皿片及びその他の土師質土器片32点、瓦質土釜など瓦質土器片7点、青磁片1点、施釉陶器片1点、陶器片1点、不明細片3点、青銅銭1点である。

土師質皿(第16図—1, 図版9—17)

底部から口縁部にかけての破片である。体部はゆるやかに外上方のび、口縁端部はやや尖り



第16図 E地点主トレンチ第三層出土遺物

気味におさめられている。口縁端部内面直下には、一部稜が形成されている。体部外面には横ナデが施され、その後の指頭による圧痕も認められる。内面もまた、体部横ナデの後、底部ナデが施され、指頭圧痕がみられる。胎土は鬘母片を多量に含み、焼成は良好である。色調は内面が淡橙色、外面は黄灰白色を呈している。製作は16世紀前半期の段階におさまるものと考えられる。

土師質皿(第16図—2)

体部から口縁部にかけての小片である。体部はゆるやかに外上方にのび、体部外面に小さな段が作られている。口縁端部はやや尖り気味におさめられている。成形・調整は内外面ともに指頭圧痕が認められる他は痕跡をとどめていない。胎土は微砂を含む程度の良質なもので、焼成も良好、堅緻である。色調は灰色がかった橙色を呈している。

土師質皿(第16図—3)

体部から口縁部にかけての小片である。体部はやや内弯しつつ、ゆるやかに外上方に立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味である。器壁は全般にごく薄く仕上げられている。体部外面に指頭圧痕が認められる以外は、他の成形・調整は判然としない。胎土は石英の微粒子をわずかに含むが、良く精選されており焼成も良好である。色調は灰白色を呈している。14世紀段階の製作と考えられる(稲垣晋也 1969)。

土師質皿(第16図—4)

体部から口縁部にかけての小片である。体部は外上方に短くのび、口縁端部は尖り気味におさめられている。磨減が著しく、成形・調整時の痕跡は明らかにし難い。胎土は石英粒、微砂を若干含む程度の良質なもので、色調は一様に黄灰色を呈している。15世紀後半期のものと考えられる(稲垣晋也, 1967)。

土師質皿(第16図—5)

体部から口縁部にかけての破片である。体部はうすく、やや外反しながらのび、体部中位付近でやや厚味を増して口縁端部に達している。口縁端部はやや尖り気味におさめられている。体部外面に指頭圧痕が認められるが、他の成形・調整痕については判然としない。胎土は、石英、鬘母の微粒子を含む程度の良質に精選されたものである。色調は浅黄褐色を呈するが、体部下端に一部赤褐色を呈する部分が認められる。15世紀後半期のものと考えられる(松藤和人 1978)。

土師質羽釜(第16図—6)

鈎部分の小破片である。断面台形状の小さな鈎を付け、その上面に横ナデが施されている。胎土は石英粒を含む。色調は浅黄褐色を呈し、外面にはススと思われるものの付着が認められる。時期の限定は厳密にし難いが中世段階の製作とみてよからう。

瓦質羽釜(第16図—7, 図版9—9)

口縁部の破片である。外反した口縁をもち端部を内側に巻き込んでおさめている。巻き込み部分は密着している。胎土は石英・チャート、砂粒を多量に含み、色調はやや赤味がかかった橙色を呈している。15世紀段階の製作になるものと考えられる。

土師質羽釜(第16図—8, 図版9—10)

第4節 E地点の調査

口縁部の破片である。頸部は短く肩を作り、口縁端部を外側に折り返す。成形・調整は肩部内面に横ナデを施す他は不明である。胎土は、径1~2mm程度の石英・長石などを多く含む。焼成は良好で、色調は、淡黄褐色を呈する。15世紀段階の製作になるものと思われる。

弥生式土器高杯(第16図-9, 図版9-16)

高杯の杯部と脚部の接合部分である。円蓋充填を行なっている痕跡は明白だが、磨滅が著しく、詳細な成形・調整は不明である。胎土は径1mm内外の砂粒を含むがよく精選されている。色調は淡黄褐色である。本遺跡から西方に1.5km離れた地点にある田辺天神山遺跡から類似した遺物が出土している(森浩一編 1976)。

瓦質羽釜(第16図-10, 図版9-13)

羽釜口縁部及び鈎部を残す破片である。口縁部はやや内傾し、口縁端部は水平に面を保っている。断面台形状の鈎が貼り付けられ、鈎の上面には粘土紐を補足した上で横ナデが施され、下面には指頭圧痕が認められる。胎土は径1mm内外の砂粒を多量に含んでいるが焼成は良好である。色調は灰白色を呈し、外面にはススの付着した部分が認められる。14世紀から15世紀にかけて製作されたものと考えられる。

瓦質土壺(第16図-11)

底部から体部にかけての破片である。火舎あるいは甕であろうと思われる。体部は底部から直線的に立ち上がり、体部の壺壁は底部に比して厚く、上方に移行するにしたがって薄くなっている。体部及び底部とも内面には横ナデが施されているが、外面における成形・調整は判然としない。胎土は石英粒・チャートを含み、焼成は良好である。色調は全体的に灰黒色を呈している。16世紀段階の製作になるものと思われるが、産地については判定し難い(岡本一士 1976)。

瓦質土釜(第16図-12, 図版9-12)

足釜脚部の破片である。脚を貼り付けた後、ナデが施されており、加えて指頭による圧痕も認められる。胎土は良質で、焼成も良好、堅緻である。色調は灰黒色を呈している。12世紀から13世紀にかけての製作と考えられる(宇野隆夫 1978)。

青磁椀(第16図-13, 図版9-6)

底部から体部にかけての破片である。体部はゆるやかに外上方に立ち上がる。胎土は灰白色、釉色は淡緑色を呈し、高台際には鉄釉の施釉が認められる。竜泉窯系の焼成になるものと思われ、時期的には、15世紀段階にはいつからのものであろう。

青銅銭(第17図-2, 図版9-18)

部分的に銘がつぶれてはいるが「嘉祐通宝」と判読される。渡米銭であり、鑄造の期間は、北宋・嘉祐年間(1056~1063)に限定される。

その他の遺物

前述した様に、説明を加えたもの以外にも出土した遺物はあるが、そのほとんどが、土師瓦土



1



2

第17図 青銅銭拓影
1. E地点表接
2. 主トレンチ
第三層出土

器及び瓦質土器の細片である。また、椀の口縁部と思われる施釉陶器片、加えて、長頸壺の頸部と考えられる陶器片が各一点ありはするが、これらも含めその製作時期及び産地等については明らかにし難い。

第IV層出土遺物(第18図、図版9)

第IV層から出土した遺物は88点で、その内訳は、土師質土器片72点、瓦器椀片11点、須恵器片2点の他、土釜脚部、羽釜、青磁椀の破片が各々1点である。

土師質皿(第18図—1、図版9—15)

底部から口縁部にかけての破片である。底部は平底であり、体部は強く外反し、底部との境に明瞭な稜をなす。口縁端部は丸くおさめられている。粘土板成形であり、体部外面に強いナデが施されている。色調は淡橙色を呈する。13世紀段階の製作であると考えられる(榎垣晋也1969)。

土師質皿(第18図—2)

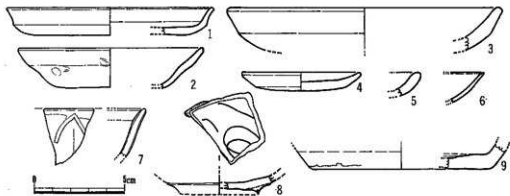
体部から口縁部にかけての破片である。底部は平底になると思われる、体部は僅かに「く」の字形に外反し、口縁端部は丸くおさめられている。粘土板成形であり、体部外面上半にナデが施されている。色調は淡橙色を呈する。製作の時期は15世紀後半期に求めることが出来る(榎垣晋也1969)。

土師質皿(第18図—3)

体部から口縁部にかけての破片である。底部は平底になると思われる、体部は短く外上方に立ちあがる。口縁端部は肥厚され丸くおさめられている。胎土中には、径1~2mm内外の砂粒が多量に含まれており、焼成も不良である。色調は灰白色を呈する。製作の時期については判定し難い。

土師質皿(第18図—4)

底部から口縁部にかけての破片である。底部は平底であり、体部はゆるやかに外上方に立ち上



第18図 E地点主トレンチ第Ⅳ層・第Ⅴ層出土遺物

第4節 E地点の調査

がる。口縁端部は肥厚され丸くおさまられている。粘土板成形であり、体部の内面及び外面上半部にナデが施されている。色調は灰白色を呈する。製作の時期は15世紀中葉と考えられる(稻垣晋也 1969)。

土師質皿(第18図—5)

体部から口縁部にかけての小片である。ゆるやかに外上方へのびる体部をもち、口縁端部は丸くおさまられている。色調は黄灰白色を呈する。製作の時期については判然とし難い。

青磁椀(第18図—7, 図版9—8)

体部から口縁部にかけての小片である。体部外面には、篋彫りによる蓮弁文があしらわれている。口縁部は、端部を僅かに外反させ先端が丸くおさまられている。磁胎は灰白色を呈し、釉薬の色調は灰緑色を呈するが、口縁部における釉のかかりは薄くなっている。竜泉窯系の青磁であり、元代初頭の焼成になるものと考えられる。

瓦器椀(第18図—6)

体部から口縁部にかけての破片である。体部は内湾しながら口縁に至り、端部は丸くおさまられている。体部内面には横ナデが施されている。色調は黄灰白色を呈する。白石瀬年によるⅢの第四段階(白石太一郎 1977)、稲垣瀬年によるK型式(稲垣晋也 1969)に属するものと考えられ、14世紀前半頃の製作実年代に比定できよう。

瓦器椀(第18図—8, 図版9—14)

底部の破片である。量付の部分の一部欠損してはいるが、断面逆三角形の貼り付け高台を持つ。その成形はやや粗雑である。内底面には、連結輪状暗文が施されている。胎土は精選された良質のもので、色調は内外両器表とも黒灰色、内部においては灰白色を呈している。白石瀬年によるⅡの最終末段階(白石太一郎 1977)に属するものと考えられ、12世紀末頃の製作実年代が比定されよう。

第V層出土遺物(第18図)

第V層より出土した遺物は3点で、その内訳は、図示した須恵器片1点の他、瓦質土器片、土師質土器片がそれぞれ1点である。

須恵器壺(第18図—9)

壺類底部の破片に相当するものと思われる。復原底径 9.8cm。体部はゆるやかに外上方へのびる。底部外面にはヘラ切り痕が残され、内面及び体部両面に横ナデ調整が施されている。胎土は緻密で、焼成も良好、堅緻である。色調は青灰色を呈する。

第5節 小 結 —畦畔遺構の実年代について—

調査の結果、W地点・E地点それぞれのトレンチにおいて、現在使用されている畦畔の下部とともに二時期にわたって先行する畦畔遺構が検出されたわけであるが、ここで、各々のトレンチ

の土層に包含されていた遺物から、これら畦畔遺構のもつ実年代について推察を与えてみたい。その場合、各土層がもつ水田耕作土層としての性格を考慮するならば、そこに包含されていた遺物は少量であったという事実、かつ、水田耕作に伴う人為的な土層の擾乱が終始なされていたであろう状況などから鑑みて、それぞれの層位の年代幅を厳密に把握することには、おのずと限界が内在されている点はあらかじめ念頭に入れておく必要がある。

ところで、W地点・E地点の各トレンチで検出された遺物を、それぞれの土層ごとにまとめ、各々の土層がもつ遺物の年代幅を示したものが第1・2表である。これをもとに、両地点において検出された畦畔遺構の実年代を推定するならば、ひととおり次のような説明が可能であろう。

第1表 W地点出土遺物年代表

	800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	1800	1900
第I層												
第II層												
第III層												
第IV層												
第V層												
第VI層												

第2表 E地点出土遺物年代表

	200	300	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	1800	1900
第I層												
第II層												
第III層												
第IV層												
第V層												

まずW地点であるが、ここでは第IV層及び第V層中に、それぞれ畦畔遺構が検出されている。この地点では、遺物の全く検出されなかった第II層を除いて、第I～IV層までが近世以降の陶器片を含んでおり、これらを近世以降の堆積として理解することができる。第IV層中の畦畔遺構については、第V層の上面を掘り込んだ溝状遺構がこの畦畔遺構に伴うものであるが、溝状遺構内の埋土中より検出された遺物が17世紀を中心とする時期のものであることから、その施行年代の上限は少なくとも近世初頭を廻り得まい。ところで、第V層における遺物は14～16世紀段階の時期に集中をみせており、それ以降近世のものは含まれていない。また、第VI層における遺物の年代の下限が14世紀段階に及ぶことから、第V層において検出されたいまひとつの畦畔遺構の施行・使用年代は、15～16世紀にわたる中世中頃～末の年代の幅の中に求めることが可能であろう。

一方、もうひとつの調査地点であるE地点についてであるが、ここでは、第II層及び第III層において畦畔遺構がそれぞれ検出されている。この地点では、第I層及び第II層の二つの層が近世

第4節 E地点の調査

以降の陶器片を含んでおり、第Ⅲ層以下の各層では近世以降の遺物が皆無である。加えて、第Ⅰ層における出土遺物の年代の下限が16世紀後半の段階にあることからみて、第Ⅱ層以上の土層は近世以降の堆積として捉えることができる。したがって、第Ⅱ層中において検出された畦畔遺構の施行年代については、その上層にあたる第Ⅰ層中の遺物の実年代の上限が17世紀初頭にあることをも考慮して、その上限を近世初頭に比定することが可能であろう。また、第Ⅲ層中において検出された畦畔遺構の施行及び使用の実年代については、第Ⅳ層における出土遺物の年代の下限が15世紀の後半期に及ぶことからみて、16世紀にはいつて後の中世末の時期に求めることができよう。

第3章 飯岡横穴の調査

第1節 調査地点と発掘区の設定

1. 従来の調査

飯岡横穴の存在は地元では、信仰の対象となるなどして古くから知られていたようであるが、学界に最初に報告されたのは大正9年、梅原末治博士によってである。「飯ノ岡ノ古墳」と題して『京都府史蹟勝地調査会報告』第二冊に次の如く報告している(梅原末治 1920a)。

「横穴ハ丘陵ノ南東ニ延ビタル尾ノ鼻ニアリ、露出花崗岩ヲ利用シテ設ケタルモノニシテ、モト二個アリシガ、一ハ埋没シテ今一個南ニロヲ開ク。コレ亦口部ヲ破壊シテ構造明瞭ヲ缺クモ、簡單ナル箱形ノ式ニシテ、室ノ長サ十尺八寸、幅七尺三寸、現在ノ高さ約四尺ナリ。」

この記述から、横穴の状況が現在もほとんど変化していないことがわかるが、「モト二個アリシ」とあるようにこの横穴が単独でなく群構成をなすものであることを知る重要な資料である。その後、戦前戦後を通じ、半世紀以上にわたって飯岡横穴に関する文献は見あたらず、昭和50年代に入り、飯岡横穴を含めた南山城に分布する横穴を準人系の集団との関連に於いてとらえようとする論叢(森浩一 1975、平良泰久 1975)が現われ、故地の墓制の採用の可能性の指摘等もなされ現在に至っている。

2. 位置と環境

飯岡横穴は京都府綴喜郡田辺町大字飯岡字久保田6番地に所在する。現地は飯岡丘陵東南端にあたり、南に派生する舌状支先先端部の南斜面で、付近一帯は現在茶畑として利用されている。この茶畑のなかに花崗岩若盤のマウンド状の露頭がみられ、横穴はこの露頭の南斜面を掘削して築造されているが、さながら墳丘を有する横穴の感がある。

横穴が掘削されている岩盤は風化花崗岩で、その掘削は比較的容易であったと考えられるが、同時に風化もやすく、壁面は非常に脆弱で現在もお風化は進行しており日々その姿をかえつつある。開口部はすでに崩壊しており、横穴内部も壁面に節理による亀裂が縦横に走り、奥半を除いてほとんどが原状を留めていない。

内部にはかなりの土砂が流入しており、その上面は開口部から奥壁に向い斜面をなすが、内部は比較的平坦で天井までの高さは奥壁部で1m程の余裕があり、人頭大の数個の石材とともに拵①がそなえられていた。

「（いしむら）昨岡②」の別名をもつ飯岡丘陵は、古来「飯岡古墳群」の所在地として知られてきた。周囲

第1節 調査地点と発掘区の設定

2kmあまりの小丘陵上に古墳の群集する景観は古くより人目を引いたと見え、『山城名勝志』に引用する寛永16年(1640)の「飯岡ノ鐘銘」には「山頭ニハ墳冢^⑧。其中ニ大ナル者二三。」と記されている。

飯岡丘陵は南山城のほぼ中央部にあたり、大和と大阪湾とを結ぶ重要な交通路であった木津川の喉頭を押さえることのできる地点である。そういった意味からしても、地域集団の首長墓たる前・中期古墳がこの飯岡の地に出現したのは、充分な必然性があったことだといえよう。

丘陵中央部の「仲峯」と呼ばれる高地には、薬師山・ゴロゴロ山・弥陀山の3古墳が所在する。いずれも丘陵を巧みに利用して築造されており、特に薬師山古墳はその好例と言えよう。径38m、高さ6mの中規模の円墳^⑥であるが、裾部を丘陵斜面に続かせることによる視覚的効果も十分に計算に入れられているものと考えられる。内部構造、外部施設については一切所伝がない。

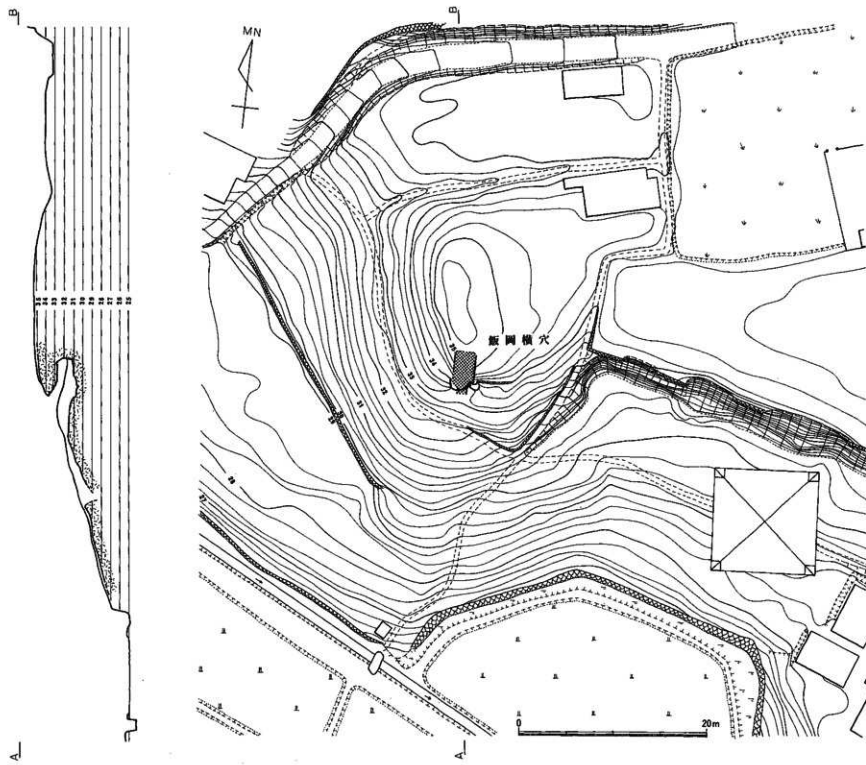
ゴロゴロ山古墳については京都府教育委員会原図による測量図が公表されている(下村晴文1972)。それによると、墳頂部に径20mの平坦面を持つ、径60m、高さ9mの大円墳であり、円墳としては八幡市美濃山王塚古墳(吉村幾温1972)、精華町丸山古墳(堤圭三郎1976、古墳かどうか疑問あり)と並ぶ山城最大の規模を持っている。外部施設としては、葺石の存在が確認されている。

弥陀山古墳は仲峯の西北の頂にある径25m、高さ4mの円墳である。内部構造・外部施設は何ら知られてはいない。1874(明治7)年頃盗掘され、古鏡の出土をみたという伝えもある(村田

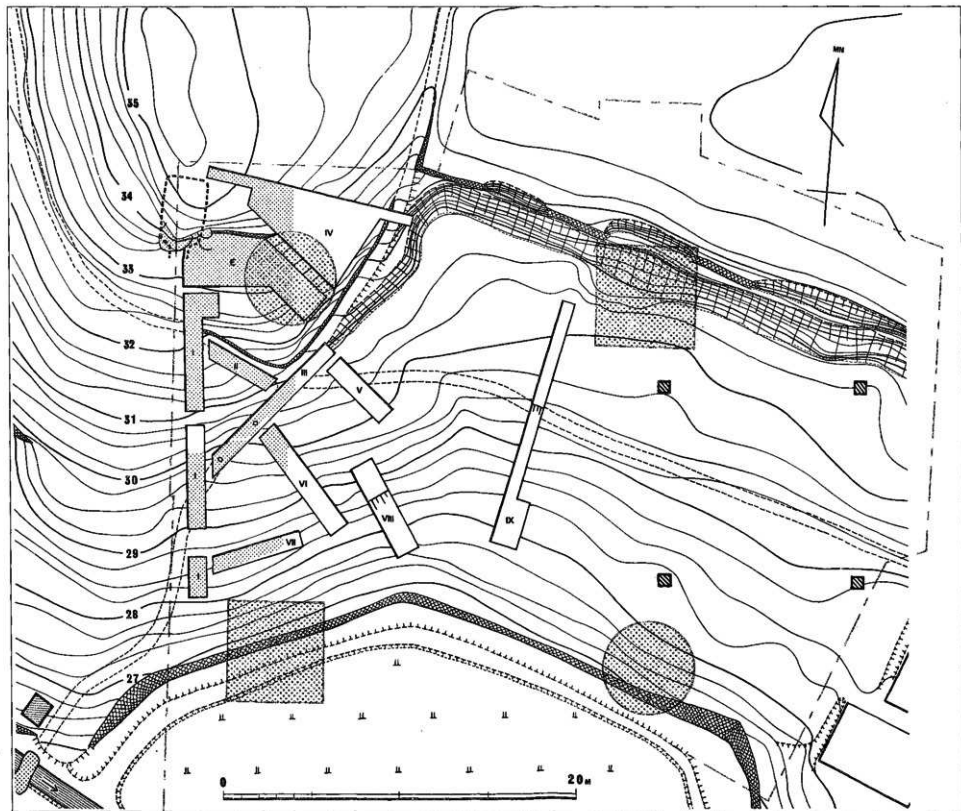


第19図 飯岡古墳群分布図(1/7,500)

1. 飯岡横穴
2. 飯岡東原古墳
3. トゾ古墳
4. 薬師山古墳
5. ゴロゴロ山古墳
6. 弥陀山古墳
7. 飯岡車塚古墳
8. 飯岡弥生遺跡



第29圖 振岡横穴 地形測量圖



第21図 飯岡城跡 トレンチ配置図 (赤は現存塔基礎)

太平 1955)のもの、真偽は不明である^③。

丘陵の西端、宇西原の地に所在する前方後円墳が飯岡車塚である。1905(明治35)年に主体部の壜穴式石室が掘り起こされ、岩井武俊氏、梅原末治氏によって学界に紹介された(岩井武俊 1905, 梅原末治 1920 a, 1938)。さらに、1971年には、竜谷大学考古学資料室の諸氏によって墳丘の測量調査が行なわれ、公表された(細守 1972)。近年では、墳丘東側の道路拡張の際に緊急発掘調査が実施され、埴輪・葺石が検出されている(吉村正親 1976)。墳丘規模は全長約 88m, 後円部径約 61m, 前方部幅約 43m, 後円部高 11m, 前方部高 7m をはかり、主体部に埋納されていた副葬品には、勾玉などの玉類、石剣をはじめとする多量の石製品、鉄刀、鉄剣などがある。以上のような内容からみて、古墳時代前期末、実年代としては4世紀末に築年できるものと考えられている。

丘陵の東端、宇小山の地にはトヅカ古墳がある。墳形は径 20m, 高さ 3.5m の円墳であり、墳丘には葺石・円筒埴輪が認められる。主体部は 1874(明治 7)年に発掘された南北を主軸とする壜穴式石室であり、現在なお墳頂に天井石の石材が散乱している。この古墳も飯岡車塚と同じく、岩井氏と梅原氏によって学界に紹介されている(岩井武俊 1905, 梅原末治 1920 a, 1938)。副葬品としては、鏡 3面、玉類、鹿角製装具付刀剣、馬具がある。古墳時代中期後半、実年代としては5世紀後半の時期が考えられている。

古墳時代後期の遺跡としては、従来より飯岡横穴の存在が知られ、また今回飯岡東原古墳の発見を見、いずれも此の度発掘調査を行なったものである。南山城地方は多数の横穴の分布地であり、美濃山・松井、堀切、北谷、そしてこの飯岡の横穴群が知られてきた(平良泰久 1975)。それらの横穴は、九州よりこの地に移住した「大住華人」たちが残したものと考えられ(森浩一 1975)、最近では美濃山・松井横穴群の荒坂支群において、南九州に特徴的な地下式横穴と対比された遺構も発見されている(江谷寛 1979)。しかし、飯岡というひとつの単位の中で、横穴と後期古墳、更には先述したような前・中期古墳がどのような相互関連を持って成立したかは、今後の課題であるといえよう。

註① 土地の古老によれば、飯岡横穴の南西約 1km に山本集落が営まれていたが、この集落の人々が現在も横穴を調べているとのことである。
 ② 『万葉集』巻第九の、柿本人麿の歌(1708番)にみる「トヅカ山」は、この飯岡であると言われている。丘陵東端には延喜式内侍岡神社が鎮座する。
 ③ 1711(正徳元)年成立。「新修京都叢書」第14巻(1971, 臨川書店)。

④ 1979年春、同志社大学考古学研究室有志が測量調査を行なった。
 ⑤ この古説出土云々の語は、トヅカ古墳の発掘と混同したものとも考えられよう。
 ⑥ 墳丘についての数値は、吉村正親1976の図面より算出。
 ⑦ 航空写真の観察より、これを北向きの方後円墳と見る説(吉村正親 1976)もある。

3. 調査の方法

今回の調査の対象は現在開口する飯岡横穴と、送電線鉄塔付替え工事に伴って現状変更のなき地域である(第21図参照)。横穴は事前の確認事項により保存を前提としたが、墓道等の前庭

第1節 調査地点と発掘区の設定

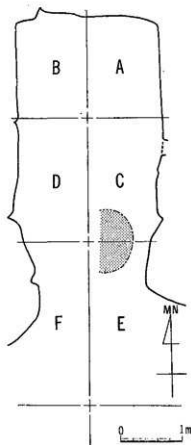
部の埋設部分が未確認なため、これの調査を必要とした。また横穴が従来よりその存在は広く知られてはいるものの、構造・所属時期等全く不詳であったので、これらの情報収集を目的とした横穴内の調査もあわせて実施した。

周辺地域については梅原博士の報告(梅原末治 1920a)にもあるように、かつては2基開口していた事実から少なくとも1基の横穴が埋設しており、この埋設した横穴を含め、その他の遺構の当該地域に於ける存否確認のための試掘をおこなった。

横穴：横穴については、すでに開口しており現在も民間信仰の対象となっていることから、調査当初より、度重なる横穴内の再利用が予想された。そこで調査にあたっては横穴の本来の床面に至るまでの堆積層中に、そうした再利用時の床面の遺存を想定し、可能な限りこれを検出することに注意を払い作業をすすめた。

まず横穴の主軸線を定め、これに直交するラインを2本設定し、A～Fの6つの区画に分けた(第22図)。そして先に東半のA、C、Eの3区を掘り下げ、土層の堆積状況を観察しつつ作業をすすめ、床面検出毎にこれを精査した。床面は、その上面を覆う良好な炭灰層の遺存と直上の遺物をもってそれと認定し、この炭灰層を鍵層として分層し、遺物はこの間のもを一括してとりあげた。こうした幾枚もの検出面毎の精査によって、予想を大きく上回る時間を要する結果となった。

なお、調査が進行していくなかで羨道部が予想以上に西へ振り、その大部分が調査区域からはずれることが判明した。そこで横穴内部はともかくも羨道部は境界際まで掘り進めても全掘はできず、その構造を把握できないばかりか、トレンチ壁面と羨道部東壁との空間が狭く作業が困難であり、無理をして作業をすすめれば横穴崩壊を助長することは必至であった。また堆積層も厚く、開口部付近では1.5mを越え、上部には花崗岩塊も含まれており、壁面崩壊と岩塊転落の危険性が極めて高いことなども考慮し、東側だけの半截のまま調査を打ち切り埋戻すことに計画を変更した。そして残る西側半分は将来の調査を期しそのまま残すことにした。なお、埋戻しにあたっては、まず横穴内部と羨道部の境の袖に相当すると考えられるコーナー等をビニールシートで被覆し、全体を10cm内外の厚さの河原砂で覆った後、西半の堆積層と区別できるような有機質の浸染の少ない土砂を、流入土上面まで充填した。また再調査に備え、今回の調査で用いた横穴主軸線を固定化するために、3cm角の角杭を三ヶ所に打ち込み、これに釘を蓄した



第22図 横穴内地区別

後、頭に赤色ラッカーを塗布し目印とした。さらにこれらの杭を覆う厚さで横穴内全体に土砂を入れ踏みしめるといった処置を講じた。

周辺地域：周辺のトレンチは第21図の如く設定した。横穴前庭及び南側斜面に第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの各トレンチを設定し、横穴開口部から前庭部にかけての土層堆積状況を観察するとともに前庭部の外部施設及び埋没横穴の探査をおこなった。横穴上には第ⅣトレンチとE区東拡張トレンチを設定して、岩盤整形、盛土等による墳丘施設及びその他の外部施設の存否の確認をおこなった。さらに第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸの各トレンチを丘陵南端の緩斜面と横穴東側の平坦面に設定し、旧地形の状況と横穴以外の遺構の探査をおこなった。

第2節 調査の経過

- ・ 2月27日 田辺校地の収蔵庫より器材を搬入。現状確認と作業の打合せをおこなう。
- ・ 2月28日 横穴東側に仮B.M.杭を設定し、海拔高度の移動をおこなう(仮B.M.高34.76m)。
- ・ 3月1日 調査区の現状写真を撮影の後、茶畑の伏採にとりかかる。
- ・ 3月2日 茶畑の伏採と並行して試掘トレンチを設定していく。
- ・ 3月3日 第Ⅸトレンチを掘り始める。
- ・ 3月5日 第Ⅸトレンチの掘り下げを進める。耕土層より須恵器片が出土。
- ・ 3月6日 横穴内の作業に入る。横穴内の地区割付けの後、A区の一部を掘り下げ土層堆積状況を観察する。攪乱層より須恵器、近現代の磁器が混在して出土。
- ・ 3月7日 A区をさらに掘り下げ、堆積の把握に努める。また第Ⅱトレンチを掘り始める。
- ・ 3月8日 C区の流入土層を除去していく。この際、開口部直下に於いて天井部崩壊による花崗岩塊にあたる。
- ・ 3月9日 C区の作業と並行してE区も掘り始め、さらにこれを東側へ拡張し羨道の肩を追求する。また墳丘の有無確認のため第Ⅳトレンチを掘り始める。
- ・ 3月11日 C区に於いて第Ⅰ床面を検出。第Ⅲトレンチを掘り始める。
- ・ 3月12日 C区第Ⅰ床面下を掘り下げ、くらわんか茶碗等の密着する第Ⅱ床面を検出。
- ・ 3月13日 C・E区第Ⅱ床面の精査により古伊万里片、土師皿等を出土。第Ⅴ・Ⅵトレンチを掘り始める。
- ・ 3月14日 第Ⅶトレンチを掘り始める。午後より現地説明会をおこなう。
- ・ 3月15日 C・E区第Ⅱ床面下を掘り下げる。この際、多量の瓦器、土師皿片が出土。第Ⅶトレンチの土層図を作成する。
- ・ 3月16日 C・E区に於いて奥に向かって傾斜する第Ⅲ床面を検出。第Ⅷトレンチを掘り始める。
- ・ 3月17日 C・E区第Ⅲ床面の精査をおこなう。この際、E区のトレンチ壁際に於いて女室東側袖と考えられるコーナーを検出。

第3節 主体部の調査

- 3月18日 A・C区間に残した畦を土層図作成の後除去し、A区を第Ⅲ床面まで掘り下げる。この際、人頭大の石敷を検出し、この間隙より瓦器片、土師皿片等が出土。また第Ⅳトレンチ及び、E区の拡張をおこなうが、土師皿、フイゴ羽口等の出土をみる。
- 3月19日 第Ⅲ床面石敷の実測と第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの各トレンチの土層図を作成する。
- 3月22日 第Ⅲ床面石敷を除去し、さらに下層を掘り下げる。この際C区に於いて浅皿状の遺構をトレンチ壁面にかかった状態で検出。そしてこの埋土上面より人骨片が出土。
- 3月23日 第Ⅳ床面を検出。これは横穴当初の床面と一致した岩盤の面であるが、C区ではこれが掘り抜かれており、バラスの堆積層が床面を形成していた。E区拡張トレンチ、第Ⅸトレンチの土層図を作成する。
- 3月24日 第Ⅳ床面下の精査をおこなう。これによりC区の岩盤の掘り抜き部分は後世のピットである蓋然性が高まる。第Ⅰトレンチの土層図を作成する。
- 3月25日 横穴の写真撮影、第Ⅲトレンチの遺構の実測図と第Ⅶトレンチの土層図を作成する。
- 3月26日 横穴内の土層堆積図の作成と、各トレンチを平板に記入。
- 3月27日 横穴内の実測にとりかかる。
- 3月30日 横穴の実測を完了し、横穴内の作業の全てを終える。
- 3月31日 横穴内の埋戻しにとりかかる。またこれと並行して横穴周辺の地形測量をおこない4月10日に全作業を終了し、翌4月11日に調査器材を撤収した。

第3節 主体部の調査

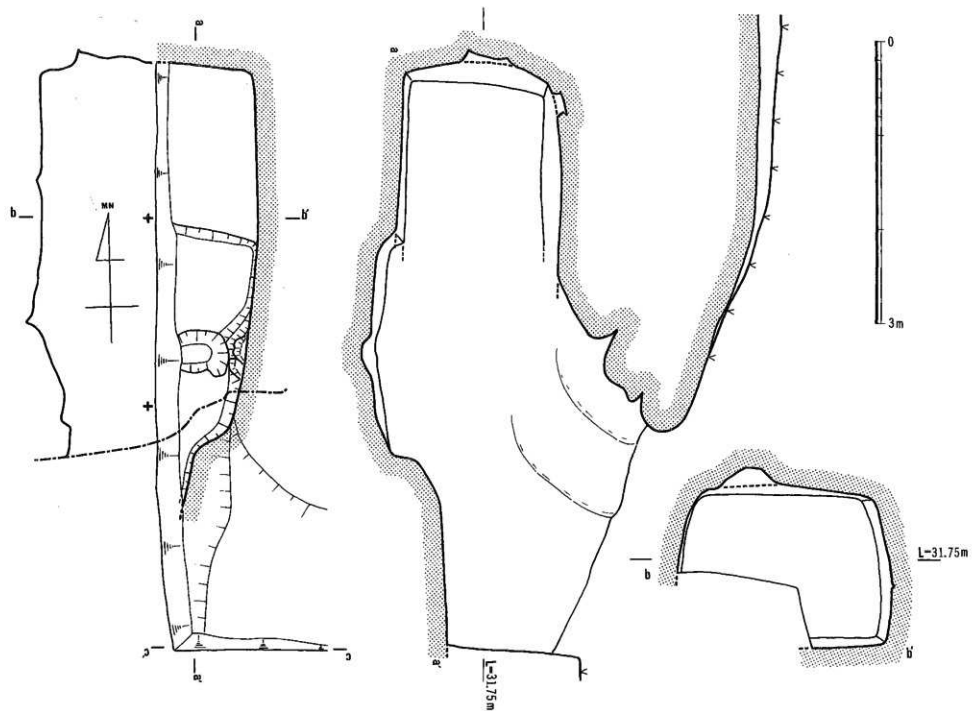
1. 横穴の構造(第22～24図)

飯岡横穴では、花崗岩岩盤を穿って構築されている点が、まず特記される。南山城地域の他の横穴については未見であるが、畿内の横穴の大多数が、加工しやすい風化した凝灰岩及び砂岩を基盤としていることを考えると、選地からも興味もたれる。

現状では、羨道部天井が崩壊していること、その全容を明らかにしえなかったことから、玄室・羨道の区別については、平面形態に一応着目し、第22図のA—Dを玄室、Dより外側を羨道としておくこととしたい。(横穴各部の計測値は第24図を参照されたい。)

横穴は、S1°30'W 方向に開口し、平面形態は所謂羽子板形を呈する。これは長方形プランの玄室に羨道が付くもので、玄門部が丸みをもって鈍角に曲がっているため、明確な袖部は有さない。羨道部床面は確認していないので詳細にしえないが、玄室中央から羨道部にかけて、大小いくつかのピットが床面岩盤を穿ってつくられている。これらは無規則に、しかも横穴構築時とは異った仕上げがなされているので再利用時のピットと判断した。

立面形態はアーチ形であり、所謂蒲鉾形を呈する。奥壁部では、床面より約60cm程、若干外方



第24図 原穴横穴 実洞窟

向に直線的に立ち上がり、内弯しつ約 1.5m で天井部に至る。壁面と天井の境には明確な稜線が見られる。三壁とも同様で天井はほぼ平坦である。

この横穴の形態上の特徴としては、全体的に丸みをもち、立体的な胴張り状を呈することである。これは、床面での形態に比べて、中位のレベルに於ける面積の増加があり、天井部に於いては床面とはほぼ等しくなると考える。次に、調整痕は、凝灰岩を基盤としている横穴ではよく見られるが、ここではかわって丁寧な磨きが施されていると考えられる。これは岩質の差に起因するものであろう。当初、土砂が流入していた部分は比較的風化をまねがれており確認できた。

床面は、玄室床面の約半が後世の攪乱を受けており、羨道部の床面も確認できなかったものの、横穴は本来水平に構築されていたことにより排水施設等は設けられていなかったと考えられる。このことは未調査部分が多いことから断定はできないが、周辺地域の状況からして大過ないものと思う。

次に袖の問題についてであるが、横穴式石室との比較からすれば、横穴の場合も同様に、有袖から無袖タイプへと変遷^①すると考える(竹並遺跡調査会1977)。しかし有袖タイプの場合、その大半が両袖式である点には注意せねばならない。考えられることとして、①横穴式石室の両袖・片袖は構築上の必然的な差であり、横穴には無関係である。②被葬者集団の差である。様々な検討を加える必要があるが、だいたいこのどちらかに落ちつくのであり、筆者は後者の立場をとりたい。たとえ被葬者集団の差とまでは言えないまでも、南九州の地下式横穴から横穴が発生する^②との立場から、片袖タイプの横穴が存在しないのは地下式横穴以来の伝統と言えるかもしれない。

註① 畿内の横穴で排水溝を有するものとしては、大坂府玉手山東横穴群があげられる。南山城の堀切横穴群では確認しておらず、畿内では通常の施設ではなかったと考えられる。

② ただ、有袖と無袖タイプの同一群内に於ける併存は、時間差も含んで、あまり一般的であるとは言えない。

③ かつて相模(真鍋昌宏 1975)で少しふれたが、

宮崎県小木原古墳(田中茂 1972)(マウンドを有する地下式横穴)と竹並A地区35号横穴(赤崎敏男 1977)の形制的類似、I型式後半の須恵器を出土し同時期と考えられること、宮崎県下ではそれよりも古い地下式横穴が存在し、横穴はこれ以後多出すること、等を考えると、地下式横穴から横穴への変遷は当然考えられることである。



第24図 横穴平面プラン模式図

A—D 4.1m, A—A' 1.1m
B—B' 1.16m, C—C' 0.86m
D—D' 0.52m

2. 横穴内の土層の堆積

横穴内の土層の堆積は再利用にともなって生成されたもので複雑を極めていた。これらは一つの完結した土層をなさず、面的な広がりもみせないものが多かった。その上、堆積層の土壌がバ

第3節 主体部の調査

ラス質であるため、堅く踏みしめられた土床面も形成しえなかったものと考えられる。そして実際にはそれぞれの再利用の時期が近接していたり、その使用時間が短かかったりして、層を形成するには至らず、極めて薄い塊状の堆積となり、これが部分的に幾枚も重畳するといった状態で、堆積層の分層再利用時の床面の追求にはおのずと限界があった。

さて横穴内の土層の堆積は第25図の如くであるが、⑩以下に於いて再利用による堆積の状況を見ることができる。堆積層は基本的には、再利用によって生じた炭灰を主とする炭灰層、横穴天井部及び壁面の風化剥落等による花崗岩パラスの自然堆積層、そしてそれぞれの再利用時の横穴内の清掃、堆積層の掻き出し作業等による攪乱層—の3つの層で構成されている。そしてこれらは錯綜しつづもくり返し、一定の堆積のサイクルとしてとらえられ、さらには各炭灰層の最下面が再利用開始時の床面であり、それぞれの炭灰層間の堆積層に含まれる遺物も一定の時間的屬性をもつと考えられる。

なお、⑩以下には比較的良好な炭灰層が4層(⑪・⑫・⑬・⑭)存在した。そこでこれらの炭灰層を鍵層として堆積層を5つに分け、上層より順に第Ⅰ～第Ⅴ層とした。

第Ⅰ層 ⑪～⑬

自然堆積層及び攪乱層下に広がり、直上を天井部崩壊による花崗岩パラス層がその岩塊をともなって覆っていた。⑪がそれで、この直下に⑬の炭灰層が広がっていた。⑬は極めて薄い炭灰層であり、床面はA区では上層からの攪乱が及んでおり、すでに遺存しなかったが、C区ではおおむね水平を示し、E区に至って外側への傾斜をみせた。なおこの層中及び床面上からの遺物の出土は認められなかった。

第Ⅱ層 ⑭～⑯

第Ⅰ層と同様にA区は土層からの攪乱がおよんでいた。第Ⅰ床面下に褐色有機質土層⑭がC区に薄くE区に厚い堆積をみせC区に於いては炭灰層が介在し、床面直上の炭灰層⑯とともに互層をなしていた。さて第Ⅱ床面は僅かに外側に傾斜を示すが、薄い炭灰層⑯に覆われているが、外側に向かいしだいに薄くなりE区内に於いて消失していた。また同区床面直上に於いて焼土のブロック⑰が床面上で検出された。なお、C区内に於いては床面直上にて上下転倒した状態でくらわんか茶碗が、その直下より土師質小皿も出土した他、床面より遊離して炭灰層中から寛永通宝2枚を検出した。

第Ⅲ層 ⑰～⑱

第Ⅱ床面下は褐色の有機質土層⑰・⑱が黄色パラスの自然堆積層⑲下の⑲にまでおよんでいた。これは炭、灰と、瓦器碗、土師質皿、土釜等の破片を多量に含むパラス質の堆積層で、至道元宝も検出された。さらにこの層を除去する過程に於いて一つの石敷遺構をトレンチ壁面にかかった状態で検出した。

第Ⅲ床面石敷遺構(第26図)

この石敷は⑲を掻き均し床面として、この上に据えられていた。石敷は比較的扁平な石を用いるか、あるいは石の平坦な面を上にするかしてその面を水平かつ同一レベルに揃えていると考え

第1層

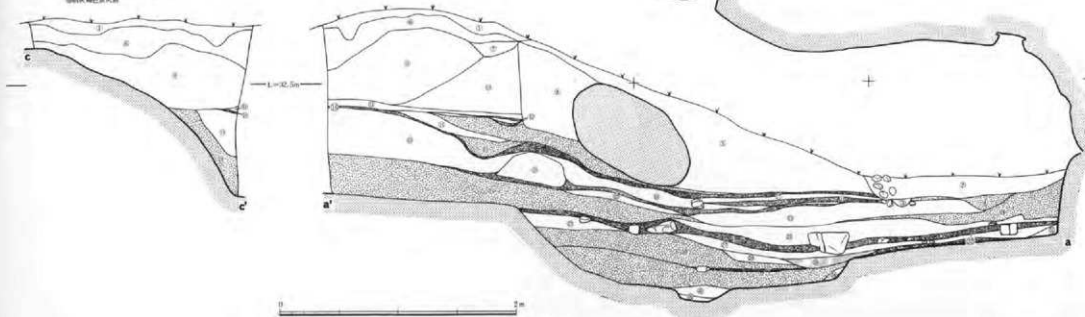
- ①暗灰褐色土(粘土)
- ②暗褐色砂質土(灰層)
- ③暗褐色土(自然植物)
- ④暗褐色・アラス層
- ⑤暗褐色粘質土
- ⑥灰褐色土
- ⑦灰褐色土(混・アラス)
- ⑧灰褐色層(礫質)
- ⑨暗褐色砂質土(混・アラス)
- ⑩暗褐色砂質土
- ⑪暗褐色砂質土(自然植物)
- ⑫褐色灰質層
- ⑬暗褐色・アラス層
- ⑭暗褐色砂質土(混・アラス・灰植物)
- ⑮ 砂 土 (混・瓦片・小礫)
- ⑯暗灰褐色灰質層

第2層

- ①暗褐色土(混・アラス)
 - ②暗褐色砂質土(自然植物若干)
 - ③ 砂 土 (混・自然植物若干・アラス)
 - ④暗褐色粘質土(粘土)
 - ⑤暗褐色灰質層
- 第3層
- ①暗褐色砂質土
 - ②暗褐色砂質土(混・アラス)
 - ③暗褐色・アラス層(混・自然植物若干)
 - ④暗褐色砂質土(混・アラス)
 - ⑤暗褐色灰質層

第4層

- ①暗褐色土(混・アラス)
 - ②暗褐色砂質土(混・灰層)
 - ③ 砂 土 (混・自然植物)
 - ④暗褐色・アラス層
 - ⑤暗褐色砂質土(混・アラス)
 - ⑥暗褐色灰質層
- 第5層
- ①暗褐色土(混・アラス)
 - ②暗褐色砂質土(混・アラス・自然植物)
 - ③暗褐色砂質土
 - ④ 砂 土 (混・自然植物)



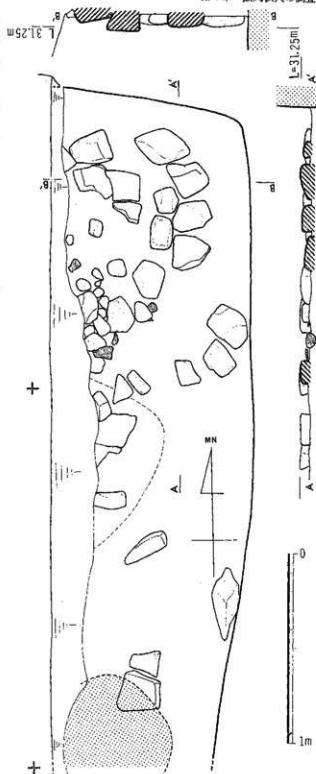
第4層 狭六内の土層の断面

られるが、壁面にかかっており、A区に於いては比較的良好に原位置を留めてはいるもの、他は全て床面より一旦遊離していること等によりその正確なプランは把握することができなかった。なお、石敷の間隙は比較的広く上面近くまで炭灰が堆積しており、ほぼ石敷の上面とレベルを同じうして灰白色の薄い炭層が広がっていた(第4章参照)。また炭灰層中には石敷の間隙に落ち込んだ状態で、瓦器碗、土師質皿、須恵質練鉢等がみられ、炭層の上面からは土釜、土師質皿が出土した。

第IV層 ㊦～㊧

第III床面下の暗褐色有機質土層㊦を除去した段階で、C区内北端に於いて略長方形プランと考えられる浅皿状の遺構㊧(第26図破線部分)を検出したが、ちょうど対角線状に折半したかたちで断面にかかっており全容を知ることができなかった。検出箇では遺構の南半は灰褐色土層㊦、北半は炭灰層㊦を掘方としていたが、これは横穴内に広い範囲で広がる㊦上をC区より外側に向って漸次厚く㊦・㊦が覆っていたためである。遺構はこれらの層を掘り抜き、㊦の黄色バラス層にまでおよんでいた。遺構の埋土は灰まじりの暗褐色土で、検出面直下にて両端を欠損した人骨片を検出した。

さて第IV床面は先の炭灰層㊦下に広がり、A区に於いては平坦な岩盤の面で、C区より南半ではこれが切



第26図 第III床面(石敷)実測図

第3節 主体部の調査

れ、黄褐色バラス層㊸に置換わり床面を延長していたが、前述の岩盤の面とは横穴本来の床面のことで、奥壁より1.7m程で前面に落ちていたため、これに堆積していたバラス層の上面を岩盤の面に揃えて床面としたものと考えられる。またこの床面はC区中央のレベルが幾分か低くなっており、先の㊸の人骨片を含んだ遺構の一部を掘り抜かれていたが、㊸の炭灰層の延長がここに堆積し、この層中より土師質皿片が出土した。

第V層 ㊸～㊸

横穴本来の床面である岩盤の落込み内の堆積層で、㊸の黄褐色バラス土を除去した段階に於いてこの落ち込みが深さ15cm内外で狭道部にまでつづくことが確認された。さらにこの底面に不整形を呈するピットが現われ、下底の㊸より若干の炭化物が検出された。先の岩盤の落込み及びピットは整形とその形状の不自然さ等により再利用の際に横穴の床面を穿ったものと考えられるが、これらが一連のものか否かについては詳かにしえない。

このように横穴内の土層の堆積層中に於いて4つの再利用の床面を検出することができたが、検出した最終床面である第I床面形成後の土層の堆積は、第I床面上での再利用の最中、あるいは直後に天井部の崩壊が起こり、この上面を花崗岩塊をとまなう黄褐色バラス層㊸が覆い、同時に開口部が不完全ながらも閉塞した。そして一時的に横穴への進入が困難となり、この間に思うにまかせ土砂が流入し、堆積したようである。しかし横穴の利用は断絶することなく、現在も引続いて信仰の対象として利用されていることは前述の如くである。なお、上層の㊸は現在の横穴利用にとまなう攪乱層であり、㊸は窪溜め坑、㊸・㊸・㊸は茶畑の耕作土層である。

3. 出土遺物

横穴内より出土した遺物は各時代のものを含んでいた。これらは横穴に伴う副葬品である蓋然性をもつ古墳時代のものと、平安時代以降の横穴再利用に伴うものとに大別されるが、再利用の際して搬入されたものがほとんどであった。そしてこれら平安時代以降、近現代に至る各時代の遺物は、営々とした横穴の再利用の様子を彷彿とさせるのである。特に中世に於いては利用が活発であったのか、この時代の瓦質、土師質の土器類が他の時代とくらべて多かった。

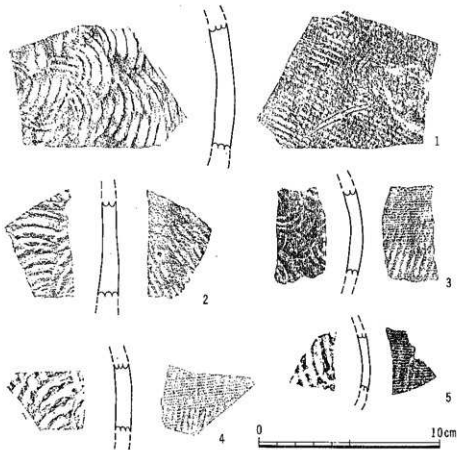
ところでこれらの出土遺物はどれも悉く破砕を受け小片化しており、接合等の復元困難なものがほとんどで、実測可能なものも出土した個体数からすればきわめて僅かであった。これは調査が横穴内の全体にわたって実施できなかったことにもよるが、何よりも再利用の際しての横穴内の堆積層の度重なる攪乱が大きな要因であると考えられる。

1. 古墳時代の遺物(第27図、図版16-1~4)

横穴に伴う蓋然性をもつ遺物で、数片の須恵器が出土したにとどまる。これらはどれも攪乱によって移動され、原位置をとどめるものは一点もなかった。

1. (第27図-1, 図版16-1)

外面に平行叩き目、内面に明瞭な同心円状の叩き目を残す。胎土は精良で堅く焼き締まり淡紫



第27図 飯岡横穴内出土遺物 (1)

灰色を呈すが、外面は二次的に火熱を受け、部分的に淡黄褐色を示す。

2. (第27図—2, 図版16—2)

外面に平行叩きの後、ナデを施す。内面には明瞭な同心円状の叩き目を残す。胎土は精良で堅く焼き締まり、断面芯部及び内面は暗灰色、外面は黒灰色を呈す。

3. (第27図—3, 図版16—3)

外面に縦位の平行叩きの後、カキ目を施す。内面は同心円状の叩きを重ねた後、粗雑なスリ消しをおこなっている。胎土は精良で堅く焼き締まり淡灰色を呈すが、二次的に火熱を受け部分的に淡黄褐色を示す。

4. (第27図—4)

外面に平行叩きの後、ハケ目を施し、内面には明瞭な同心円状の叩き目を残す。胎土は精良で堅く焼き締まり暗灰色を呈す。

5. (第27図—5)

外面に平行叩きの後、カキ目を施す。内面には明瞭な同心円状の叩き目を残す。胎土は精良で

第3節 主体部の調査

堅く焼き締まるが、断面芯部に焼成時に生じた空隙をみる。色調は淡灰色を呈すが、外面は二次的な火熱のため淡黄褐色を示している。

6. (図版16—4)

坏蓋の小片である。天井部と体部との境に僅かな段を有する。口縁部は幾分外反し、その内側は内傾した平面を成す。胎土には若干の砂粒をまじえ、堅く焼き締まり暗灰色を呈す。

これらは小片であるため、器形、所属型式等を詳にしえないが、横穴使用時期を決定する重要な手がかりであるだけに、性急な型式比定等は避け、再調査による資料の追加を待ちたい。

横穴の再利用に伴う遺物

横穴の再利用に際して搬入された遺物は各時代のものを含んでいた。瓦器碗、土師質皿、瓦質・土師質の土釜が主なもので、他に黒色土器、染付磁器、土師質高杯、鉄貨等がある。これらは第Ⅱ～Ⅳの各層から出土したが、攪乱のため破砕、小片化し、各時代のものが混在し、殊に第Ⅲ層に於いてそれが顕著であった。

黒色土器(第28図1, 図版16—5, 6)

第Ⅲ層より碗の破片が出土している。内寫気味に上方に開く体部内面に渦状のヘラ磨きを施し、内面及び口縁部外面を黒色に焼したもので、製作手法等によって2類に分けられる。

I類 (第28図—1, 図版16—5)

口縁部を僅かに外反させ内側に凹線をめぐらせたものである。二次的に火熱を受けており、器面の調整等の観察を妨げているが、胎土に若干の砂粒をまじえ淡褐色を呈す。

Ⅱ類 (図版16—6)

体部外面にヘラ削りを施し口縁部を直線的に薄く尖らせたもので、胎土は精良にして堅く焼き締まり淡黄褐色を呈す。

これらは小片であるためさらに検討を加えねばならないが、ともに黒色土器A類(田中琢 1967)に相当し平安時代中頃の所産と考えられる。

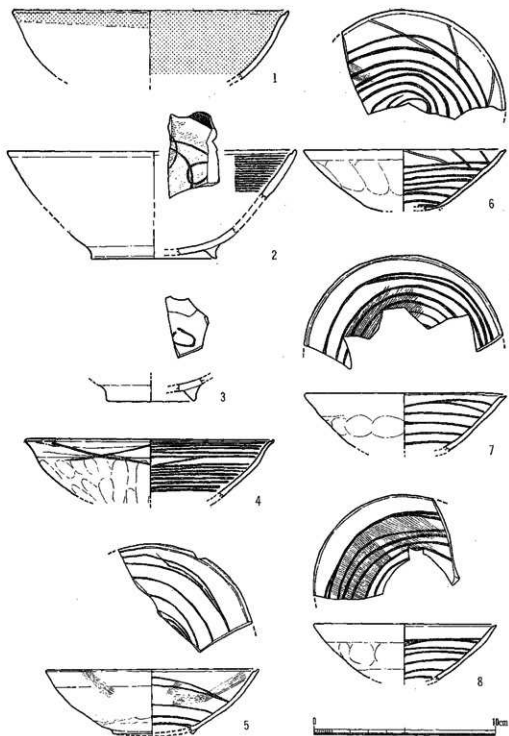
瓦 器

第Ⅲ層より多量の椀の破片と小皿片一点が出土した。小片が多く仔細な検討を要するが、従来からの研究(稻垣晋也 1968・白石太一郎 1969, 1977)によって明らかにされている型式内容を念頭においてA～Dの4類に分類した。

A類 断面形が逆三角形のしっかりした高台を有し、器面はヘラ磨きを、内底面には連結輪状文を施したものである。法量及び内底面の連結輪状文等の製作手法によってさらに二つに分類した。

A—I (第28図—2, 図版16—7, 8)は口縁部内側に凹線を一条めぐらせ、内底面には細く丁寧な連結輪状文を施している。

A—Ⅱ (第28図—3, 図版16—9)は内底面の連結輪状文が太く稚拙であり、高台の形態も鋭さを欠き、Iよりも型式学的に後出するものである。



第28図 飯岡横穴内出土遺物(2)

第3節 主体部の調査

これらは両者ともに胎土は精良で堅く焼き締まり灰白色を呈し、器面は内外面ともにいぶしが施されている。

B類 (第28図—4, 図版17—1) 口径13cm内外の薄い器壁で口縁部は強い横ナゲのため僅かに外反し、その内側には一条の沈線がめぐる。体部外面は指オサエ成形のままで、内面及び口縁部外面に渦状の暗文を施し、外面のものは口縁部のみで粗雑である。胎土は精良で堅く焼き締まり淡灰褐色を呈し、器面は内外面ともにいぶしが施されている。

C類 (第28図—5~8, 図版17—2~4) 口径11~12cmで底部には細い粘土紐を貼付けた脆弱な高台を有するものである。これらの高台は底部より上位に付加されているため丸底を確保しえず、高台としての機能を果していないのが特色である。体部外面は指オサエ成形のままで、口縁部内側に一条の沈線をめぐらせた後、口縁部を一周ナゲ廻し、体部内面に簡略であるが、渦状の暗文を施している。胎土は精良で堅く焼き締まり灰白色を呈し、内外面ともにいぶしを施すが、これが浅く素地をあらわすもの7(図版17—3)もある。なお6(図版17—2)は口縁部内側に長さ3~4cm、幅1.5mm程の条線状の圧痕が3~4cmの間隔をおいて斜位に数条遺存している。

D類 (第29図—1, 2, 図版17—6, 7) 薄手丸底で高台をもたず、いびつで不安定な器体である。体部外面は指オサエ成形のままで、口縁部は端部内側に沈線を一条めぐらせた後、一周のナゲ調整が施されている。また体部内面には渦状の暗文が粗雑に施されている。胎土は若干の砂粒をまじえ固く焼き締まり灰白色を呈す。なお、いぶしが浅く口縁部の内外面のみ部分的に暗青灰色を示す。

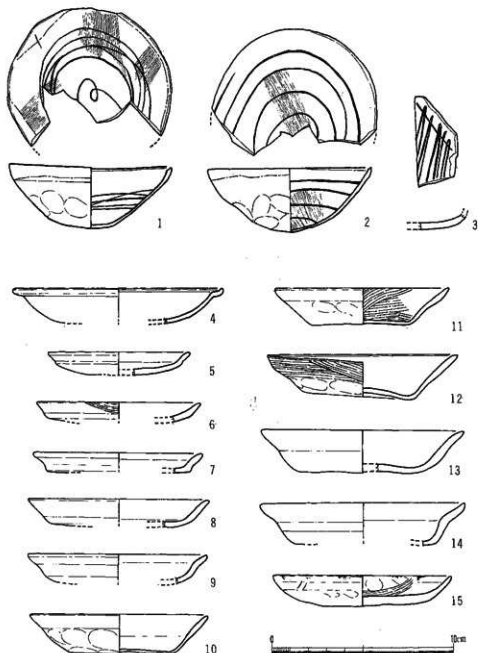
皿 (第29図—3)

底部の破片で磨減が著しい。平底で体・底部の境は丸い。内底面にジグザグ状、その外周に渦状の暗文を施している。胎土は精良で堅く焼き締まり灰白色を呈し、器面は内外面ともにいぶしが施されている。

これらの瓦器は新旧各型式のものが同一層中に混在していたことは先に述べたとおりである。ところがこれらは形態、製作手法等に於いて大和地方で出土する瓦器と極めて類似することから、大和に於ける変遷過程のなかでとらえられ、従来からの編年研究と対照すると下表の如くなる。

第3表 瓦器編年対照表 (白石太一郎1977, 稻垣晋也1961, 1962, 1968により作成)

飯岡遺跡 出土瓦器	白 石 編 年	稻 垣 編 年
A—I類	Ⅱ—1 型式	12世紀前半
A—II類	Ⅱ—2 型式	12世紀後半
—	Ⅱ—3 型式	12世紀末
B 類	Ⅲ—1 型式	13世紀前半 ~ 中葉
—	Ⅲ—2 型式	13世紀後半
C 類	Ⅳ—3 型式	14世紀代
D 類	Ⅲ—4 型式	15世紀前半



第29図 飯岡横穴内出土遺物(8)

註① 大和地方の瓦器研究が稲垣吾也氏、白石太一郎氏によって推進されてきたことは先に述べたとおりである。ところが遺憾なことに、両者の編年上共通すると思われる型式に与えられている実年代には、その当初より齟齬が存在しており、半世紀

から約1世紀にも及ぶズレがみられる。新資料の追加等により編年案の修正がなされ、その隔りは縮小されつつはあるが依然膠着状態のままである。したがってここでは両者の該当型式及び年代観をそのまま並記することにした。

第3節 主体部の調査

土師質皿 (第29図4~15, 図版18-1~8)

瓦器とともに多量の土師質皿の破片が出土した。第II~IV層から出土したが、第III層のものが大半を占める。以下各層毎に説明を加えていく。

第IV層出土土師質皿 (第29図-4, 図版18-1)

内湾気味の体部で、口縁部を外側水平方向に屈曲させたものである。口縁端部はつまみ上げ内側に巻き丸くおさめている。体部外面は指オサエ成形のままであるが、体部内面にナゲ調整、口縁部には横ナゲ調整を施している。胎土は精良であるが、焼成が不十分で淡黄褐色を呈し、部分的に淡青灰色を示す。

第III層出土土師質皿 (第29図-5~14)

形態、法量等によりa~cの4類に分類して説明を加えていくことにする。

a類 体部の立ち上がりが短かく浅皿状を呈するものであるが、製作手法等に起因した細部の差異によりさらに2つに分類した。

a₁類 口縁部の強い横ナゲ調整のため体部は幾分外反し、底部との境に段もしくは稜をみせるものである。

5(図版18-6)は底部中央の肥厚するもので、胎土は精良で堅く焼き締まり淡橙色を呈す。

6は時計回りの方向の横ナゲ調整が認められる。胎土は精良で堅く焼き締まり乳褐色を呈すが、外面に煤の付着をみとめる。

7(図版18-7)は口縁部の強い横ナゲ調整によって体部内面に稜が認められる。胎土は砂まじりで堅く焼き締まり淡灰褐色を呈し、口縁部の内外面に油痕を認める。

a₂類 a₁類よりも一回り大きく、口縁部に横ナゲ調整を一周施し、平底で体部は底部よりゆるやかに立ち上がるものである。

8(図版18-8)はまっすぐのびる体部をもち、口縁端部は鋭く尖り、胎土は精良であるが、焼成は不十分で乳褐色を呈す。

9は口縁部が外反し、胎土は精良で堅く焼き締まり淡橙色を呈す。

b類 平底で体部外面の指オサエ成形が強く、体・底部の境が屈曲し体部も僅かに外反するものである。これらは器壁は薄いが、口縁は肥厚し、横ナゲ調整が一周施されている。

10(図版18-3)は内底面に反時計回りの方向の不連続のハケ目が認められる。胎土は精良で堅く焼き締まり淡橙色を呈すが、体部外面は二次的火熱を受け黒褐色を示す。

11は底部中央の僅かに上がるものである。胎土に若干の砂粒をまじえ堅く焼き締まり淡灰褐色を呈すが、器面は二次的火熱を受け黒褐色を示す。

12(図版18-2)も底部中央の上がるもので、口縁部の横ナゲ調整は二周に及ぶ。胎土は精良で堅く焼き締まり淡橙色を呈す。

c類 平底で幾分外反気味に立ち上がる体部をもち、口縁部に横ナゲ調整を一周施すものである。

13(図版18-4)は体部下半の指オサエが強くて体部の外反が顕著で、口縁端部は僅かに内傾する。

14は体・底部の境は丸みをもち口縁端部を丸くおさめている。内底面に一条のナデ調整を認める。

これらは胎土・色調が共通し、砂粒をまじえ明褐色に焼き締まる。

第Ⅱ層出土土師質皿 (第29図—15, 図版18—5)

体部の立ち上がりが短かく浅皿状を呈すが、体・底部の境が不明瞭で丸く、底部が肥厚するものである。内底面に直線のナデ調整、体部外面には指オサエ成形、口縁部には横ナデ調整を一周施している。胎土は精良で堅く焼き締まり乳黄褐色を呈し、口縁の内外面には油痕を認める。

これらの土師質皿は第Ⅱ、第Ⅳ層出土のものを除いて第Ⅲ層中に各型式のものが混在していたことは先に述べたとおりである。

中近世の土師質皿の編年の研究は、始められてまだ日が浅く、他の陶器の編年等に比して立ち遅れの感が強い。しかし近年旧平安京城、草戸千軒町遺跡等の各地域(宇野隆夫 1978, 松藤和人 1978, 志道直 1976)でその研究が意欲的にすすめられ編年も徐々に完成されつつある。地域性をはじめとして十分な検討を施していないが、これらの成果を踏まえておおよその年代を考えてみたい。

第Ⅳ層出土土師質皿は京大北部構内、平安京左京四条一坊I号トレンチ第Ⅲ層出土のもの(宇野隆夫 1978, 田辺昭三・吉川義彦編 1975)に類似し10世紀を中心とする年代が与えられる。また第Ⅲ層以上出土の土師質皿は同志社キャンパス内出土遺物(松藤和人 1978)の第Ⅲ期中の小皿、中皿に類似すると考えられるものが含まれており、おおよその年代を14世紀代とすることができるようである。

土釜 (第30図—2~6, 図版18—9~13)

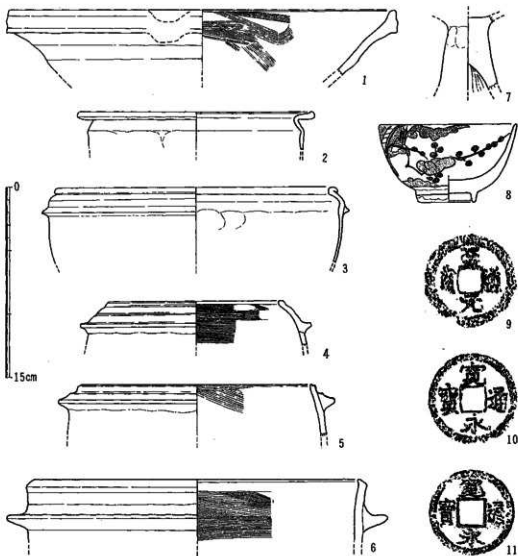
第Ⅲ層中より瓦器碗、土師質皿に混在して各種の土釜が出土した。土師質のものと瓦質のものに分かれる。

土師質釜 1 (第30図—2, 図版18—9)は上方に開き気味の体部を一旦内側に折曲げ、くびれさせ頭部とし、さらに水平外方向に折返し口縁としたものである。器壁は薄いが口縁部は肥厚し、端部を上方につまみ上げた後、外周を面取りして角張らせている。体部内面の屈曲部下に横位のハケ目が認められる。口縁部の内外面には横ナデ調整が施され、体部外面にも入念なナデ調整が認められる。胎土は若干の砂粒をまじえるが、堅く焼き締まり淡黄褐色を呈し、外面には厚い煤の付着が認められる。

2 (第30図—3, 図版18—10)は垂直気味に内湾する体部と大きく内側に湾曲する口縁部とからなり、口縁部直下に低く、幅の狭い三角形の凸帯状の鈎をめぐらせたものである。器壁は薄いが口縁部は幾分か肥厚している。口縁部はその端部を外方に折返して玉縁状に丸くおさめる。体部内面の先端には連続して指オサエ成形が施されているが、外面には入念なナデ調整、口縁部にも横ナデ調整を施している。胎土は若干の砂粒をまじえるが堅く焼き締まり淡褐色を呈し、外面には厚い煤の付着が認められる。

瓦質釜 1 (第30図—4, 図版18—11)は内湾する口縁部の下位に梯形の鈎をめぐらせたものである。口縁部は端部を面取りして角張らせ、外面には横ナデによる凹線が二条みられる。体部内

第3節 主体部の調査



第30図 飯岡横穴内出土遺物(4) (銭貨は実大)

面には横位のハケ調整が施され、外面はナデ調整によって全体を平滑に仕上げているが、鈔下端は未調整で接合痕を留める。胎土は砂粒をまじえ、焼成は良好で堅く焼き締まり灰白色を呈し、器面は暗青灰色にいぶされている。

2(第30図—5、図版18—12)は内湾気味の体部上位に梯形の鈔をめぐらせたものである。鈔上面はその接合時のナデによって段をなし、これと口縁部の上端に施した凹線とで階段状の口縁をなす。内面には横位のハケ調整ののち口縁部内面より鈔にかけて入念な横ナデ調整を施しているが、鈔下端は未調整で接合痕を明瞭に留める。胎土は精良、焼成も良好で堅く焼き締まり灰褐色を呈すが、断面芯部は黒灰色を示す。また外面には厚い煤の付着をみる。

3(第33図—6, 図版18—13)は垂直気味の体部に、端部を丸くおさめた鈿をやや上向き加減に付加したものである。口縁部は体部につぎ直立し、端部は内側につまみ出して肥厚させ、外面を斜めに面取りしている。体部内面に横位のハケ目ののち、口縁部内面より鈿にかけて入念なナゲ調整を施しているが、鈿直下に指オサエ成形の跡を留めている。胎土は砂粒をまじえ、堅く焼き締まり淡灰褐色を呈す。

これらの土釜は同一層中に混在していたが、土師質釜は大和地方に通用のもので、元興寺権楽坊(伊藤久嗣 1968)、法隆寺福園院址出土資料(稲垣晋也 1962)に類例を見、法隆寺出土資料による土釜の編年(稲垣晋也 1962)によれば1はA型式第6期に該当し、その実年代を15世紀後半～16世紀初頭、2はB型式3類第7期で16世紀中頃とすることができる。一方瓦質釜は摂津、山城地方にその類例を散見し、1は平安京四条一切の出土資料足釜(田辺昭三・吉川義彦編 1975)に類似すると考えられ、その実年代は13世紀代におくことができる。なお、本例は体部下半を欠失しており、推定の域を出ないが、上述の平安京資料や淀川流域出土資料中に見られる如く、口径20cm程度の大きさの羽釜では足付がほとんどであり、本例もその可能性を指摘しておきたい。2については資料に恵まれず類例を見出しえなかった。3は京大病院AF14区SD05出土資料にその類を見、京大病院出土の羽釜の分類(宇野隆夫 1978)の5類に対比され、その年代は16世紀前半頃と考えられる。

須恵質鉢鉢 (第30図—1, 図版19—1)

第Ⅲ床面石敷上で出土したものである。直線的に開く体部上端を上方に屈曲させ、上下に拡張して縁帯状口縁としたものである。口縁端部は丸くおさめられ、体部との境には明瞭な線をみせる。また口縁部内面には入念なナゲ調整を施すが、体部内面にはハケ目状の擦痕が認められ、外面にはクロロ目を留める。胎土は砂粒をまじえるが焼成は良好で堅く焼き締まり淡灰色を呈すが、口縁部外面には黒色の釉の付着をみる。

この須恵質鉢鉢は東播地方神出魚住窯系の製品と考えられ14世紀初頭のものであろう。

土師質高杯 (第30図—7, 図版19—3)

第Ⅲ床面石敷の間隙より出土したものである。磨減が顕著で調整等の観察を妨げているが、脚柱部の破片で内面にはヘラ状工具による押圧の連続が認められ、外面の杯部との接合部直下に指オサエ成形の痕跡を残している。胎土には砂粒をまじえ焼成は不十分で暗褐色を呈すが、断面芯部は暗灰色を示す。

染付磁器碗 (第30図—8, 図版19—2)

第Ⅱ床面直上に於いて京焼灰釉陶器片、土師質皿とともに出土したものである。所謂くらもんか茶碗で、幾分張った腹から内弯気味に立ち上がる体部をもち、器壁は底部では厚く口縁に寄り薄くなり、口縁端部は丸くおさめている。素地は堅緻で灰白色を呈し、外面にたてつけの一筆描きで、水辺の草花をあしらった図柄を濃塗に絵付けしている。呉須が不良のため、くすんだ灰藍色に発色している。さらに青みをおびた乳濁釉を高台付付きを除いた全面に施しており、露胎部分は淡灰褐色を示す。また高台際で虫喰い状に釉が飛んでいる他、部分的にヨイがみられ灰褐色

第4節 周辺トレンチの調査

を示している。

伊万里系の染付磁器で18世紀頃の所産であろうか。

銭貨（第33図—9～11，図版19—4～6）

第Ⅲ層中より至道元宝銅銭（第33図—9，図版19—4）（北宋・初鈎至道元年（995））1枚，第Ⅱ層中より寛永通宝銅銭（第33図—10，11，図版19—5，6）2枚，最上層の攪乱層より判読不明の銅銭が1枚検出された。

第4節 周辺トレンチの調査

調査の方法でも述べたように調査対象地域内に計10のトレンチを設定した。

各トレンチ設定位置及び具体的な層名等はトレンチ配置図（第25図），トレンチ土層堆積図（第34，36，37図）を参照していただくこととし，ここではその概略を示しておく。

1. 各トレンチの土層の堆積（第31，33，34図）

第Ⅰトレンチ（第31図）

トレンチの南北の端の比高4.6mを測るが，トレンチ南半では堆積が薄く耕土層直下が岩盤となっている。①～⑨は茶畑の耕土層で近世以降の土師質土器，陶器片を出土した。⑩～⑫は横穴再利用に際して横穴内から掻き出されたものと考えられ，⑩は横穴内の堆積層中の⑨に対応するものであろう。⑬以下に於いては遺物の包含や遺構等は認められなかった。なお最下層は岩盤となっているが，トレンチ中央に於いて東西に走る亀裂がみられた。

第Ⅱトレンチ（第31図）

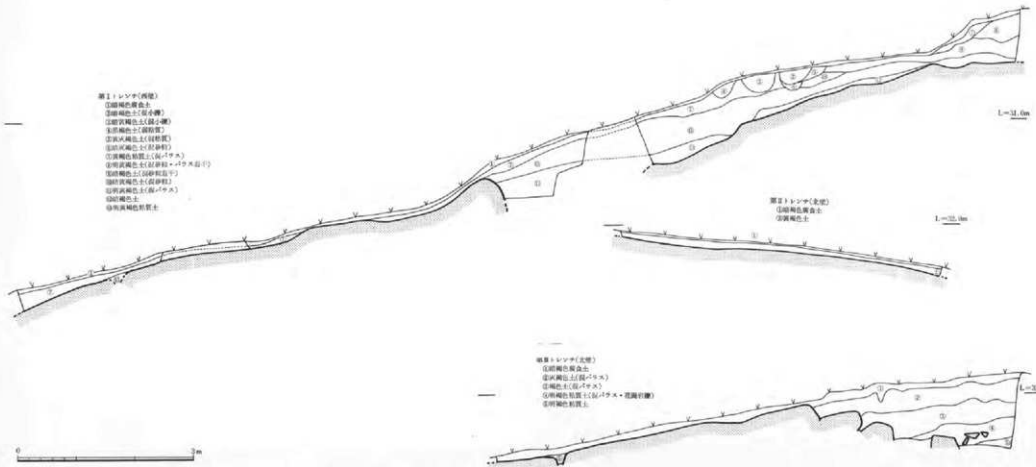
本トレンチは堆積層が極めて薄く，①②が耕土層で直下はバイラン化した花崗岩の岩盤となっていた。

第Ⅲトレンチ（第31図）

②までが耕土層で近現代の陶磁器片を含み，③より白磁碗の小片が出土した。本トレンチはその西半では表土下10cm内外と極めて堆積が薄く耕土層直下が岩盤となっており，トレンチ南半では層理をみせさらに東半ではこれが蓄込んでいた。なお岩盤上面での清掃に際し軸をN37°Eとし，その間隔3.8mを測る2つの柱穴を思わせる土坑を検出した（第32図参照）。検討の結果これらを一連の柱穴群と判断し，トレンチの拡張を試みたが，対応する柱穴を検出できなかった。これらの柱穴は黄褐色の花崗岩ペースで埋積されていたが何ら遺物は出土しなかった。

第Ⅳトレンチ，E区東拡張トレンチ（第33図）

第Ⅳトレンチは南側へ扇形に拡張したため南北2つの壁の土層の検討をしたが，両者のその対応関係は近接しているにもかかわらず判然としがたく，北壁①～⑥と南壁⑤～⑩の2つの対応を指摘するとどまった。前者は耕土層で須恵器片，近世以降の陶磁器片，瓦片，鉄器片，寛永通宝等が出土した。後者では土質の趣を若干違えこそすれ，炭化物を混じえスラッグの微小片，フ



- 第1トレンチ(西壁)
- ①暗褐色腐食土
 - ②暗褐色土(弱小礫)
 - ③暗褐色土(弱小礫)
 - ④赤褐色土(弱砂質)
 - ⑤赤褐色土(弱砂質)
 - ⑥赤褐色土(弱砂質)
 - ⑦赤褐色粘質土(弱・バラス)
 - ⑧赤褐色土(弱砂質・バラス混)
 - ⑨赤褐色土(弱砂質)
 - ⑩赤褐色土(弱・バラス)
 - ⑪暗褐色土
 - ⑫赤褐色粘質土

- 第2トレンチ(北壁)
- ①暗褐色腐食土
 - ②暗褐色土

- 第3トレンチ(北壁)
- ①暗褐色腐食土
 - ②赤褐色土(弱・バラス)
 - ③暗褐色土(弱・バラス)
 - ④赤褐色粘質土(弱・バラス・花崗片層)
 - ⑤赤褐色粘質土



L=10.0m

L=10.0m

L=10.0m

第21図 第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチ 各土層図

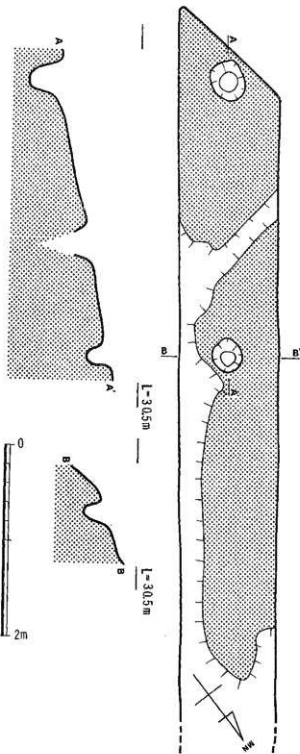
イゴ羽口等のタタラ関係廃棄物を包含する一統きの土層で、北側からの投棄が想定される。

一方E区東拡張トレンチでは③～⑤が耕土層で近世以降の陶磁器片等をはじめとし土師質皿片、外面に叩き目を施した弥生土器片も含まれていた。⑥以下は花崗岩バラスの自然堆積層と⑦⑧と互層をなしていた。この⑦⑧は先のIVトレンチのタタラ関係遺物の包含層に対応し微少な炭化物スラッグ等をまじえ、⑦からは平安時代末頃の土師質皿が出土した。

これらのトレンチではその最下層は花崗岩岩盤となっていたが、第IVトレンチでのあり方は、トレンチ四端より傾斜しつつ東へ延びトレンチ中央付近で急峻な落ち込みを呈した。これはE区東拡張トレンチに於いても同様で、さらにここでは落ち込み部分の屑より東側は岩質を露え、南北方向で巾1m、深さ1m程の角度がきつい逆梯形の溝状を呈し、これが南側への傾斜をみせた。検討の結果これらは岩盤の落ち込むラインが同一線上に並び、これを境に岩質が変わる部分も認められることから岩盤の層理面であることが明らかとなり、第VIトレンチ、第VIIトレンチにも及ぶことを確認した(第32図参照、アミの部分の花崗岩岩盤である)。

第Vトレンチ(第33図)

⑥までが耕土層で近現代の陶磁器片を出土したが、⑦以下に於いては遺物の包含および遺構は認められなかった。



第32図 第五トレンチ平面図

第4節 周辺トレンチの調査

第VIトレンチ（第33図）

③までが耕土層で近現代の遺物をまじえ、④代下に於いては遺物の包含、遺構等は認められなかったが、トレンチ北端で岩盤の層理面がみられた。

第VIIトレンチ（第34図）

本トレンチに於いては西半では耕土層直下がペイラン化した岩盤で東端に南北に走る層理面が認められた。②までが耕土層で近現代の遺物をまじえるも、⑥以下に於いては遺物の包含、遺構は認められなかった。

第VIIIトレンチ（第34図）

③までが耕土層で近世以降の土釜片、陶磁器片を出土した。⑥～⑩は流れ込みによる自然堆積のままて攪乱等を受けておらず、⑧⑨中では若干の炭化物が検出された。⑪のシルト層は旧地表で、緩やかに南に傾斜するもトレンチ北端より2m程で南へ急峻に落ち込んでいた。この落ち込みはかつての地形侵蝕によるもので、シルト層下の堆積が水平堆積で下位に至り砂層に置換しており、これが旧地表面からも観察された。

第IXトレンチ（第34図）

③までが耕土層、⑤は近代以降の陶磁器、瓦片を含む掘り込みである。⑥は礫まじりの盛土、⑦⑧は竹藪の置土で⑩中には須恵器片が混入していた。⑧⑨は流れ込みによる自然堆積層で攪乱等を受けておらず⑨中よりササカイト剥片、土師器片等を出土した。そして⑩以下に於いては遺物の包含は認められなかった。⑦はシルト層でトレンチ北端より6m程で南へ急峻に落ち込みをみせ、第VIIIトレンチの旧地形の傾斜に対応するものである。なおトレンチ北半は平坦で、その北端は平坦化した岩盤が北へ延びるが、これは第V・VIIIトレンチとともに丘陵斜面の採土に際し削平を受けたもので、本トレンチの北側に東西に延びる崖面と一連のものと考えられる。

2. 出土遺物

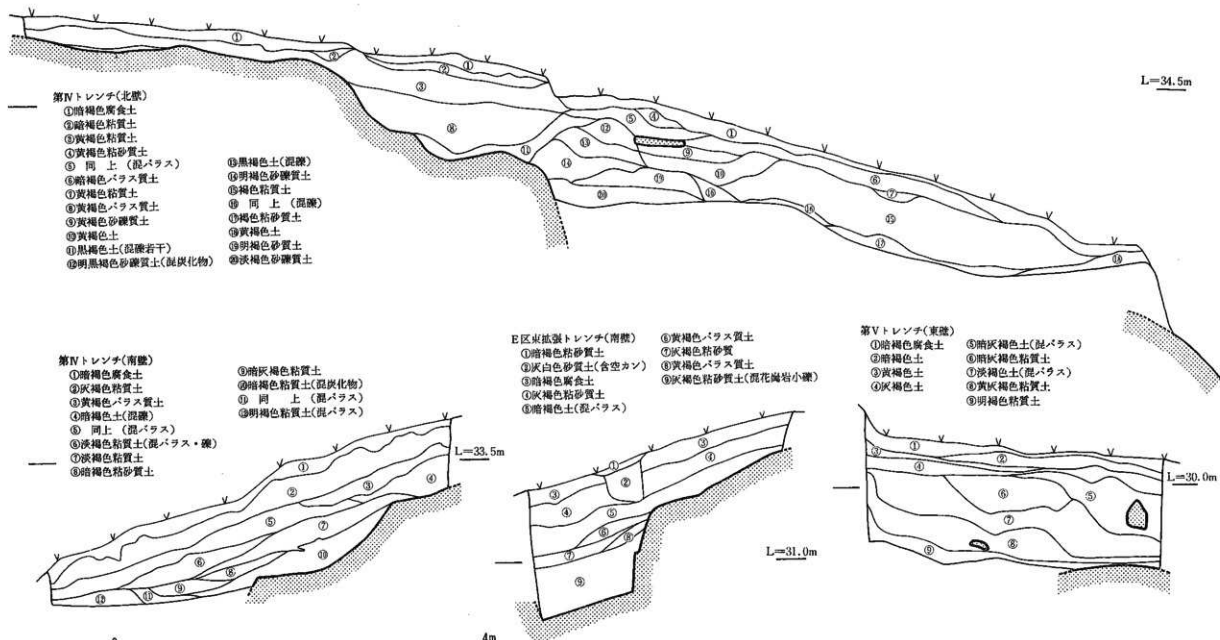
白磁碗（第35図—1、図版19—10）

第IIIトレンチ③出土のものである。内筒気味の体部に口縁部を僅かに外反させ端部を水平に面取りしたもの。体部内面の上位に浅い沈線、見込み外周には浅い沈線状の段を施し、この間で櫛状工具による花文で埋めている。灰白色の緻密な素地で淡緑灰色の透明釉を薄く施すが、口縁端部にはそれが厚く溜っている。

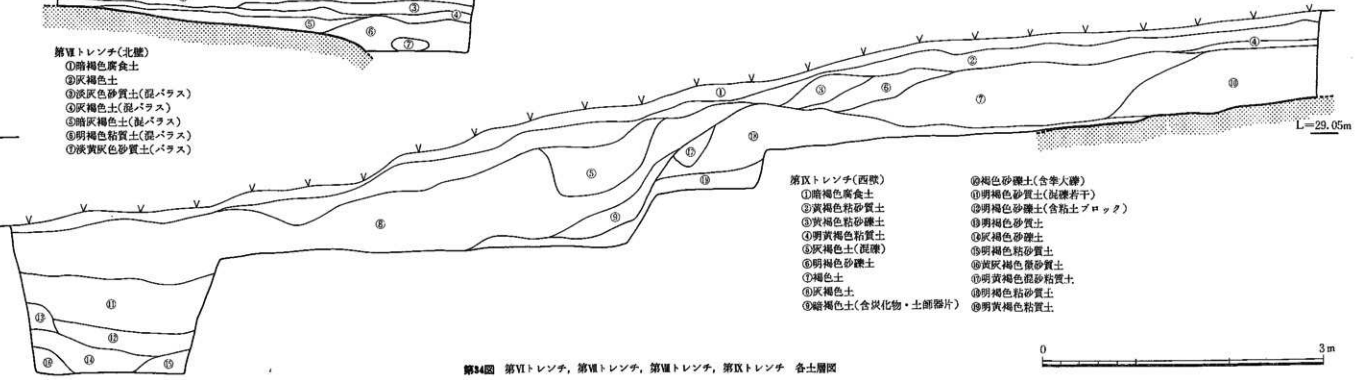
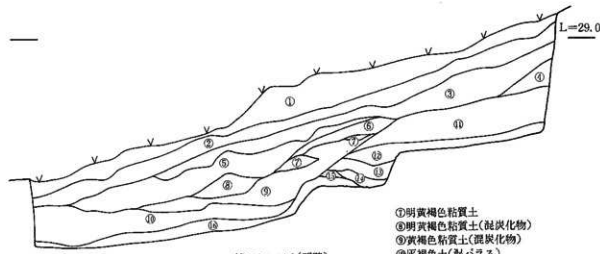
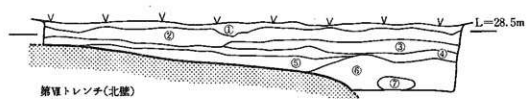
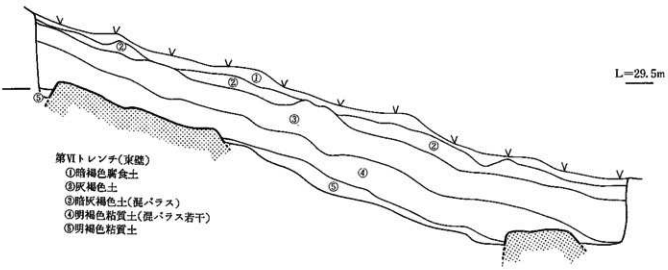
この白磁碗は大宰府出土輸入陶磁器の分類中、白磁碗V類4b（横田賢次郎・森田勉 1978）に該当し、中国宋代の所産と考えられる。

フイゴ羽口（第35図—2、図版19—9）

第IVトレンチ拡張区南端の⑩出土のものである。基部の破片で、外径6.0cmを測り、これに送風孔を穿っている。磨減が顕著で成形等は詳らかにしえないが、胎土はササ及び微砂をまじえ、焼成不十分あるいは二次的火熱のため内面はもろく淡乳褐色を呈す。外面は火熱のため熔融状態を示し亀裂、気泡状の噴出等が認められ淡黄褐色を呈す。さらに端部にはスラッグ状の融着物が

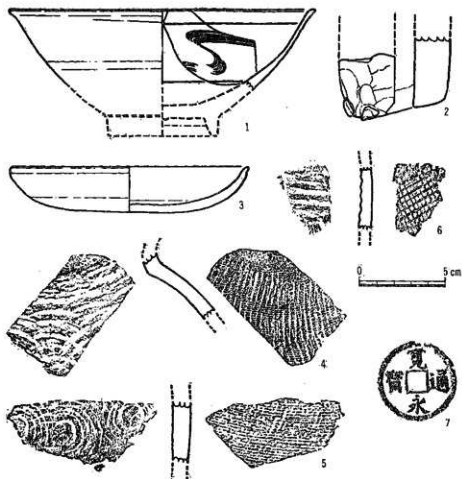


第33図 第IVトレンチ、E区東拡張トレンチ、第Vトレンチ 各土層図



第34図 第Ⅰトレンチ、第Ⅱトレンチ、第Ⅲトレンチ、第Ⅳトレンチ 各土層図





第35図 各トレンチ出土遺物（鏡貨は実大）

認められる他、断面の外面寄りには火熱がおよび淡紫褐色を示し煎線である。

土師質皿（第35—3、図版19—7）

E区東拡張トレンチ⑦出土のものである。口径13.6cm、器高2.6cmを測る。平底で体部は大きく穹曲して立ち上がる。口縁部に2段の横ナデを施すが上段のナデが強く、端部をつまみ上げているようであるが、内底面及び体部外面は指オサエ成形のままである。胎土は砂粒をまじえ、焼成は良好で乳褐色に堅く焼き締まる。

この土師質皿は京大病院遺跡出土土師質皿の分類（宇野隆夫 1978）中のA₄類に該当し12世紀を中心とする年代をあてることができる。

須恵器（第35図—4～6、図版19—11, 12）

4（図版19—11）は第IVトレンチ耕土層出土のものである。頭部より体部にかけての破片で外面は縦位の平行叩きの上に回転カキ目調整を施し、内面には同心円状の円弧状の叩き目を明瞭に残している。胎土は石英を主とする砂粒をまじえ堅く焼き締まり淡紫灰色を呈す。

第5節 小 結

5(図版19—12)は第IXトレンチ⑩出土のものである。外面は縦位の平行印きの上に回転カキ目調整を施しており、内面には同心円状の印き目を明瞭に残している。胎土には若干の砂粒を混じえ堅く焼き締まり外面は淡青灰色、内面は淡紫灰色を呈すが断面芯部は暗紫褐色を示す。

6は表面採集の資料である。外面は格子状の印き目を、内面には巾の広い縄状の印き目を留める。胎土は精良であるが焼成は不十分で乳褐色を呈すも、外面は暗青灰色を示す。

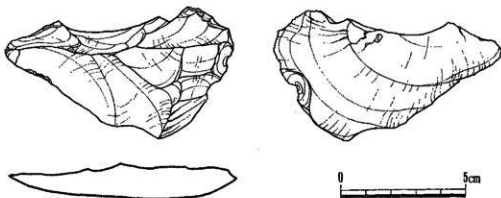
錢貨(第35図—7)

第IVトレンチ耕土層より寛永通宝銅銭が1枚出土しているが磨減が著しい。

サヌカイト剥片(第36図、図版19—13)

第IXトレンチ⑩出土のものである。横長剥片で風化のため黄灰色を呈す。背面側には多方向からの剥離痕が認められ打面部は折取られている。定形化した石器とは認められないが、背面側左下側縁部に歯ごばれ状の細かい剥離痕がみられ、背面側右上、左上側縁部には主要剥離面側から数回にわたって細かく加工を施しているので何らかの用途に用いられたものであろうと思われる。

この剥片は、付近に旧石器、縄文時代を通じての遺物が知られないことと、この飯岡丘陵に於いて弥生時代後期の遺物散布及び住居址等(森浩一・大野左千夫 1976)が確認されていることから弥生時代の所産である可能性が高い。



第36図 第IXトレンチ出土遺物

第5節 小 結

今回の調査はその途中に於いて横穴全掘を断念せざるを得ない事態に至り、危機東半部の調査に切り替えたことから、必ずしも十分な成果が取られたとは言えないが、二、三のあらたな知見が得られたので問題点を含めて簡単にまとめておく。

1. 横穴について

横穴の構造は先に述べたとおりである。ここではその所属時期について検討してみたい。

横穴の年代は今回の調査による出土遺物からは直接年代の手掛が得られなかったので、その構造に着目して考えてみたい。

横穴の構造上の変遷は、すべてが型式学的に割り切れるものではなく、それぞれの群内に於ける変遷に配慮すべきである。しかしながら飯岡横穴の場合横穴群の全容を明らかにすることはできない。そこで南山城地域を主として考え、畿内の横穴の諸相を参考にすると、南山城で調査のなされている横穴として同じ田辺町堀切第5・6号横穴(高橋美久二 1969)があり、第6号横穴の場合、天井部の形状は知り得ないが、立面形が飯岡横穴に比較的似ている。平面形は所謂とっくり形を呈し、一般的な変遷からすると飯岡横穴よりも後出すると考えられる。ただ、同群内に於いて飯岡横穴のような平面形態から「とっくり形」への変遷は確認されておらず、時期差というよりもむしろ系統の差としてとらえたい。なお、堀切第6号横穴から出土した須恵器は森福年(森清一・石部正志 1962)ではⅢ期後半である。

さて畿内の横穴の中で年代の明確なものとして大阪府柏原市玉手山東横穴群(大阪府教委1969)、同安福寺横穴群(水野正好他 1973)、奈良県奈良市歌姫横穴群(伊達宗泰 1968)等があるが、前二者は平面形は正方形に近い長方形で明確な袖を有し、立面形はアーチ形で家形の風を若干残している。後者は平面形は飯岡横穴に近似するが、立面形が尖頭アーチ形で羨道部が斜行するという特徴をもつ。時期は堀切横穴と同級の須恵器を出土し6世紀後半～末頃に位置づけられよう。

このように飯岡横穴の正確な所属時期は南山城の横穴群の把握とその変遷のうちでの位置付けなしには出し得ないが、あえて諸例を参考に推定年代を提出しておきたい。

① 畿内の横穴でⅢ期後半を遡る例がない。

② 明確なⅣ期前半の例もほとんどない。

③ 南山城の堀切横穴群、荒取横穴群(高橋美久二 1969)はともにⅢ期後半に位置づけられる。

以上3点を考慮すると畿内ではⅢ期後半の時期に横穴の築造がおこなわれ、それ以後は追葬が主となり(大阪府教委 1969)、新たな横穴の築造はおこなわれなくなった事になる。このことから飯岡横穴の年代をⅢ期後半＝6世紀後半～末頃としたい。

次に今回の調査では頻繁な横穴の再利用の状況を明らかにすることができた。これは横穴が築造され、追葬がおこなわれなくなってから後に、こうした本来の使途以外の目的で横穴が断続的ではあるにせよ継続して利用されつづけてきたことを示すものであり、精査の結果、支室内の4度の再利用の跡を4枚の床面として検出できたが、出土遺物等の検討から、実際にはこれをはるかにしのぐ回数であったと思われる。これらの再利用の時期は出土遺物からみて10世紀代にまで遡ることが確められ、以後長期間にわたって瓦器碗、土師質皿、土釜等の日用雑器を横穴内に持ち込み、何らかの目的で火を焚くといった行為が幾度となく繰返されてきたものと考えられる。ところでこれらの遺物は豊富な内容を持つにもかかわらず、度重なる擾乱を受けておりそれぞれの再利用時に於ける器種組成は知りえなかった。またこれらの遺物が日用雑器であることは上述の

第5節 小 結

如くであり、何ら特殊性を見出しえず、土釜にあっては厚い煤の付着を見るなど明らかに煮沸に供されているのである。

再利用に伴なう明確な遺構としては第Ⅲ床面石敷遺構、第Ⅳ層の人骨を出土した土坑があるが両者ともに調査面積に制約があり全掘していない段階で、その性格付けも現状では困難な点が多く、再調査を待ち、改めて考察を加えたいと考える。また飯岡横穴は現在もお民間信仰の対象となっていることから、今後こうした面からの研究も横穴や横穴式石室の再利用の性格を解明する上で重要な課題の一つとなるであろう。

また飯岡横穴がその外見等から、一部では墳丘を有する横穴の可能性も指摘されていたが、今回の調査に於いては盛土及び岩盤並形等の形跡は全く認められなかった。しかし調査面積に制約があったため、未調査部分を含めた岩盤表面全体の観察等の検討を要する。

2. 周辺トレンチについて

第Ⅲトレンチに於いて柱状穴の土坑が検出された他は何ら遺構は検出されなかったが、横穴東側に於いて南北に走る岩盤の層理面が検出され、これを境に西は花崗岩岩盤で東側と地質の構造が異なることが確認された。そして今回の調査で層理面より東側には横穴が存在しないことが判明し、この飯岡に於いては花崗岩という岩質を選択して横穴を掘削した可能性が極めて高い。

また横穴の東方の鉄塔(旧)の建っていた平坦面が丘陵斜面の採土による削平を受けた結果であることは先に述べたとおりであるが、第Ⅶトレンチ・第Ⅸトレンチに於いては旧地形の丘陵斜面の一部が検出され、かつては横穴の構築されている岩盤が半島状に南へ張り出し、その東側は岩盤層理面によって沖積低地(現水田面)が丘陵裾の現石垣よりも10m程北まで入り込んでいたことが確かめられた(第21図参照)。

最後に、飯岡横穴が風化花崗岩を掘削して築造されていることはすでに述べたが、この為に現在も開口部分の崩壊、天井部、壁面の剥落等の現状変更の速度は日々早まりつつあり、このまま放置しておけば天井部陥没の危険もある。そこでこれ以上の自然破壊を防ぐためにも早急な保存策を望むものである。

註① 本津川の旧流路をはじめとした古地形を検討した上でのグルーピングの必要がある。

② 高井田横穴群中に中期中葉の須臾器を出土しているものがあるが実態は不明である(中西晴人 1974)。

③ 安福寺横穴群Cタイプは完成した横穴とすることに疑問があり、Ⅶ期前半(7世紀前半)と認定することに躊躇を覚える。

④ 横穴の調査例は少なく今後の資料増加によって補訂されていくべき問題である。

⑤ 横穴及び石室の再利用に関しては、それが明確な痕跡及び遺構として遺存することが少ないため

検出が極めて困難で、古墳の副葬品以外は盗掘時の混入として処理されることが多かった。しかしこうした再利用はかなり普遍的に行なわれたと考えられ、従来の研究として石部正志氏の論攷(石部正志 1961)がある他、最近では河上邦彦氏が「石室の転用の例」(河上邦彦編 1977)として古墳(主に横穴式石室)から出土する古墳時代以外の遺物の解釈をその在り方等から 1) 盗掘の際に入れたもの、2) 石室を墓として利用した例、3) 石室を祠、あるいは堂として利用している例の3つに分類するなどして、これらの再検討が試みられている。

第4章 結章にかえて

—プラントオパール及び鉱物組成の分析にふれて—

現場での発掘作業が終了して2年余りが過ぎた。その間、調査参加者により資料の整理が分担してすすめられたが、報告書の作成に当たって二つの努力目標が検討された。その1は横穴に関するものであって、南山城の横穴分布を踏査することで確認し、可能なかぎり実測図を作成して集めたいこと、その2は水田址に伴う遺構の比較検討のための資料収集であった。作業をすすめる過程で発掘資料の記録化のみに集中してでも報告することが先決であり、検討された努力目標は、個々の課題として留保し、後日の問題点にすることとした。したがってここでは、各地点を通じて発掘資料を中心に客観的な事実の確認とその記録化に重点を置くこととした。

すでに触れられたように飯岡横穴については鉄塔付善工事の予定地内を対象とした横穴存否を確認するための発掘区と、開口していた横穴を保存することを前提とした作業によって確認された事実について記録にとどめた。これによって横穴が群として構成されていたとしても、開口していた横穴の東側には存在せず、西側の鉄塔付善地区外に拡がる茶畑の斜面に存在することを予想させた。

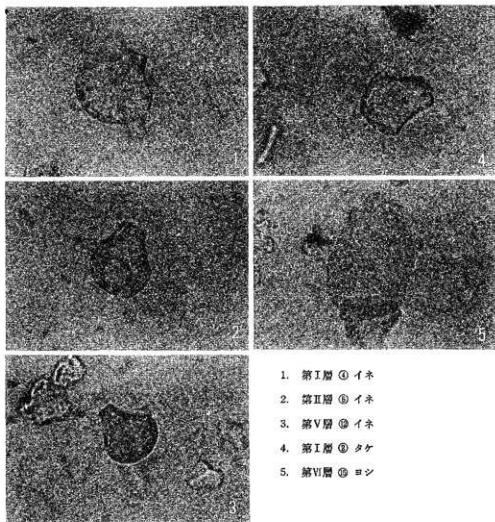
水田中の古屋敷遺跡については、東(E)、西(W)の両地点を通じて湧水の激しい悪条件の中であつたが、中世から近世にかけての畦畔遺構を確認し、現在の畦畔の下部に若干づつ位置をずらして存在することを認めた。いずれも方向性に共通するものがあり、条里遺構に伴う地層が生きていることを示していた。なお古代の瓦や須恵器などの遺物がみられたが遺構の検出はなく、近接した地点での将来の調査に問題を残した。なお、今回の調査で出土した資料のうち、古屋敷E地点の主トレンチ西側現畦畔下の各層中から採集した土壌を、プラントオパールの分析にかけるべく宮崎大学農学部藤原宏志氏に依頼した。定性分析の結果は第4表の通りである。

この表によると第IV層⑬の試料を除いてすべてにイネが存在し、水田耕作を示しているが、同時にヨシ、タケ、

第4表 E地点プラントオパール定性分析表

試料	検出植物名
第I層	現耕作土① イネ・ヨシ・タケ・ジュズダマ・シバ
	床土② イネ・タケ
	床土④ イネ・タケ・マユモ・シバ
第II層	耕作土⑥ イネ・タケ
	溝埋土⑦ イネ・タケ・シバ・ヨシ
	畦畔遺構⑧ イネ・タケ・シバ
第III層	畦畔遺構⑩ イネ・ススキ
	耕作土⑪ (P.O. 少なく固定不能)
第IV層	耕作土⑫ イネ・タケ
	⑬ タケ・ヨシ
第V層	⑭ イネ(多)・ススキ・タケ・シバ
第VI層	⑮ イネ(多)・タケ・ヨシ

※ 試料はE地点主トレンチ西側現畦畔下より採集したものであり、本表の資料番号は第14図—1の土層番号に対応する。



第37図 E地点プラントオペール顕微鏡写真

ムスキなどの栽培植物以外の植物から相当する時代の附近の植物景観をうかがうことができる。しかし第IV層の時期にイネの検出がないことは、何らかの理由で耕作がおこなわれなかったことを示すものなのかどうか速断できない。土壌の堆積状況、採集方法、更に定性分析だけでなく、定量分析を含めての検討に期待される問題でもあろう。

一方、横穴中の奥壁寄り中央部の床面より上位で検出された中世の土鍋片などを含む層から採集した灰白色の物質と、古屋敷W地点の中世水田耕作面より出土したクサビ形鉄製品に付着していた赤色物質については、京都工芸繊維大学佐藤昌憲氏、山田 武氏の協力を得て組成分析がなされた。

両氏からもたらされた観察結果は次の通りである。

◎横穴内第Ⅲ面石敷上面出土の白色物質について

平均約1cmの塊状をなし、表面は灰色の土砂でおおわれていたが内部はわずかに黄味を示す柔らかい物質である。できるだけ均質的な白色部分を取り、粉砕後、約0.2gを正確に秤量し、供試々料とした。試料を炭酸ナトリウムと混合して溶融後、塩酸に溶解して溶液とし分析を行なった。組成比は下に示すが天然の白色粘土と考えられる。

微量成分のうちCaOは2.6%、MnOは0.1%である。なお上記試料を直接塩酸などの酸に投入しても、発泡も溶解もしない。その際、長さ約数mmの炭素状の黒色物質が多数浮遊する。その一片を顕微鏡で観察すると、いわゆる木目があり、またそれを白金線につけペーパーで燃焼させると白色になり、形が消失することから、明らかに炭化した微少な木片と考えられる。

◎W地点第Ⅶ層出土クサビ形鉄製品表面の赤色物質について

表面全体に赤色物質が附着していたが、部分的には厚さ1mm以下の薄層となって剥離しやすい状態になっていた。できるだけ均質的な試料を採取し、その0.2gを粉砕後正確に秤量し、王水約20mlを加えて加熱した。溶解しなかった残渣は赤色物質に附着した土砂と考えられる。溶解した部分は一度蒸発皿で乾固後、塩酸で溶解し、原子吸光法で鉄を分析した。水銀は検出限界(1ppm)以下であり、したがって上記の物質は純粋なベンガラであることがわかった。

第4表 W地点出土クサビ形鉄製品表面赤色物質
主成分分析値表

成 分	組成比(重量%)	測 定 法
Fe ₂ O ₃	53.8	原子吸光法
残 渣	46.7	重量法

その他分析した微量成分

MnO: 0.4% CaO: 0.6%

第5表 飯岡横穴出土白色物質主成分分析値表

成 分	組成比(重量%)	測 定 方 法
SiO ₂	70	重 量 法
Al ₂ O ₃	4	
Fe ₂ O ₃	7	原子吸光法
灼熱減量 (1000°C)	6	

提供された以上の観察結果を出土状況に照して考えると、白色物質については分析試料の周辺から出土した火に当たった際や、内眼で確認される炭化した小木片などを含めて、中世に横穴自体が開口されていて、内部で火がたかれ、その結果生じた灰が粘土に附着したまま残存した資料であることがうかがえる。

一方赤色物質についてはベンガラであることが判明したものの、クサビ形鉄製品自体の性格に加えて、単にサビ止めを目的とした塗布なのかどうかについても、類例が知られないため決めかねているのが実状である。いずれにしろ、藤原宏志氏、佐藤昌憲氏、山田 武氏によってなされた分析の結果は、それぞれ事実関係についてのデータを示している点で貴重なものとなった。

なお発掘調査の終了後、現地では高圧送電線の鉄塔付替工事が進んだが、飯岡横穴が現状で保存されたことは、文化財の保存の上でもよろこばしいことであり、田辺町によってすすめられている飯岡古墳群の保存計画が期待される場所である。飯岡地区の住民が特に文化財に関心をもっていることは、しばしば聞き及んでいたところであるが、調査中に得た協力、中でも出島義和氏によって速報された東原古墳の出土資料についての対応は関心の高いことを実証するところであった。

文献目録

ア

- 赤崎 敏男 1977「竹並遺跡の調査」(『歴史読本』昭和50年7月号, 新人物往來社)
- 石部 正志 1961「歴史時代における古墳の再利用」(『同志社考古』1, 同志社大学考古学研究会)
- 伊藤 久嗣 1968「元興寺極楽坊出土の羽釜形土器」(『仏教民俗』1967, 元興寺仏教民俗資料研究所)
- 稲垣 晋也 1961「法隆寺出土の瓦器境」(『大和文化研究』第6巻4号, 大和文化研究会)
- 稲垣 晋也 1962「法隆寺出土資料による土釜の編年」(『大和文化研究』第7巻7号, 大和文化研究会)
- 稲垣 晋也 1968「瓦器境の成立と展開」(『日本歴史考古学論叢』第二, 吉川弘文館)
- 稲垣 晋也 1969「赤土器・白土器」(『大和文化研究』第8巻2号, 大和文化研究会)
- 岩井 武俊 1905「山城国相楽郡喜阿郎の古墳」(『考古界』第5巻1号, 考古学会)
- 岩井 武俊 1906「盤瀧寺及陽光明山寺につきて」(『考古界』第5巻9号, 考古学会)
- 宇野 隆夫 1978「京大病院遺跡出土の土器」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和52年度, 京都大学埋蔵文化財研究センター)
- 梅川 光隆 1977「長岡京跡発掘調査報告」(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』II, 京都市埋蔵文化財研究所)
- 梅原 末治 1919「高麗寺址」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊, 京都府)
- 梅原 末治 1920a「飯ノ岡ノ古墳」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊, 京都府)
- 梅原 末治 1920b「久津川古墳研究」(私家版, 1973年名著出版復刻)
- 梅原 末治 1920c「三山木村ノ隱寺」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊, 京都府)
- 梅原 末治 1923a「三山木村山崎ノ石捧ト同地ノ古墳」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊, 京都府)
- 梅原 末治 1923b「井手寺址」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊, 京都府)

- 梅原 末治 1938「山城飯岡トゾカ古墳」(『山城飯岡車塚古墳』(『日本古文化研究所報告』9, 日本古文化研究所)
- 梅原 末治 1955「田辺町興戸古墳」(『京都府文化財調査報告』第21冊, 京都府教育委員会)
- 梅原 末治 1964「梅井大塚山古墳」(『京都府文化財調査報告』第24冊, 京都府教育委員会)
- 江谷 寛 1978「志水高寺発掘調査報告」(『八幡市文化財調査報告』第2集, 八幡市教育委員会)
- 江谷 寛 1979「南山城発見の地下式古墳」(『古代学研究』90, 古代学研究会)
- 大阪府教委 1969「柏原市玉手山東横穴群 発掘調査概報」(大阪府教育委員会)
- 岡本 一士 1976「元興寺極楽坊出土土器の形式と編年」(『日本仏教民俗基礎資料集』第1巻, 中央公論美術出版)
- 岡本一士編 1977「上大谷古墳群の調査」(『考古学研究室調査報告』第1冊, 元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室)

カ

- 堅田直・白石太一郎 1962「京都府西山第1号・第2号・第5号墳発掘調査概報」(『先史学研究』14, 土曜会)
- 河上邦彦編 1977「斑鳩・仏塚古墳」(斑鳩町教育委員会)
- 京都府教育委員会 1972「京都府遺跡地図」(松雲堂)

サ

- 佐藤 虎雄 1930「普賢寺の遺蹟」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第11冊, 京都府)
- 志道 和直 1976「土器の編年について」(松下正司・小郡隆編「草戸千軒町遺跡」第18～20次発掘調査概要一)1976, 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所・広島県文化財協会)
- 下村 晴文 1972「銀宮部一歴史的環境」(平良泰久・下村晴文編「南山城の前方後円墳」, 竜谷大学考古学資料室)
- 白石太一郎 1969「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」(『古代学研究』54, 古代学研究会)
- 白石太一郎 1975「瓦器」の生産に関する二・三の覚え書」(『古代文化』第27巻1号, 古代学協会)

- 白石太一郎 1977「越智氏居館跡出土の瓦器」(『古代学
研究』85, 古代学研究会)
- 鈴木重治・松藤和人 1977「京都府田辺町 都谷中世
館跡」(『同志社大学校地学術調査委員会
調査資料』No.11, 同志社大学校地学術調
査委員会)

夕

- 平良 泰久 1975「南山城の後期古墳と氏族」(『京都考
古』第14号, 京都考古刊行会)
- 平良泰久・下村晴文 1972「南山城の前方後円墳」
(『電谷大学文学部考古学資料室研究報告
I』, 電谷大学考古学資料室)
- 高橋美久二 1969「堀切横穴発掘調査概要」(『埋蔵文化
財発掘調査概報』1969, 京都府教育委員
会)
- 高橋美久二・近藤義行 1973「正道遺跡発掘調査概報」
(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集,
城陽市教育委員会)
- 竹並遺跡調査会 1977「竹並遺跡」(『美夜古文化懇話会』)
- 伊達 宗泰 1968「歌願町赤井谷の横穴」(『永永雅雄様
か』奈良市史 考古編』吉川弘文館)
- 田中 茂 1972「小木原古墳」(『九州縦貫自動車道埋
蔵文化財調査報告』第1期, 宮崎県教育委員
会)
- 田中 琢 1967「古代・中世における手工業の発達
～産業・畿内」(『三上次男・横崎彰一編
『日本の考古学』VI, 河出書房)
- 田辺昭三・吉川義彦 1975「平安京跡発掘調査報告」
(『平安京調査会』)
- 谷岡 武雄 1958「畿内の村落と耕地」(『藤岡謙二郎編
『畿内歴史地理研究』)
- 谷岡 武雄 1973「古代条里制からみた井手町」(『井手
町の自然と遺跡』井手町史シリーズ』第1
集, 井手町史編集委員会)
- 堤 圭三郎 1964「普賢寺所在古墳発掘調査概要」(『埋
蔵文化財発掘調査概報』1964, 京都府教
育委員会)
- 堤 圭三郎 1967「曾山古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化
財発掘調査概報』1967, 京都府教育委員
会)
- 堤 圭三郎 1976「石清水八幡宮から奈良山まで」(『福
口隆康編』京都考古学散歩』, 学生社)
- 角田 文衛 1936「崗光明山寺の研究」(『考古学論叢』
1)
- 角田 文衛 1938「山背国分寺」(『内田文衛編』国分寺の

研究』上, 考古学研究会)

ナ

- 中川 修一 1914「山城綾高野田辺草内付込 糸里坪並
考」(『歴史地理』第23巻6号)
- 中谷 雅治 1966「平川岡寺址の調査」(『古代文化』第
17巻1号, 古代学協会)
- 中谷 雅治 1976「恭仁宮跡昭和50年度発掘調査概要」
(『埋蔵文化財発掘調査概報』1976, 京都
府教育委員会)
- 中谷雅治・安藤信策・高橋美久二 1975「恭仁宮跡 昭
和49年度 発掘調査概要」(『埋蔵文化財発
掘調査概報』1975, 京都府教育委員会)
- 中谷雅治・上原真人 1977「恭仁宮跡 昭和51年度発掘
調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』
1977, 京都府教育委員会)
- 中谷雅治・上原真人・大槻真純 1978「恭仁宮跡 昭和
52年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘
調査概報』1978, 京都府教育委員会)
- 中谷雅治・上原真人・大槻真純 1979「恭仁宮跡 昭和
53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘
調査概報』1979, 京都府教育委員会)
- 中西 靖人 1974「大阪府柏原市高井田所在遺跡 試掘
調査報告書」(『大阪府文化財センター』
奈良大学考古学研究会 1979「文化財保護問題に関す
る一考察」(『庶務』5号, 奈良大学考古学
研究会)
- 西田直二郎 1961「洛南大住村史」

ハ

- 藤岡謙二郎・谷岡武雄 1948「山城盆地南部景観の更
遷」(『日本史研究』7)
- 堀 守 1972「飯岡車塚古墳」(平良泰久・下村晴
文編『南山城の前方後円墳』, 電谷大学考
古学資料室)

マ

- 松藤 和人 1978「同志社キャンパス内出土の土器・陶
磁器の編年」(鈴木重治・松藤和人編『同
志社キャンパス内出土の遺跡と遺物』同
志社校地内埋蔵文化財調査報告 資料編
II』, 同志社大学校地学術調査委員会)
- 真鍋 昌宏 1975「横穴研究雑考」(『すいじがい』13,
同志社大学考古学実習室)
- 万波 俊介 1972「大住車塚古墳」(平良泰久・下村晴
文編『南山城の前方後円墳』, 電谷大学考

古学資料室)

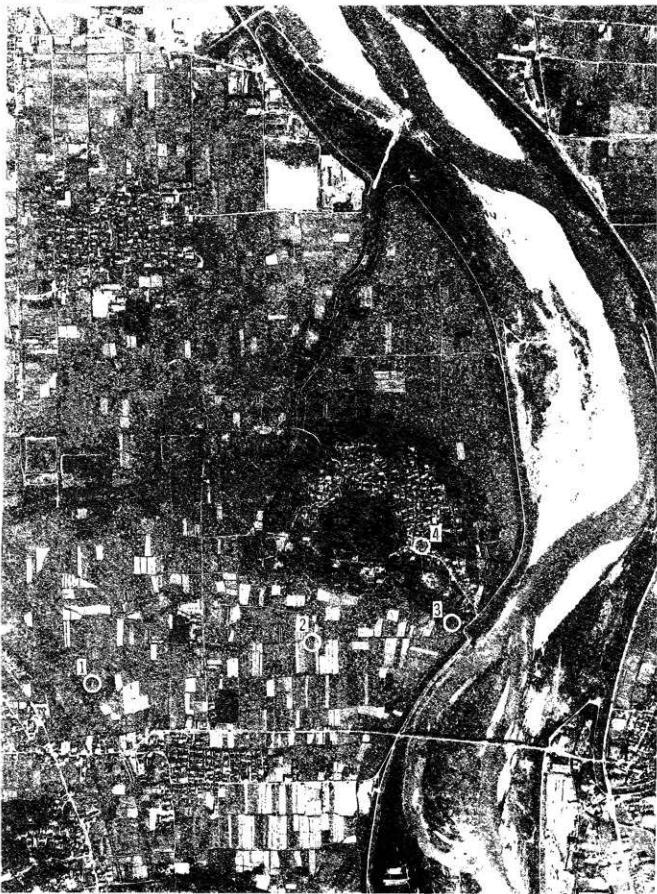
- 水野正好・福西正幸・久貝健ほか 1973『玉手山 安福寺横穴群調査概要』(『大阪府文化財調査概要』1972—5, 大阪府教育委員会)
- 村田 太平 1955『郡土田辺の歴史と伝説』(私家版)
- 村川行弘・岡田務・兼康保明・橋爪康至 1976『尼崎市金楽寺貝塚Ⅰ』(『尼崎市文化財調査報告』第11集, 尼崎市教育委員会)
- 森 浩一 1975『近畿地方の華人』(大林太良編『日本古代文化の探求 華人』, 社会思想社)
- 森 浩一編 1976『京都府綴喜郡田辺天神山遺跡』(『同志社大学文学部考古学調査記録』第5号, 同志社大学考古学研究室)
- 森 浩一・石部正志 1962『後期古墳の討論を回顧して』(『古代学研究』第30号, 古代学研究会)

- 森 浩一・大野左千夫 1976『飯岡遺跡の住居址と遺物』(森浩一編『京都府綴喜郡 田辺天神山遺跡』, 同志社大学考古学研究室)

ヤ

- 山田 良三 1968『山城久世・正道庵寺出土の瓦』(『古代学研究』52, 古代学研究会)
- 横田賢次郎・森田 勉 1978『太宰府出土の輸入中国陶磁器について』(『九州歴史資料館研究論叢』4, 九州歴史資料館)
- 吉村 幾温 1972『美濃山王塚古墳』(平良泰久・下村晴文編『南山城の前方後円墳』, 電谷大学考古学資料室)
- 吉村 正親 1977『飯岡車塚古墳発掘調査報告』(田辺町教育委員会)

図版 1. 遺跡付近航空写真



1. W地点 2. E地点 3. 飯岡横穴 4. 飯岡東原古墳

図版 2. W地点

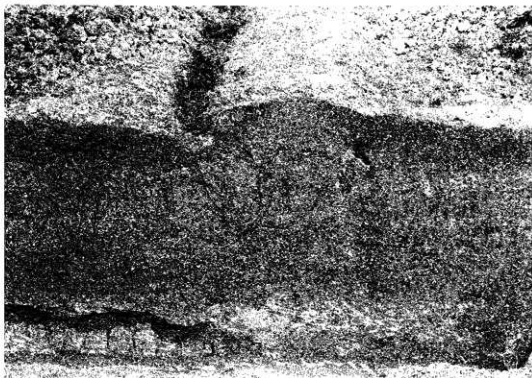


1. 主トレンチ全景(北より)

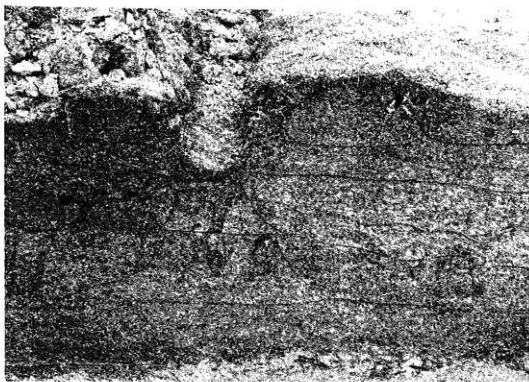


2. 主トレンチ第VI層遺物(瓦器類)出土状態

図版 3. W 地点

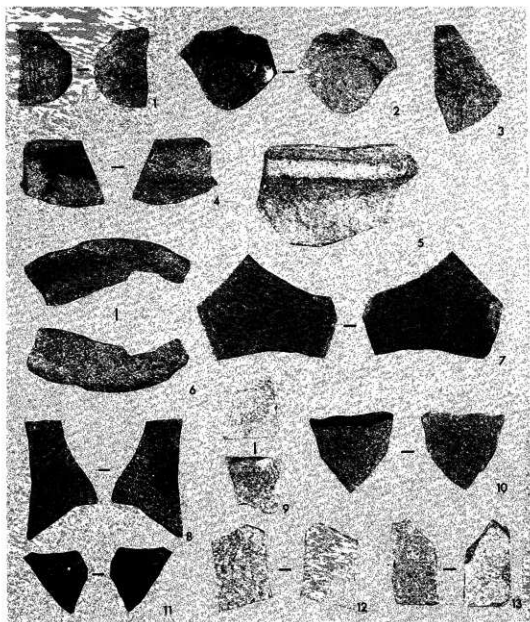


1. 主トレンチ現畦畔下東壁

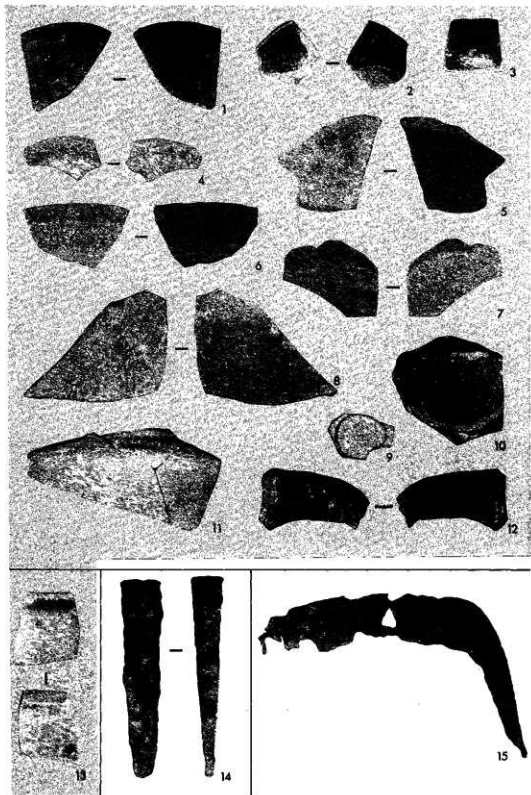


2. 畦畔遺構追跡トレンチ現畦畔東壁

圖版 4. W地点 出土遺物 (1)

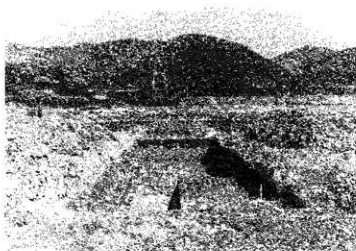


圖版 5. W地点 出土遺物 (2)



圖版 6. E 地点

1. 主トレンチ全景
(西より)



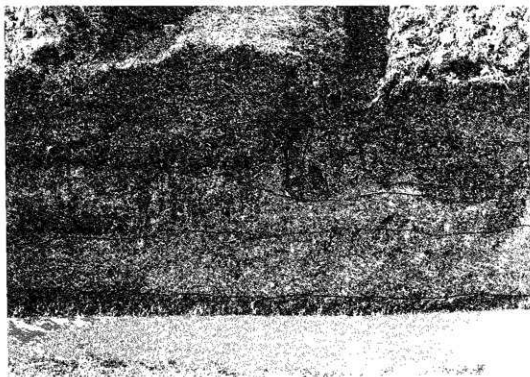
2. 東側畦畔遺構追認
トレンチ全景(南より)



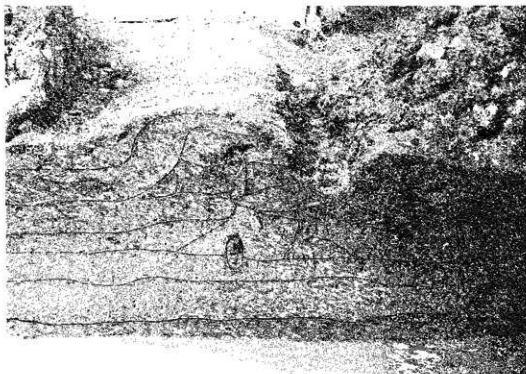
3. 西側畦畔遺構追認
トレンチ全景(南より)



図版 7. E 地点

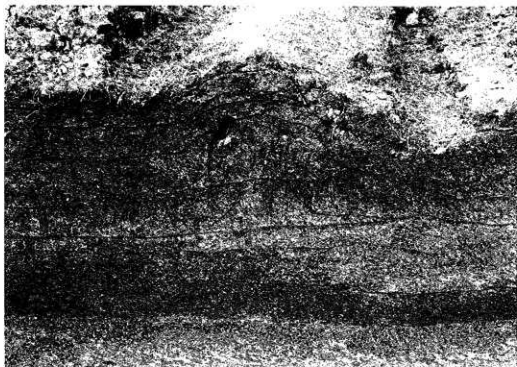


1. 主トレンチ東側現畦畔下北壁



2. 東側畦畔遺構追認トレンチ現畦畔下北壁

圖版 8. E 地点



1. 主トレンチ西側現陸畔下北壁

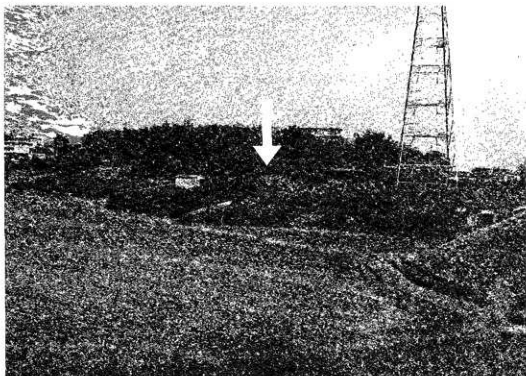


2. 西側陸畔遺構追認トレンチ現陸畔下北壁

圖版 9. E 地点 出土遺物



図版10. 飯岡横穴



1. 横穴遠景(南より)



2. 横穴近景(東より)

圖版11. 飯岡横穴



1. 開口部上層堆積状況(東より)



2. 横穴内第Ⅰ床面(開口部より)

圖版12. 飯岡横穴



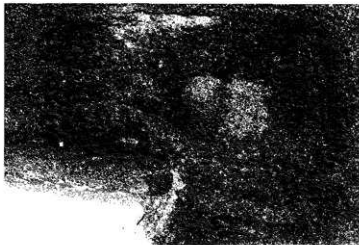
1. 横穴内遺物出土状況(1)



2. 横穴内遺物出土状況(2)

図版13. 飯岡横穴

1. 横穴奥壁の状態(開口部より)



2. 横穴西壁の状態(開口部より)



3. 横穴西壁の状態(内部より)



図版14. 飯岡横穴



1. 横穴床面のピット(開口部より)



2. 横穴床面のピット(内部より)



3. 横穴東袖部縮隘



4. 横穴東袖部拡大

圖版15. 飯岡横穴



1. 横穴開口部(東南より)

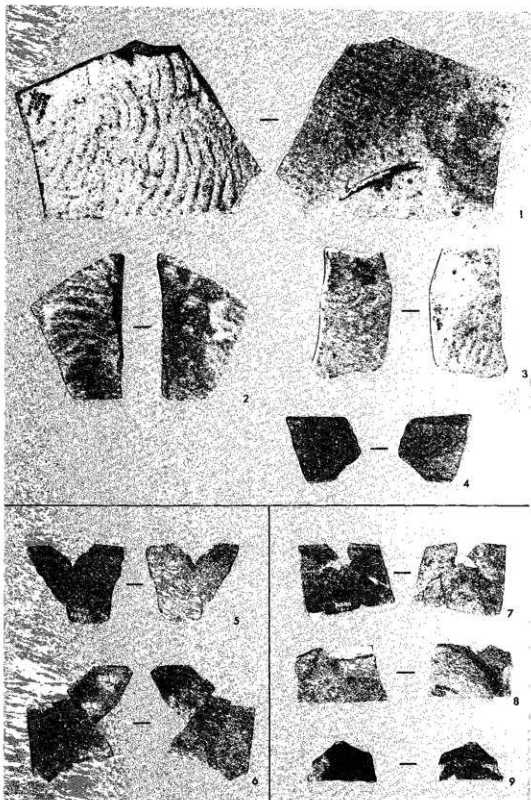


2. 横穴開口部(南より)

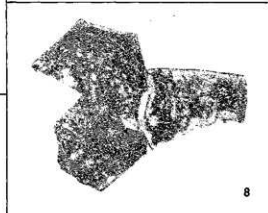
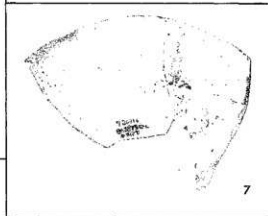
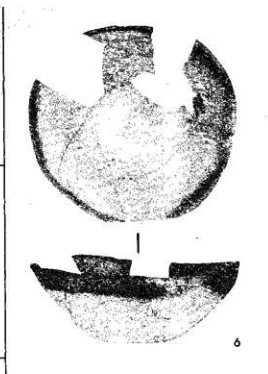
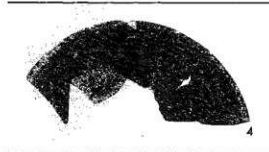
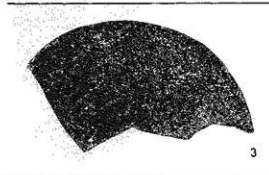
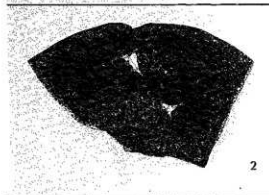
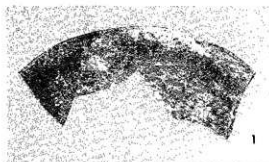


3. 横穴開口部(南西より)

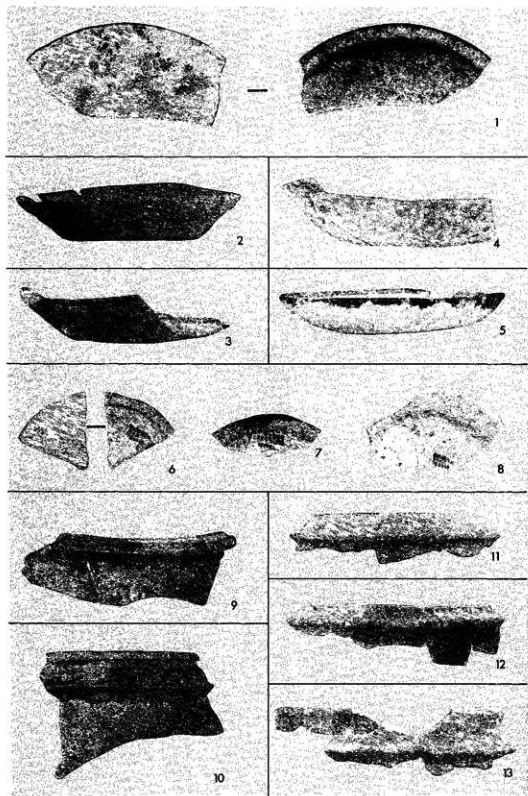
圖版16. 飯岡横穴 出土遺物 (1)



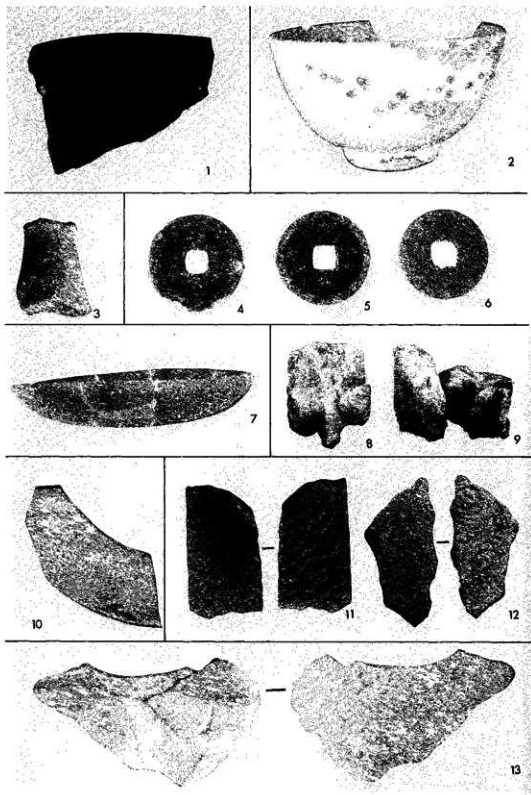
圖版17. 飯岡横穴 出土遺物 (2)



圖版18. 飯岡横穴 出土遺物 (8)



圖版19. 飯岡横穴 出土遺物 (4)



付 載

飯岡東原古墳の発掘調査

例 言

1. 本書は、京都府綴喜郡田辺町大字飯岡^{いのおか}字東京71番地、出島義和氏邸内において偶然に見えられ緊急調査した飯岡東京古墳の発掘調査報告書である。
1. 発掘調査は昭和53年3月9日より15日まで実施し、出島氏の御理解と御協力を得た。
1. 発掘調査は、京都府教育委員会と協議の上、田辺町教育委員会（教育長篠下徹一）の依頼をうけて、同志社大学校地学術調査委員会（調査主任鈴木重治）が行なった。
1. 発掘調査においては、同志社大学文学部森浩一教授より現場において御指導と助言を受けた。
1. 調査には同志社大学文学部考古学研究室の下記の学生が参加した。
坪之内 徹，山田邦和，平井幸世
1. 本書に使用した図面及び写真の作成は、調査参加者が行ない、川上圭介，木村有作，福田英人，大竹弘之の協力をうけた。
1. 本書の編集・執筆は、坪之内 徹・山田邦和が行なった。執筆分担は目次に記した通りである。
1. 遺物整理にあたっては、同志社大学文学部考古学研究室より場所の提供を受けた。
1. 現地調査および報告書作成にあたっては、下記の方々の御協力と御教示を得た。記して謝意を表したい。（所属は当時）
（奈良県立橿原考古学研究所） 石野博信，白石太一郎，中井一夫
（京都大学） 和田晴吾，上原真人
1. 宿舎については古屋敷遺跡・飯岡横穴の調査と同様に、奥西幸夫，高木友章氏のお世話を受けた。

I 位置 (第1図)

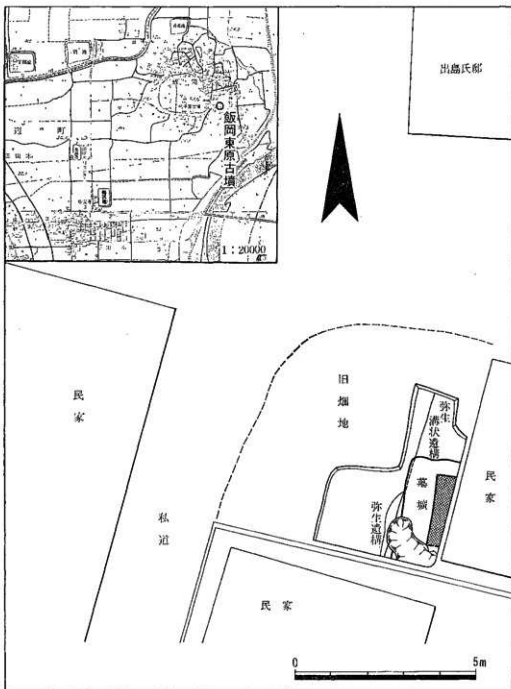
飯岡は南山城平野のほぼ中央に位置する独立丘陵である。この丘陵は「飯岡古墳群」の所在地として古くより知られ、今も栗師山・ゴロゴロ山・弥陀山・車塚・トヅカといった前・中期古墳や、今回発掘調査を行なった飯岡横穴が現存する。

飯岡東原古墳はこの飯岡丘陵の東麓、ゆるやかな傾斜を持った平坦面に所在し、現在の行政区画では京都府綴喜郡田辺町大字飯岡字東原71-7にあたる。この古墳は従米全くその存在が知られておらず、茶畑として利用されていた。東方約60mには延喜式内降間神社の社殿があり、西方約120mの丘陵頂には栗師山古墳をのぞむことができる。

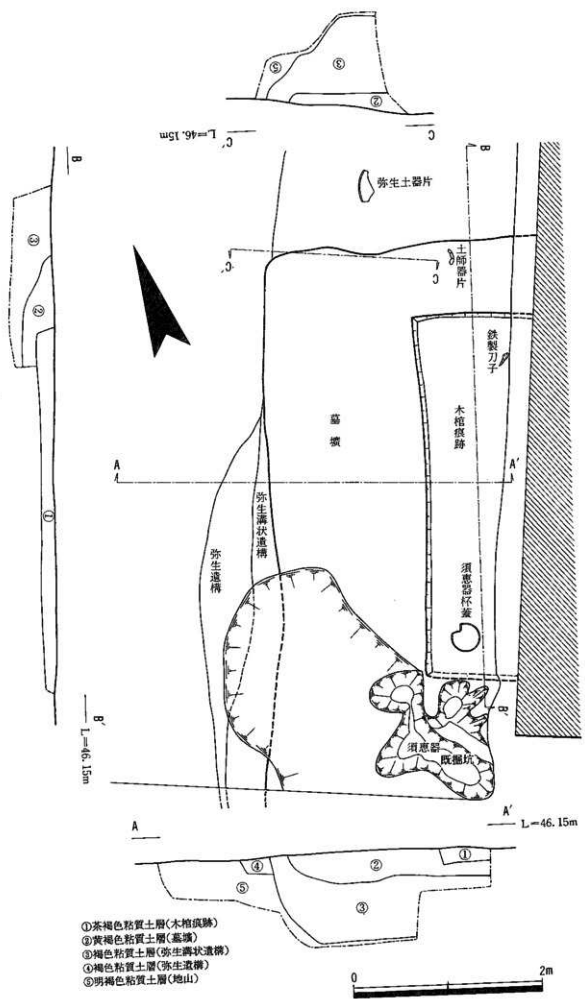
II 調査の経過

- ・1978年(昭和53年)3月8日(晴) 夕刻、出島義和氏邸より完形須恵器多数出土との報を受け、現地に急行する。ただちに発見届などの手続をとる。夜に入って京都府教育委員会堤圭三郎氏より調査の依頼を受け、明9日から調査することを決める。
- ・9日(曇) 須恵器出土地点は大きな攪乱坑となっているが、杯蓋1個のみが原位置に残されている。表面を精査、木棺の外側の輪郭及び墓墳を検出する。しかし、墓墳が不整形であり、検討を要す。墓墳北辺より土師器片、墓墳外で弥生土器片が出土する。
- ・10日(雨のち晴) 作業中止。
- ・11日(曇) 字名をとり「飯岡東原古墳」と命名する。直交する畔を残し木棺内部を発掘、棺東北隅より鉄製刀子が出土する。平面実測を行なう。
- ・12日(曇時々曇) 平板測量を行なうも悪天候に悩まされる。平面図にレベル記入を行なう。
- ・13日(曇時々曇) 通報を受けた時点で存在した松樹が移植され、その跡を精査する。墓墳は不整形ではなく、別の遺構と切り合っていることが判明する。平板測量、断面実測、写真撮影を行なう。
- ・14日(晴のち曇) 断面観察用の畔を取りはずし、清掃及び写真撮影を行なう。墓墳断面確認のため、東四・南北に2本の深掘りトレンチをいれる。その結果、墓墳に切られた溝状遺構が確認される。現地説明会を行なう。
- ・15日(晴時々曇) さらに東西方向の深掘りトレンチ1本をいれる。写真撮影、断面・平面実測、平板測量を行なう。被葬者に対して黙祷し、作業を終了する。

II 調査の経緯



付載 第1図 飯岡東原古墳位置図・平面図



附圖 第 2 圖 飯岡東原古墳 遺構実測図

Ⅲ 古 墳

1 墳 丘

削平以前は道路面からの高さ約50cm前後の畑地であったと言うが、これは東側に隣接する倉庫を隔てて昨岡神社にまで至る茶畑の残存と考えられる。したがって、この古墳築造当初の墳丘は茶畑に伴う開墾で先ず外形を失い、今また上部を削平されて、本来の墳丘は全く失われていると考えられ、墳丘の外形及びその規模を知る手がかりは全くないといつてよい。

2 内部主体（第2図、図版1・2）

内部主体はいわゆる木棺直葬であるが、木棺自体は残存せず、外側の輪郭を検出したにとどまった。東側と南側を建物で削られて墓壙や棺の幅は明らかではなく、また、発見時に須恵器が集中していた南側の棺木口付近が深く掘り返されたため、南端部の検出がやや不明瞭であるが、棺の全長は約1.95mと推定される。墓壙の残存長は3.0m、残存最大幅1.33m、棺の残存最大幅0.53mであるが、当初の規模を復原することはできない。墓壙は後述する弥生時代の溝状遺構の上面に掘り込まれており、一部でカタが重複し、墓壙内にも弥生土器の細片が認められた。

原位置をとどめると考えられる副葬品は、棺内南端近くに須恵器杯蓋1点（第3図—8）が口縁部を上にして転倒した状態で置かれ、棺の北端付近に刀子（第6図）が先端を西南に向けて置かれていた。この他に、墓壙内北端近くには土師器短頸壺（第5図）が、口縁部を下にした状態で出土している。

削平時に出土した須恵器大形壺1点、杯蓋2点、杯身4点、短頸壺2点、短頸壺蓋1点、高杯1点（第3図）は原位置が不明であるが、発見時の話や、棺の南端外の新しく掘り返された土坑から、南側の棺側にかためて置かれていたと考えられる。なお、棺内の杯蓋も、枕に転用されていた可能性以外に、棺側にあったものが転倒して棺内に落ちたとも考えられる。

3 遺物（第3～6図、図版3・4）

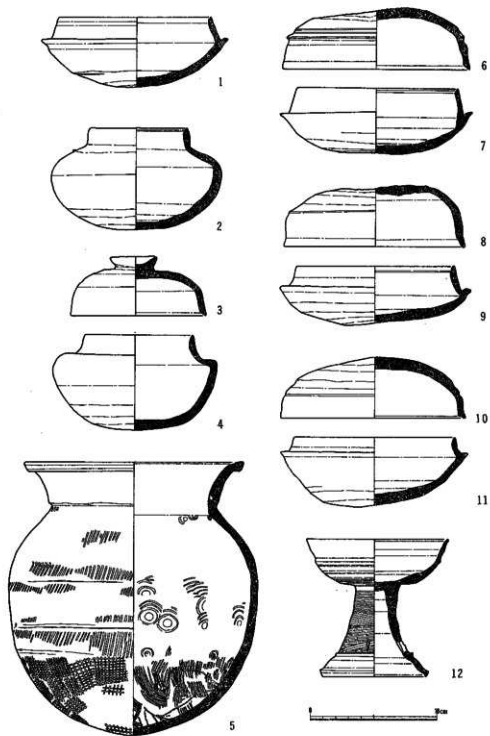
古墳に関係する遺物としては、須恵器、土師器、鉄製刀子がある。

須恵器（第3・4図、図版3・4）

杯蓋3点、杯身4点、無蓋高杯1点、短頸壺蓋1点、短頸壺2点、大形壺1点の出土をみた。

杯蓋（第3図—6、図版3—1）

口径14.8cm、径径14.0cm、器高4.8cmをはかる。天井部と体部^①の境界は突出する稜をなし、口縁部内面は内傾する凹面を呈する。天井部は右回りのロクロを使用したヘラケズリが行なわれる。体部・内面は横ナデ、天井部内面は仕上げナデが施される。胎土は1～5mmの砂粒を多量に含



付表 第3圖 出土須惠器

有し、色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

杯蓋 (第3図—8, 図版3—3)

口径 14.3cm, 稜径 13.3cm, 器高 4.8cmをはかる。天井部と体部の境界は、鈍い稜に仕上げられた部分と、浅い凹線を呈する部分がある。口縁部内面は、不明瞭な内傾する面をなす。天井部は右回りのロクロを使用したヘラケズリが行なわれ、体部・内面は横ナデが施される。胎土は少量の砂粒を含有し、色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

杯蓋 (第3図—10, 図版3—6)

口径 14.7cm, 稜径 13.8cm, 器高 4.8cmをはかる。天井部と体部の境界は、浅い凹線をなし、口縁部内面は内傾する浅い凹面を呈する。天井部上半は左回りのロクロを使用したヘラケズリが行なわれる。天井部下半・体部・内面は横ナデが施され、天井部内面は仕上げナデによって同心円文が消されている。胎土は少量の砂粒を含有し、色調は青灰色を呈する。焼成は堅緻である。

杯身 (第3図—7, 図版3—2)

口径 12.8cm, 受部径 15.2cm, 器高 5.1cmをはかる。高いちあがりとし、ほぼ水平にのびる受部を有する。受部とちあがりの境界には一条の凹線がめぐる。口縁部内面は内傾する面をつくり、浅く2段に凹む。底部は右回りのロクロを使用するヘラケズリによって、ほぼ平らに仕上げられている。体部・ちあがり・内面は横ナデが施され、底部内面には一個の同心円文がみとめられる。胎土は1~5mmの砂粒を多量に含有し、色調は淡青灰色を呈する。焼成は良好である。

杯身 (第3図—1, 図版3—8)

口径 12.0cm, 受部径 14.7cm, 器高 5.5cmをはかる。内傾するちあがりとはほぼ水平にのびる受部を有する。口縁部内面は浅い段をなす。底部は右回りのロクロを使用するヘラケズリによって、丸く仕上げられている。体部・ちあがり・内面は横ナデが施され、底部内面には仕上げナデが行なわれる。底部外面には有機質の付着がみとめられる。胎土は少量の砂粒を含有し、色調は青灰色を呈する。焼成は堅緻である。

杯身 (第3図—9, 図版3—4)

口径 12.3cm, 受部径 15.1cm, 器高 4.7cmをはかる。厚い受部を有し、器形は扁平である。受部とちあがりの境界には一条の凹線がめぐる。口縁部は丸くおさめているが、内面ににぶい一条の凹線がめぐる。底部は右回りのロクロを使用するヘラケズリによって、ほぼ平らに仕上げられている。体部・ちあがり・内面は横ナデが施され、底部内面は同心円文が仕上げナデによって消されている。胎土は少量の砂粒を含有する。色調は灰色を呈するが、0.5~1mm程度の青黒色の斑文が多数点在している。焼成は良好である。

杯身 (第3図—11, 図版3—7)

口径 12.6cm, 受部径 14.8cm, 器高 5.4cmをはかる。低いちあがりとは水平にのびる受部を有する深い杯身である。受部とちあがりの境界には浅い一条の凹線がめぐる。口縁部・受部は丸くおさめられている。底部は左回りのロクロを使用したヘラケズリにより、丸く仕上げられている。体部・ちあがり・内面は横ナデが施され、底部内面は仕上げナデによって同心円文が消さ

Ⅲ 古 墳

れている。体部・底部には僅かな自然釉が認められる。胎土は少量の砂粒を含有する。体部・底部は灰赤色、たちあがり・内面は青灰色を呈する。焼成は堅緻である。

無蓋高杯 (第3図—12, 図版3—5)

口径 11.2cm(復原), 器高 10.9cm, 脚端部径 8.2cmをはかる。外反する杯部と大きくラッパ状に開く脚部を有する長脚無蓋高杯である。口縁部内面は内傾する凹面を呈し、体部と底部の境界はわずかに突出した段をなす。脚部には小さな三角形透しを3孔あけ、透しの下部に断面三角形の稜をめぐらしている。調整は横ナデとカキ目が用いられている。杯部は、内面・体部は横ナデ、底部は全体にカキ目が施された後、中央部を除いて横ナデが行なわれる。脚部は、内面・裾部は横ナデ、筒部にはカキ目が施される。脚筒部のカキ目は下から上へ3回に分けて施され、その後、透しを開けている。杯部・脚部の接合部には、カキ目の後に横ナデが施されている。胎土は少量の砂粒を含有し、色調は暗青灰色を呈する。焼成は良好である。

短頸壺蓋 (第3図—3, 図版4—1)

口径 10.7cm, 紐径 3.7cm, 器高 4.7cmをはかる。口径に比してやや大きな、中央部の凹んだ紐を有する。口縁部内面は内傾する面をなす。天井部は左回りのロクロを使用したヘラケズリが行なわれ、体部・内面には横ナデが施されている。胎土は1~4mmの砂粒を多数含有する。色調は外面は灰白色、内面は明青灰色を呈し、外面には点状に自然釉が認められる。焼成は堅緻である。

短頸壺 (第3図—4, 図版4—3)

口径 8.6cm, 胴径 13.0cm, 器高 7.5cmをはかる。わずかに内傾しつつ直立する頸部を有し、肩の張りは強い。口縁部は丸くおさめられている。底部は左回りのロクロを使用したヘラケズリが行なわれる。底部を除く全面に横ナデが施され、底部内面には一個の同心円文が認められる。胎土は1~2mmの砂粒を含有する。色調は暗灰色を基調とするが、灰白色を呈し自然釉の認められる部分がある。焼成は堅緻である。

短頸壺 (第3図—2, 図版4—2)

口径 7.7cm, 胴径 13.4cm, 器高 8.0cmをはかる。肩の張りはなだらかで、最大径は器高のほぼ中央にくる。頸部は直立し、口縁部内面は内傾するやや深い凹面を呈する。底部は右回りのロクロを使用したヘラケズリが行なわれ、その他の部分には横ナデが施されている。胎土は1~2mmの砂粒を少量含有する。色調は暗灰色を基調とするが、頸部及び胴部上半は灰白色を呈する。肩部には蓋の口縁の一部が付着している。全体に0.5~1mmの青黒色の斑文が多数点在している。焼成は堅緻である。

大形壺 (第3図—5, 第4図, 図版3—9)

タテ半分を欠損するが、口径17.3cm, 胴径19.7cm, 器高21.6cmに復原される。ほぼ球形の胴部に外反す



付載 第4図 須恵器蓋内面拓影(実大)

る頸部を有し、口縁部は肥厚する。体部には平行叩きが行なわれた後に、4条の横方向のナデが施されている。底部は格子状叩きが行なわれている。内面は、上半部は同心円文叩きが磨り消され、下半部は連弧文状叩きが施される。胎土は粗い砂粒を少量含有し、色調は青灰色を呈する。焼成は堅緻である。

土師器短頸壺（第5図）

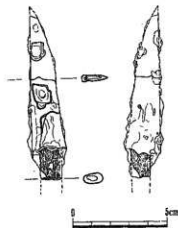
小破片のため観察は困難であり、傾きや口径も正確には復元できないが、口径 8.5cm 程度の小形短頸壺と考えられる。胎土は少量の砂粒を含有し、色調は赤褐色を呈する。

鉄製刀子（第6図、図版4—4）

現存長 8.6cm、刃長 7.7cm（復原）、刃幅 1.8cm、柄幅 1.1cm をはかる。背闊部に 0.4cm、刃闊部に 0.3cm の段がつくと思われる。基部には柄の木質が残存している。



付載第5図 出土土師器



付載第6図 出土刀子

IV 弥生時代の遺構と遺物

1 溝状遺構（第2図）

埋葬施設の調査終了後、墓竈と木棺部分を東西方向に2ヶ所深掘りした結果、断面によって溝状遺構の一方のカタと考えられる落ち込みを確認し、遺構面を再度精査することによって平面においてもこれを追認することができた。溝状遺構は発掘範囲に限られていたために、西側のカタと南北方向の長さ約 4.6m を検出しただけであり、さらにこの遺構に切られた別の遺構も存在するが性格は不明である。溝状遺構は削平によって上部が失われていると考えられるが、残存の深さは 2.10m、溝底は断面で見ると限りでは平坦面をなしている。溝内には黄色土の小ブロックを含有する暗黄褐色粘質土が堆積していた。

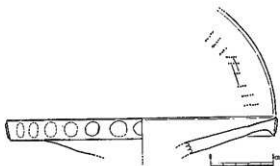
遺物は遺構上面の木棺直葬の墓竈外北側に弥生土器の器台口縁部破片が出土し、本来の溝内遺物と考えられる。その他にも弥生土器の細片、サヌカイト片が若干出土した。

2 遺物

弥生土器器台（第7図、図版4—5）

全周の約4分の1を残す器台受部破片である。口径 21.5cm 程度に復原されよう。胴部の形態は

IV 弥生時代の遺構と遺物



付載 第7図 出土弥生土器

不明であるが、受部は大きく外反し、口縁部外面は幅 1.6cmの面をなす。口縁部外面には直径 1.2cm前後の円形浮文が付けられ、内面には一列 5点の刺突列点文が施される。全面にナデ調整が施され、特に口縁部内外面には横方向のナデが行なわれる。胎土は長石・雲母粒を多量に含み、色調は淡赤褐色を呈する。以上の特徴からみて、畿内第V様式に属するものと考えられる。

その他、溝状遺構の埋め土は弥生土器の破片を包含していたが、いずれも細片であり、観察は不可能である。

V ま と め

今回の調査は極めて限られた範囲のものではあったが、弥生・古墳両時期にわたる遺構を検出することができた。

飯岡東原古墳より出土した須恵器はそれぞれ若干の型式差を持ち、中には細部にやや古式の特徴を残しているものも存在する。これらの須恵器の生産地は明らかにし難いが、飯南窯址群須恵器編年(森浩一氏編年)^⑤のⅡ期及びⅢ期前半に併行するものと考えられる。したがって、古墳自体は6世紀前半の築造とすることができよう。

従来飯岡丘陵では、薬師山・ゴロゴロ山・秀陀山・車塚・トヅカなど前期から中期初頭にいたる大型の円墳、前方後円墳が知られているだけであったが、飯岡東原古墳の発見によって、規模の小さい後期古墳も存在していたことが明らかになった。飯岡丘陵が早くから民家や茶畑・竹藪などによって開墾されていたことを考えると、東原古墳のような木棺直葬の小規模のものが他にも多数埋もれていることが考えられる。しかも、その年代が一般に言われる群集墳盛行期に先立つものであることは、南山城の古墳を再検討する上で、重要な資料を提供したといえよう。飯岡丘陵の古墳に関しては、トヅカ以後、飯岡横穴に至るまでの古墳の分布と編年を復元的に考察してゆくことが今後の課題であろう。

東原古墳の下層から発見された弥生時代の遺構は、この地点の東南約 50m で発掘された住居^⑥址をはじめとする飯岡弥生遺跡の範囲がさらに拡がることを明らかにしたものである。この地域は民家や竹藪のために、土器の散布など地上での遺跡の確認には限度がある。したがって東原古墳の場合と同様、この地域の開発に際しての学術的な調査が望まれるのである。

註① 須惠器の手法、部分の用語は、下記によった。

田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(『研究論集』第10号、平安学園考古学クラブ)1966年、P 35～37。

② 森浩一・石部正志「後期古墳の討論を回顧して」(『古代学研究』第30号、古代学研究会)1962年、P 2～3。

伊達宗泰・森浩一「生活の変化～土器」(近藤義郎・藤沢長治編『日本の考古学Ⅴ 古墳時代(下)』、河出書房)1966年、P 207。

③ 若井武俊「山城国相楽郡高両郡の古墳」(『考古界』第5巻1号、考古学会)1906年。

梅原末治「飯ノ岡ノ古墳」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊、京都府)1920年。

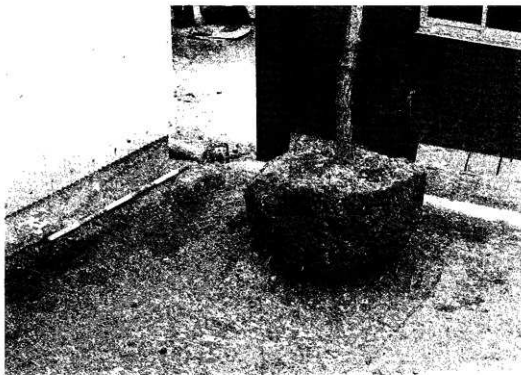
梅原末治「山城飯岡トツカ古墳」(『山城飯岡車塚古墳』(『日本古文化研究所報告』9、日本古文化研究所)1938年。

下村晴文「飯喜郡～歴史的環境」、堀守「飯岡車塚古墳」(平良泰久・下村晴文編『南山城の前方後円墳』、『竜谷大学考古学資料室研究報告Ⅰ』、竜谷大学文学部考古学資料室)1972年。

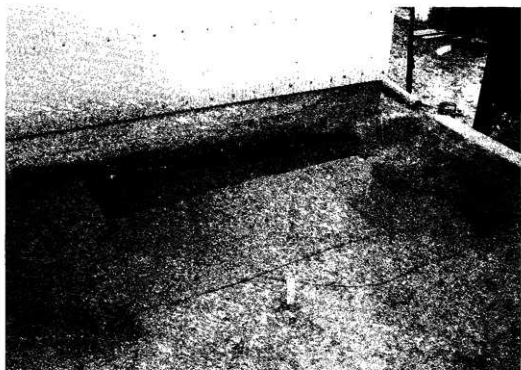
吉村正親『飯岡車塚古墳 発掘調査報告一一周勝部調査一』(田辺町教育委員会)1977年。

④ 森浩一・大野左千夫「飯岡遺跡の住居址と遺物」(森浩一編『京都府飯喜郡田辺天神山弥生遺跡』同志社大学文学部考古学調査記録』第5号、同志社大学考古学研究室)1976年。

付載 図版 1. 飯岡東原古墳



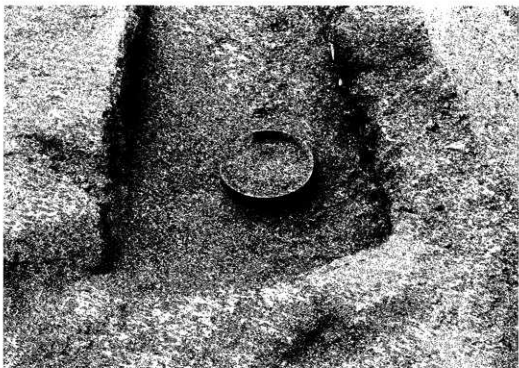
1. 葬壇前の状況(西北より)



2. 内部主体(西より)

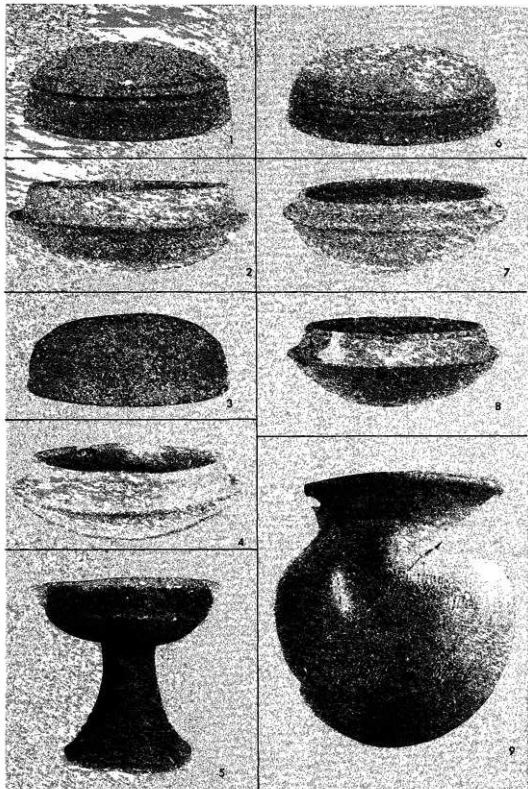


1. 内部主体(北より)



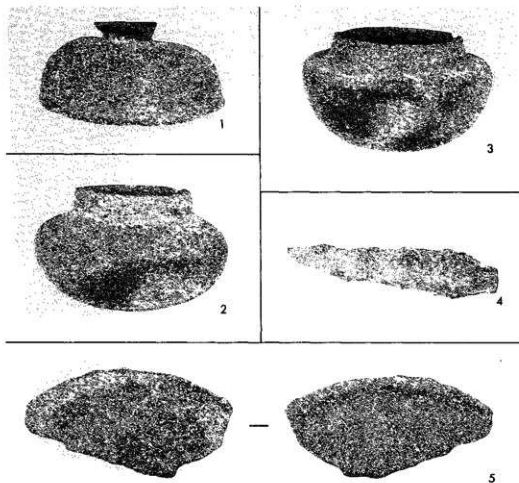
2. 須恵器出土状況(南より)

付録 図版 3. 飯岡東原古墳 出土遺物 (1)



Copyrighted material

付載 圖版 4. 飯岡東原古墳 出土遺物 (2)



あ と が き

当遺跡の発掘調査を検討しはじめてから、すでに2カ年が過ぎようとしている。森浩一教授が当初指摘したように、戦前から発掘調査が積み重ねられている田辺町内であっても、問題点を多く残している地域だけに、発掘調査にあたっては資料の記録化に万全の体制が要請されたわけである。

したがって本報告書には、記録化した資料を極力集録すべく配慮したが、古墳時代から中・近世におよぶ性格の異なる遺跡群を調査の対象としたことで、焦点がしぼれなかったきらいがあるが、緊急調査の社会的要請には考古学的に応え得たものと確信している。

もとより考古学的には多くの課題を残して、将来に期待するところは大きい。課題のいくつかについて挙げれば、

1. 飯岡古墳群の形成とその終末
2. 山城における横穴をめぐる諸問題
3. 横穴群被葬者の社会的位置の検討
4. 南山城における条里制遺構の考古学的検討
5. 中・近世の水田地割についての考古学的検討

などは、本報告書に関連する重要な課題といえよう。

なお、田辺町埋蔵文化財調査報告書第1集として刊行するはこびとなった本書が、文化財の保護と活用の上でも、また考古学の進展に寄与することができたとすれば、発掘担当者として望外の俸せである。文字通り泥にまみれた発掘現場を想うにつけ、調査に参加した同志社大学考古学研究室の学生諸君が企画した現地説明会に参集された多くの田辺町民に、意のとどくことを願ってやまない。

(鈴木重治)

京都府綴喜郡

田辺町埋蔵文化財調査報告書 第1集

編 集 同志社大学校地学術調査委員会
京都府綴喜郡
発 行 田 辺 町 教 育 委 員 会
発行年月 1980年3月
制 作 ビクトリー社